

筥崎土地区画整理に伴う埋蔵文化財調査報告VI

# 箱崎 28

- 箱崎遺跡第40・49次調査報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第949集

2007

福岡市教育委員会

宮崎土地区画整理に伴う埋蔵文化財調査報告VI

HAKO

ZAKI

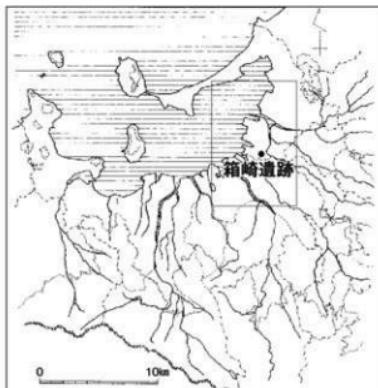
箱

崎

28

- 箱崎遺跡第40・49次調査報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第949集



遺跡略号 調査番号

HKZ-40 0318

HKZ-46 0434

HKZ-49 0544

2007

福岡市教育委員会





## 巻頭図版 1

箱崎遺跡第40次調査  
19区全景写真（上が南）

ラジコンヘリコプターによる上空からの撮影。  
夏と冬の2回に分けて撮影したものをデジタルモザイクで結合したため、北半と南半で遺構面の色調が異なっている。



## 卷頭図版 2

箱崎遺跡第40次調査19区

箱崎遺跡第46次調査21区

出土遺物

第1段左 19区SX-01出土双鳥鏡 (25) 背面

右 19区SX-01出土双鳥鏡 (25) 鏡面

第2段左 19区SX-01出土双鳥鏡 (25) 鏡の下より出土の櫛

右 19区K-1出土イスラム陶器底部片 (130)

第3段左 19区SC-116出土軒平瓦 (142)

右 19区遺構外出土陶質土器片 (279)

第4段左 21区S-18出土綠釉陶器底部片裏面 (212)

右 21区SC-4出土綠釉陶器口縁部片

## 序

福岡市には多くの文化財が分布しており、本市では文化財の保護、活用に努めています。しかし本市では各種の開発事業も多く、やむを得ず失われる文化財については記録保存のための発掘調査を行っています。

本書は筥崎土地区画整理に先立って平成15～17年度に調査された箱崎遺跡第40・46・49次調査の報告です。発掘調査の結果、古墳時代と平安～鎌倉時代を中心とした遺構・遺物が見つかりました。箱崎遺跡は筥崎宮を中心とした古代から中世の遺跡であります。これまで遺跡の内容については不明の部分が多くありましたが、今回の調査成果により箱崎遺跡の全体像が少しづつ明らかになってきました。本調査は箱崎遺跡の南端にあたる地点で行われ、箱崎遺跡で初めて葺石をもった円墳などが発見されました。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野での一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から資料整理にいたるまでご理解とご協力をいただいた、福岡市土木局筥崎連続立体開発をはじめとする関係各位に対し、心から感謝の意を表する次第です。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会

教育長 植木 とみ子

## 例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が菅崎土地区画整理事業に伴い、東区馬出1丁目地内において2003年7月1日～2004年3月31日にかけて行った箱崎遺跡第40次調査、2005年2月21日～3月29日にかけて行った箱崎遺跡第46次調査、2005年4月5日～2006年2月15日にかけて行った箱崎遺跡第49次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書で使用する方位は真北である。
3. 本報告で出土した遺物・図面の整理作業は石水久美子・小田敬子・木山啓子・佐々木涼子・須原久美子が行った。
4. 本書で使用した遺構実測図は佐藤一郎・赤坂亨（福岡市教育委員会埋蔵文化財第一課）、藤野雅樹・中村理が作成した。
5. 本書で使用した遺物実測図は赤坂・上方高弘（埋蔵文化財第一課調査員）、櫻田恵里奈、安武憲史（福岡大学学生）が作成した。
6. 本書で使用した遺構・遺物実測図は赤坂、上方、櫻田、安武、石水、谷直子が製図した。
7. 本書で使用した写真は、赤坂・上方が撮影した。
8. 本書の執筆・編集は赤坂が行った。
9. 本書での引用文献および遺物の分類名の参考にした文献は巻末に付した。
10. 報告書抄録は裏表紙に記載した。
11. 本報告の記録類、出土遺物は収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管されるので活用されたい。

遺跡調査番号	0318		遺跡略号	HKZ-40	
地　番	福岡市東区馬出1-30		分布地図番号	34-2639	
調　査　区	19区	調査期間	2003.7.1～2004.3.31	調査面積	2167m <sup>2</sup> (19区)
遺跡調査番号	0434		遺跡略号	HKZ-46	
地　番	福岡市東区馬出1-30		分布地図番号	34-2639	
調　査　区	21区	調査期間	2005.2.21～3.29	調査面積	273.16m <sup>2</sup> (21区)
遺跡調査番号	0544		遺跡略号	HKZ-49	
地　番	福岡市東区馬出1-30		分布地図番号	34-2639	
調　査　区	22区 23区 24区 25区	調査期間	2005.4.5～4.27 2005.5.9～6.27 2006.1.10～2.15	調査面積	78.27m <sup>2</sup> (22区) 238.6m <sup>2</sup> (23区) 141.0m <sup>2</sup> (24区) 37.2m <sup>2</sup> (25区)

## 本文目次

I.はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査体制	2
II. 箱崎遺跡の地理的環境と歴史的展開	3
III. 調査の記録	
19区	7
21区	56
22区	64
23区	68
24区	74
25区	77
IV. 結語	79

## 挿図目次

第1図	箱崎遺跡と周辺遺跡 (1/50,000)	4
第2図	箱崎遺跡内調査地点位置図 (1/5,000)	5
第3図	宮崎区画整理事業地内 発掘調査区位置図 (1/800)	6
第4図	箱崎遺跡第40次調査19区遺構配置図 (1/300)	8
第5図	1号墳実測図 (1/100)	10
第6図	1号墳土器R-1・2出土状況図 (1/20)	11
第7図	2号墳実測図 (1/100) および周溝土層図 (1/20)	12
第8図	2号墳石室実測図 (1/30)	13
第9図	1・2号墳出土遺物実測図 (1/3・1/4)	14
第10図	1号方形周溝墓実測図 (1/100) および周溝内遺物出土状況・周溝土層断面図 (1/40)	16
第11図	2号方形周溝墓実測図 (1/100) および周溝内遺物出土状況・周溝土層断面図 (1/40)	17
第12図	1号方形周溝墓出土遺物実測図 (1/3・1/4)	18
第13図	2号方形周溝墓出土遺物実測図 (1/3・1/4)	19
第14図	1号石室SX-21実測図 (1/60)	21
第15図	2号石室SX-72および3号石室SX-90実測図 (1/30)	22
第16図	4号石室SX-187実測図 (1/20)	23
第17図	SX-41・SX-42・SX-87実測図 (1/40)	24
第18図	SX-41・SX-42・SX-87出土遺物実測図 (1/2・1/3)	25
第19図	SC-88・SC-87実測図 (1/60・1/40)	27
第20図	SK-51・SC-76実測図 (1/40・1/60)	28
第21図	SC-100・SC-115・SC-183実測図 (1/40)	29
第22図	SC-104・SC-128・SC-129・SC-175実測図 (1/40)	30
第23図	SC-132・SC-167・SC-176実測図 (1/40)	31

第24図	SC-133実測図 (1/40) .....	32
第25図	SC出土遺物実測図その1 (1/3・1/4) .....	35
第26図	SC出土遺物実測図その2 (1/3・1/4) .....	36
第27図	SK-17・SK-58・SK-74・SK-183・P-465実測図 (1/20・1/40) .....	39
第28図	SK-51出土高杯実測図 (1/3) .....	40
第29図	SK出土遺物実測図 (1/3) .....	41
第30図	SE-3・11・23・25・26実測図 (1/60) .....	43
第31図	SE-24・27・49・56実測図 (1/60) .....	44
第32図	SE-77・78実測図 (1/60) .....	45
第33図	SE-101・102・103・109実測図 (1/60) .....	46
第34図	SE-116・117・119実測図 (1/60) .....	47
第35図	SE-134・139・171・172・184実測図 (1/60) .....	48
第36図	SE出土遺物実測図 (1/3) .....	49
第37図	ピット・攪乱・遺構外出土遺物 (1/3・1/4) .....	51
第38図	19区出土瓦・鈴鋲型 (1/3・1/4・1/6) .....	52
第39図	19区出土鈴鋲型・管状土錐・石製品・温石・石鍋写真 (縮尺不定) .....	53
第40図	箱崎遺跡第46次調査21区遺構配置図 (1/125) .....	57
第41図	SC-1・4・7・8・9・10・SX-5・SK-10 (1/40・1/60) .....	59
第42図	SX・SC出土遺物実測図 (1/2・1/3) .....	60
第43図	SK・SD・ピット・遺構外出土遺物実測図 (1/2・1/3) .....	61
第44図	箱崎遺跡第49次調査22区遺構配置図 (1/80) .....	64
第45図	SX-2実測図 (1/40) およびSX-2出土鉄刀実測図 (1/4) .....	65
第46図	SC-1・SE-5・7実測図 (1/60) および22区出土遺物実測図 (1/3) .....	66
第47図	箱崎遺跡49次調査23区遺構配置図 (1/80) .....	69
第48図	SC-4・5・6実測図 (1/60・1/20) .....	70
第49図	SD-10・SK-11実測図および土層図 (1/60) .....	71
第50図	23区出土遺物実測図 (1/3) .....	72
第51図	箱崎遺跡第49次調査24区遺構配置図 (1/80) .....	74
第52図	SX-2実測図 (1/40) .....	75
第53図	箱崎遺跡第49次調査25区遺構配置図 (1/80) .....	78
第54図	25区出土遺物実測図 (1/3) .....	78
第55図	1号墳と唐原遺跡ST-01・02 (1/400) .....	79

## 表 目 次

第1表	菅崎土地区画整理事業地内調査一覧表.....	1
第2表	箱崎遺跡第40次調査19区方形堅穴状遺構および井戸出土遺物計測表.....	37
第3表	第39図19区出土鈴鋲型・管状土錐・石製品・温石・石鍋観察表.....	54
第4表	箱崎遺跡第40次19区・第46次21区・第49次24区出土銭一覧.....	54
第5表	箱崎遺跡第40次調査19区主要遺構座標値一覧.....	55

## 図 版 目 次

- 卷頭図版 1 箱崎遺跡40次調査  
19区全景（上が南）
- 卷頭図版 2 箱崎遺跡40次調査19区  
箱崎遺跡46次調査21区出土遺物
- 第1段左 19区SX-01出土双鳥鏡（25）背面  
右 19区SX-01出土双鳥鏡（25）鏡面
- 第2段左 19区SX-01出土双鳥鏡（25）  
鏡の下より出土の櫛  
右 19区K-1出土イスラム陶器底部片（130）
- 第3段左 19区出土軒平瓦  
右 19区遺構外出陶質器片（279）
- 第4段左 21区S-18出土綠釉陶器底部片裏面  
21区S-18出土綠釉陶器口縁部片
- PL1.1 箱崎遺跡第40次調査19区遠景  
(南から)  
-2 箱崎遺跡第40次調査19-a区空撮  
(上が南)
- PL2.1 箱崎遺跡第40次調査19-b区空撮  
(上が南)  
-2 1号墳（北から）
- PL3.1 1号墳葺石西側（南西から）  
-2 1号墳葺石北東側（北東から）
- PL4.1 1号墳葺石東側（南から）  
-2 1号墳R-1、2（西から）
- PL5.1 2号墳（東から）  
-2 2号墳石室完掘時（東から）
- PL6.1 2号墳石室床面（北から）  
-2 2号墳石室床面（西から）  
-3 2号墳石室床面（東から）
- PL7.1 1号方形周溝墓北東角部（南から）  
-2 1号方形周溝墓R-2・3出土状況  
(南東から)  
-3 1号方形周溝墓R-1出土状況（西から）
- PL8.1 1号方形周溝墓R-5・6出土状況  
(南東から)  
-2 1号方形周溝墓南側溝（南東から）  
-3 1号方形周溝墓南東角部土器出土状況
- PL9.1 2号方形周溝墓東角部（南西から）  
-2 2号方形周溝墓南角部（北から）
- PL9.3 2号方形周溝墓北側溝（北東から）
- PL10.1 1号石室床面および腰石（南から）  
-2 1号石室検出状況（南から）  
-3 1号石室完掘状況（南から）
- PL11.1 2号石室（西から）  
-2 3号石室（南東から）
- PL12.1 4号石室（西から）  
-2 SK-51高杯出土状況（南東から）
- PL13.1 SX-01鏡出土状況（南から）  
-2 SX-01完掘状況（西から）  
-3 SX-02（南から）
- PL14.1 SC-88（北から）  
-2 SC-76（北から）  
-3 SC-81（南から）
- PL15.1 SC-81完掘状況（南から）  
-2 SC-100（南東から）  
-3 SC-11完掘状況（東から）
- PL16.1 SC-104（東から）  
-2 SC-132・176（北西から）  
-3 SC-133（北西から）
- PL17.1 SC-175（西から）  
-2 SC-183（西から）  
-3 SK-17（北から）
- PL18.1 SK-51完掘状況（南東から）  
-2 SK-57（西から）  
-3 SK-58（北西から）
- PL19.1 SK-74（南東から）  
-2 P-465（東から）  
-3 SE-109・SX-187（北から）
- PL20.1 SE-03（南から）  
-2 SE-11（東から）  
-3 SE-22（北西から）  
-4 SE-23（南西から）  
-5 SE-23・25（西から）  
-6 SE-23井筒（西から）
- PL21.1 SE-24（北から）  
-2 SE-26（北から）  
-3 SE-27（南から）  
-4 SE-49（北から）

PL.21-5 SE-56 (西から)  
-6 SE-70 (北東から)  
PL.22-1 SE-77 (北東から)  
-2 SE-78 (西から)  
-3 SE-101 (北から)  
-4 SE-102 (西から)  
-5 SE-103 (西から)  
-6 SE-113 (北西から)  
PL.23-1 SE-116・SC-115 (南東から)  
-2 SE-117 (北東から)  
-3 SE-119 (東から)  
-4 SE-134 (西から)  
-5 SE-138 (南から)  
-6 SE-184 (北東から)

PL.24-1 21区全景 (南から)  
-2 S-14全景 (北から)  
PL.25-1 SX-5人骨出土状況 (南東から)  
-2 SC-1 (西から)  
-3 SC-4 (東から)  
PL.26-1 SC-6 (西から)  
-2 SC-7 (西から)  
-3 SC-8 (南から)  
PL.27-1 SC-9 (北東から)  
-2 SC-11 (西から)  
-3 SK-10 (東から)

# I. はじめに

## 1. 調査にいたる経過

福岡市土木局菅崎連続立体開発事務所換地課長より平成6（1994）年8月24日付土管第476号により同市教育委員会文化財部埋蔵文化財課長宛に東区馬出・箱崎・菅松・博多区吉塚本町における福岡都市計画事業 菅崎土地区画整理事業（事業面積：27.8ha）に伴う埋蔵文化財事前審査についての依頼が行われた（事前審査番号：7-1-50）。

これを受けて埋蔵文化財課では平成6年度から継続して試掘調査を行い、遺跡の有無およびその範囲について回答を行った。その後文化財保護に関する協議をもつたが、遺跡が認められた範囲については原則として調査対象とするが、公園緑地箇所および新設道路、拡幅道路が既存道路と重複する箇所については調査対象から除外している。ただし、既存道路が事業区画内に取り込まれる場合は調査対象とした。本調査は平成11年度から開始し平成17年度年度に終了した。整理作業は平成14年度から開始し平成18年度に終了した。なお、これらにかかる費用は事業主体である福岡市土木局菅崎連続立体開発事務所が負担した。

同事業に伴う発掘調査は平成11年度より箱崎遺跡第20次調査として始められ調査区は着手順に事業地内を通して1区、2区、と呼称した。これに対し調査次数は箱崎遺跡全体の調査次数と同様に管理され、年度が替わる毎に新しい調査次数が付けられている（第1表）。本報告はそのうち19区・21区・22区・23区・24区・25区（いずれも東区馬出1丁目30）の発掘調査に関するものである。

現地での発掘調査にあたっては福岡市土木局菅崎連続立体開発事務所をはじめとする関係の皆様から発掘調査について御理解いただきと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して深い感謝の意を表します。

第1表 菅崎土地区画整理事業地内調査一覧表

調査年度	調査次数	調査番号	調査区名	調査面積 (m <sup>2</sup> )	報文
平成11年（1999年）	第20次	9969	1区	254	
			2区	300	「箱崎14」第767集（2003）
			3区	328	
平成12年（2000年）	第22次	0022	4区	2,473	「箱崎17」第811集（2004）
			5区	503	「箱崎22」第852集（2005）
			6区	1,180	「箱崎21」第815集（2004）
			7区	1,296	
			8区	1,859	「箱崎23」第853集（2005）
			9区	100	「箱崎21」第815集（2004）
平成13年（2001年）	第26次	0108	10区	820	
			11区	542	
			12区	715	
			13区	1,203	「箱崎27」第948集（2007）
			14区	450	
			15区	208	
			16区	1,279	「箱崎26」第914集（2006）
			17区	600	
平成14年（2002年）	第30次	0210	18区	1,000	「箱崎27」第948集（2007）
			19区	2,167	「箱崎28」第949集（2007）
平成15年（2003年）	第40次	0318	20区	3,995	「箱崎27」第948集（2007）
			21区	273	「箱崎28」第949集（2007）
			22区	78	
平成16年（2004年）	第46次	0434	23区	239	
			24区	141	
			25区	37	
					「箱崎28」第949集（2007）

## 2. 調査体制

箱崎遺跡第40次調査 筑崎区画整理19区（2003.7.1～2004.3.31）

事業主体 土木局

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課（現 埋蔵文化財第一課）

調査総括 山口譲治（埋蔵文化財課長 現 埋蔵文化財第一課長）

池崎譲二（前任 埋蔵文化財課調査第2係長）

山崎龍雄（現任 埋蔵文化財第一課調査係長）

調査庶務 御手洗清

鈴木由喜

調査担当 佐藤一郎（前 埋蔵文化財課調査第2係、現 福岡市博物館）

赤坂 亨（前 埋蔵文化財課調査第2係、現 埋蔵文化財第一課調査係）

調査作業 萬スミヨ 脇田栄 水田ミヨ子 杉村百合子 為房紋子 二宮白人 酒井康恵

播磨博子 山口慶子 米倉國弘 指原始子 草場恵子 甲斐康完 池美佐江 村井藤枝

大崎宏之 村山巳代子 萩野須美子 桜澤勤 田中智子 保坂由美子 川野美恵子

古長博美 西村登 桃野千代美 福田操 熊本文伸 西村寿美枝

箱崎遺跡第46次調査 筑崎区画整理21区（2005.2.21～3.29）

事業主体 土木局

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課（現 埋蔵文化財第一課）

調査総括 山口譲治（埋蔵文化財課長 現 埋蔵文化財第一課長）

池崎譲二（前任 埋蔵文化財課調査第2係長）

山崎龍雄（現任 埋蔵文化財第一課調査係長）

調査庶務 御手洗清

鈴木由喜

調査担当 佐藤一郎（前 埋蔵文化財課調査第2係、現 福岡市博物館）

赤坂 亨（前 埋蔵文化財課調査第2係、現 埋蔵文化財第一課調査係）

調査作業 水田ミヨ子 杉村百合子 酒井康恵 米倉國弘 草場恵子 池美佐江 村井藤枝

大崎宏之 村山巳代子 西村登 西村寿美枝

箱崎遺跡第49次調査 筑崎区画整理 22区(2005.4.5～4.27)、23区(2005.5.9～6.27)、24・25区(2006.1.10～2.15)

事業主体 土木局

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課（現 埋蔵文化財第一課）

調査総括 山口譲治（埋蔵文化財課長 現 埋蔵文化財第一課長）

池崎譲二（前任 埋蔵文化財課調査第2係長）

山崎龍雄（現任 埋蔵文化財第一課調査係長）

調査庶務 御手洗清

鈴木由喜

調査担当 佐藤一郎（前 埋蔵文化財課調査第2係、現 福岡市博物館）

赤坂 亨（前 埋蔵文化財課調査第2係、現 埋蔵文化財第一課調査係）

調査作業 水田ミヨ子 杉村百合子 酒井康恵 米倉國弘 草場恵子 池美佐江 村井藤枝

大崎宏之 村山巳代子 西村登 西村寿美枝

## II. 箱崎遺跡の地理的環境と歴史的展開

博多湾沿岸には箱崎砂層とよばれる古砂丘が形成されている。この箱崎砂層の微高地に立地する遺跡に藤崎遺跡・西新遺跡・博多遺跡群・吉塚祝町遺跡・堅粕遺跡群・吉塚遺跡群などが知られている。箱崎遺跡はこの砂丘の北端に位置し、東側を宇美川、北側を多々良川が流れている。第2図は現在までの本調査及び試掘調査で確認された砂丘面の標高を基に、旧地形の等高線の推定線を、現況図に重ねたものである。現在の宮崎宮の境内東側が標高3.5mを測るピークが存在し、現在の大学通りの東側に平行して、標高3.0mの尾根が北東方向にのび、その東西は緩やかな緩斜面となっている。南側は箱崎遺跡第27次調査付近で浅い谷が貫入し砂丘の鞍部が形成されている。箱崎遺跡は西側が標高20m付近、北側が九州大学箱崎キャンパス南側、西側がJR鹿児島線高架線路、南側が吉塚駅北側の現西鉄バス吉塚営業所までとなっている。しかし箱崎遺跡北端の調査では遺構が濃密に確認され、九大敷地内まで延びることが想像されており、西側では第46次調査20区で砂丘端部が確認されたが、一部はJR鹿児島線高架線路下まで延びることが予想されており、また南端も本書で後述するように延びる可能性がある。現在の箱崎遺跡の範囲は現況の地形、道路、線路などを基にしているが、細かい視点で見るとまだまだ不確定な部分も多い。調査の進展を待ちたい。

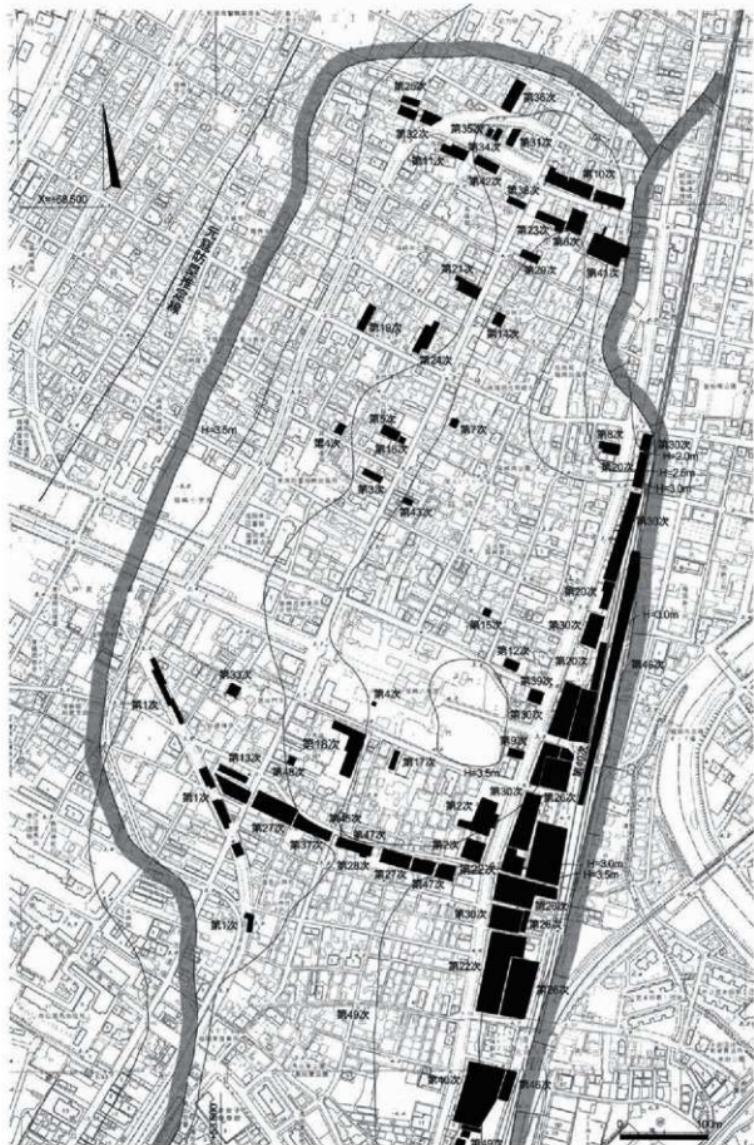
箱崎遺跡では2007年3月現在までに56次の調査が実施されている。宮崎区画整理事業にともなう箱崎遺跡の発掘調査は、現在の妙見通りとJR鹿児島線の高架線路の間を、JR箱崎駅南側からJR吉塚駅北側までの範囲で行われ、南北約900m東西最大幅70mの南北に継長の形状で行われた。宮崎区画整理事業にともなう箱崎遺跡の発掘調査は7年に渡って行われ、合計次数7次、総調査区25区、合計調査面積約2240m<sup>2</sup>を数える。この区画整理により箱崎遺跡の広い面積が結果的に破壊されることになったが、従来不明であった、箱崎遺跡西・南側の状況が判明した。また、箱崎遺跡中央部では検出事例の少ない古墳時代の遺構が、この宮崎区画整理事業地内の調査区内で数多くみられ、箱崎遺跡の成立を考える資料を提供することとなった。以下、宮崎区画整理事業にともなう箱崎遺跡の発掘調査成果を中心に箱崎遺跡の歴史的展開をみていく。

箱崎遺跡で最も古いとされる遺物として、第6次調査出土の磨製石斧や第20次調査3区出土の刻目突帯文の甕片があるが、遺構に伴うものではない。最も古い遺構は箱崎遺跡第30次調査16-B区で出土した弥生時代後期初頭の甕棺墓ST-2005である。16区は宮崎区画整理事業地内発掘調査区では北端付近であり、8次・20次3区とも近接しており、今後この付近から該期の遺構が検出される可能性がある。古墳時代に入ると遺構の数が増加し、前期の方形・円形周溝墓が26次4区、40次19区で、中期・後期の古墳が40次19区で検出されている。また古墳時代の住居跡も密度は薄いながらも、8次・20次1区・2区・30次16区で検出している。古墳時代においては、古墳・周溝墓は箱崎遺跡西南部に、住居跡は箱崎遺跡西部に集中するという分布の偏りがみられる。

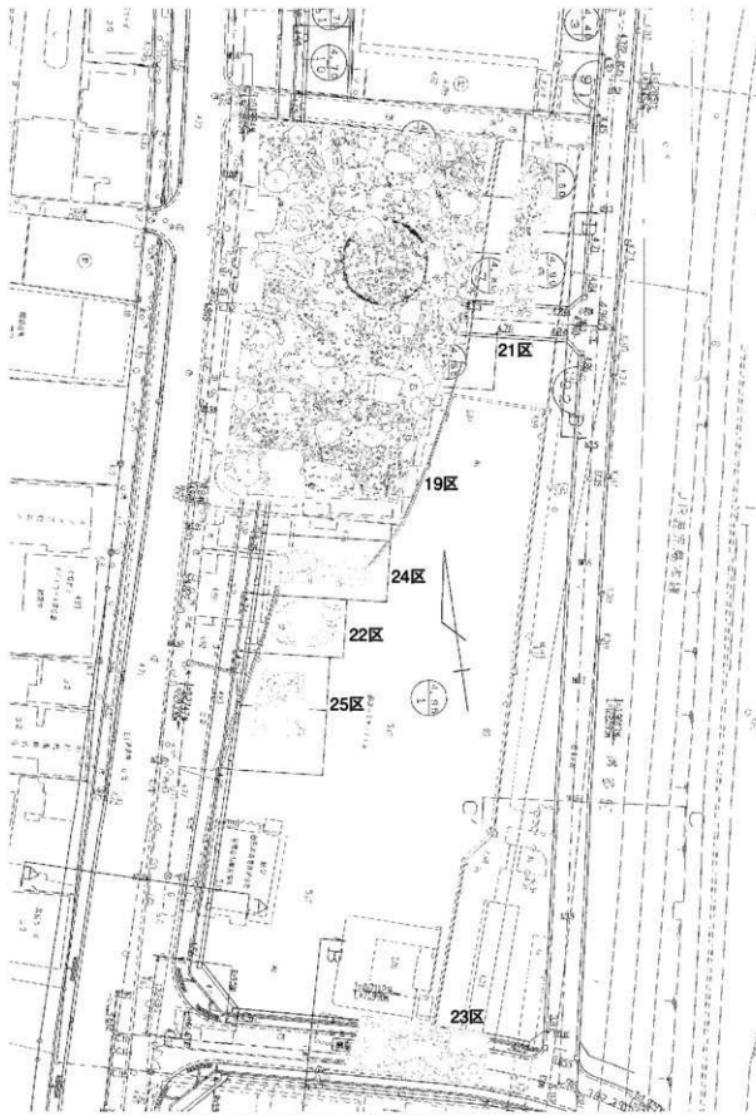
古墳時代以降、箱崎遺跡は数世紀にわたる空白の時期を迎えるが、10世紀になると再び遺構が出現する。10世紀の遺構は第2次・22次・26次・30次・40次検出されている。この契機は延喜式内社である宮崎宮の創建によるものと考えられている。宮崎宮は總波郡大分宮を遷座して創建されたものである。創建年代については、延喜初年（901）説（廣渡1999）と延長元年（923）説（川添1981）とあるが、少なくとも10世紀第1四半期に創建されたことは間違いないようである。11世紀代も引き続き宮崎宮東側を中心とした遺構の分布がみられるが、12世紀以降、箱崎遺跡西側緩斜面でも遺構が検出されるようになり、箱崎遺跡全体に集落が広がる。この後中世を通じて箱崎遺跡では集落が営まれ続け、近世の箱崎町屋へと継続していくようである。



第1図 箱崎遺跡と周辺遺跡 (1/50,000)



第2図 箱崎遺跡内調査地点位置図 (1/5,000)



第3図 篠崎区画整理事業地内 発掘調査区位置図 (1/800)

### III. 調査の記録

19区

#### 1. 概要

箱崎遺跡の南端に位置する。JR鹿児島本線と妙見通りに挟まれた菖崎土地区画整理事業地の南端にある。北側で箱崎遺跡第22次調査（菖連4区）、第26次調査（菖連6区）の調査が行われている。

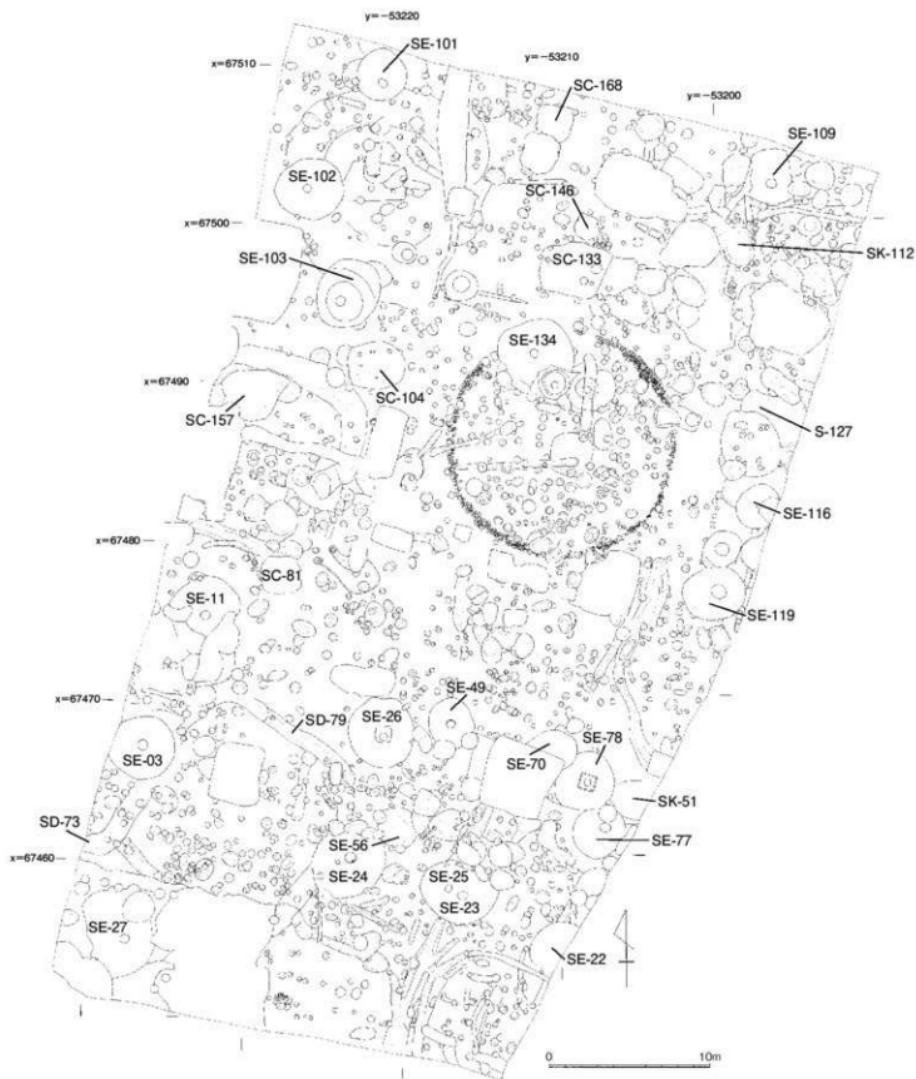
調査は廃土を場内で処理する必要性があったため、調査地を二分割し、その南半分（菖連19a区、約1000m<sup>2</sup>）から着手することとした。2003年6月26日現地協議および周辺住民への発掘調査開始の告知を行う。7月1日よりバックホウによる19a区の表土すき取りを開始。試掘調査の成果に基づき約150cmの表土層を除去した。遺構面は地山である明褐色砂層で設定した。7月10日に作業員を入れ、まず調査区を囲む柵づくりや、廃土土山のブルーシートによる養生など条件整備を行った。7月17日より遺構検出を開始。7月22日より人力による遺構掘削を行う。7月・8月・9月はおもに遺構の掘削を行った。途中何度か台風の来襲があり、その度遺構壁面の崩壊やテント内への浸水などが起った。またこの夏は非常に猛暑であり、夏期の作業の進捗ははかばかしくなかった。8月22日に福岡県主催の平成15年度文化財指導者講習会の参加者43名が箱崎遺跡第40次調査19区の遺跡見学に来訪された。10月上旬までに人力掘削をほぼ終えて、10月9日にラジコンヘリによる19a区の空中写真撮影を行った。10月21日に19a区の調査を終了し、バックホウにより埋め戻した。19a区終了後、担当である赤坂が箱崎遺跡内の別地点の調査（箱崎遺跡第42次調査）を行う必要が生じたため19区の調査は2003年10月～2004年12月まで中断した。2004年12月から18区の調査を終えた佐藤が先行して調査地北半分（菖連19b区、約1100m<sup>2</sup>）の調査に着手し、その後赤坂も合流し19b区は発掘担当者2名の体制で行った。遺構掘削前、高所作業車を用いての1・2号墳、1・2号方形周溝墓の全景撮影とラジコンヘリによる19b区の空中写真撮影を行った。測量完了後、19b区をバックホウによって埋め戻した。2004年3月31日に調査終了し撤収した。

弥生～古墳時代の方形周溝墓2基、葺石を有する円墳1基、石室床面の残存した円墳1基、小石室1基、10～13世紀の井戸、方形竪穴状遺構・土坑・柱穴、時期不明な石室状遺構2基を確認した。出土遺物は弥生土器・古墳時代～中世土器・輸入陶磁器・直刀・鉄鎌・鎌などで出土量コントナ48箱分であった。また擾乱よりイスラム陶器残片が1点出土した。

#### 2. 遺構と遺物

19区では19a区から出土した遺構にはS-1から、ピットにはP-1から順に遺構名を付した。19b区調査時にはS-100から遺構名を付した。また遺構掘削前の遺構検出した段階で平板測量を行いその成果を元に遺構番号を付した。その後遺構掘削時に遺構でないことが確認されたものや、砂地のため、崩壊して分からなくなってしまったものが含まれる。これら理由のため一部の遺構番号には欠番が生じている。本報告ではSのあとに遺構の種類を示す記号を付し、また1桁の番号には0を付し2桁になるようにし、SE-03のように示した。また1号墳と2号墳についてはSの番号は付さず、調査時点から1号墳・2号墳と遺構名をつけ、遺物の取り上げを行った。

本報告では1号墳・2号墳、1号・2号方形周溝墓から記述を始め、石室および石室状遺構（SX）、中世墓（SX）、古墳時代竪穴式住居（SC）、古代末～中世方形竪穴状遺構（SC）、土坑（SK）、井戸（SE）とSXの後はアルファベット順に遺構の種別に記述を行い、同種の遺構の中では時代順に記述を、同時代のなかでは遺構番号の少ないものから記述を行った。



第4図 箱崎遺跡第40次調査19区遺構配置図（1/300）

## 古墳・方形周溝墓

### 1号墳（第5図 PL2-1・3-1・3-2・4-1・4-2）

調査区中央に位置している。1号墳の中心点座標はX=67486.2,Y=-53209.5である。19b区の重機による表土すき取り時に葺石の一部を検出した。葺石最下段間の距離はA-A'間で14.4m、B-B'間で14.8mを測り、埴丘はおよそ直径15mを測り、平面正円形を呈する円墳である。周溝は検出されなかった。確認のため周溝とベルトを残して周囲を掘り下げ、土層を確認したが1号墳土層1層も地山が変化したものであり周溝覆土ではなかった。主体部は確認されず、堀り方の痕跡も認められなかつた。

葺石は北側で井戸SE134に切られるがほぼ一周する。葺石の残存状態は北東側が最も良好で、両西側の残存状況が不良。北東側を参考にすると1号墳の葺石の構築方法は、葺石は最下段に直径20-40cmの大きな石を腰石として一周させ石留めとし、腰石より上を20cmや小さめな石を用いて不規則に斜面に敷き詰めたようである。葺石の傾斜は23-25°と緩やかである。埴丘がこの角度であるならば、北東側埴丘内で4つ検出された石は位置・大きさの両面から考えて、段塁2段目の最下段の腰石の可能性がある。以上の状況から1号墳は2段以上の段築があり、1段・2段目に葺石が敷かれ、1段目と2段目の間に幅50-60cmの平坦面があったと推定する。葺石1段目の標高は3.3-3.6mであり、2段目腰石の標高は3.7mである。

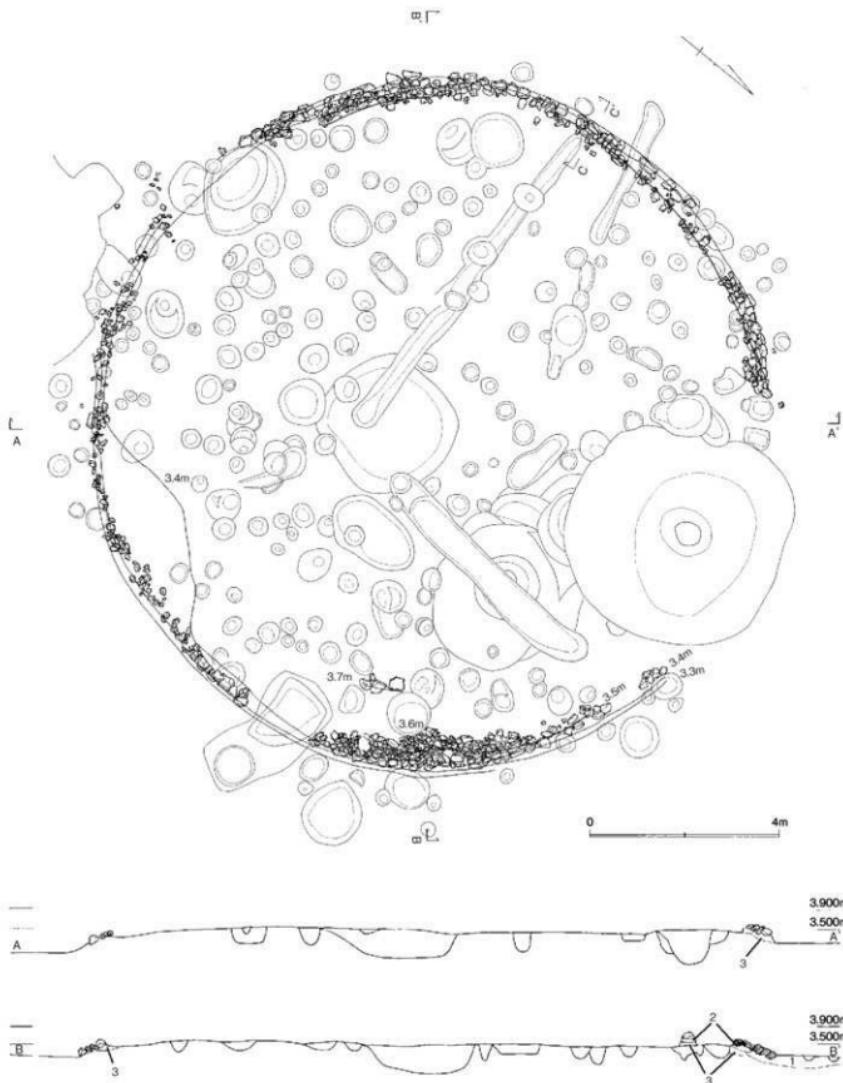
葺石西側で最下段の葺石に接するように壺R-2(1)、鉢R-1(2)が出土した（PL-42）。1は地面に置いたものが潰れたような出土状況である。2は底面を下にして据え置かれていた。確實に古墳に伴う遺物はこの2点のみである。1は古式土師器壺、取上番号R-2。口径12.5cm、胴径16.35cm、器高18.4cmを測る。胎土は1mm前後の石英・長石粒をごくわずかに含む。精良。色調は外：浅黄橙色(10yr8/3)、黒斑：黃灰色(2.5y4/1)、内：淡橙色(5yr8/4)。焼成良好。胴部外面ハケ。胴部内面ヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。底部外面はハケ後ナデ。底部内面は指オサエ。2は古式土師器鉢、取上番号R-1。口径14.2cm、底径7.1cm、器高5.5cmを測る。胎土は2mm以下の石英・長石粒をわずかに含む。色調は外：浅黄橙色(10yr8/3)、内：橙色(2.5yr6/6)。焼成良好。外面ナデ。内面ヘラケズリ。底面見込ナデ。1が重藤分類壺C類であり、時期は重藤編年IV期である（重藤・西1995）。古墳の時期もここに求められる。

1号墳周辺の遺構の配置をみると古代末～中世前期の遺構である方形堅穴状遺構は1号墳のほぼ中央のSC175以外は、葺石から2-3m距離を開け、1号墳を避けるように作られている。これに対し、中世の遺構である井戸は、前述したようにSE134が葺石を壊しているほか、埴丘内に合計3基の井戸が構築されている。古代末～中世前期までは古墳埴丘2段目まで残存している状態であったのが、中世前期以降2段目が削平されたのであろう。

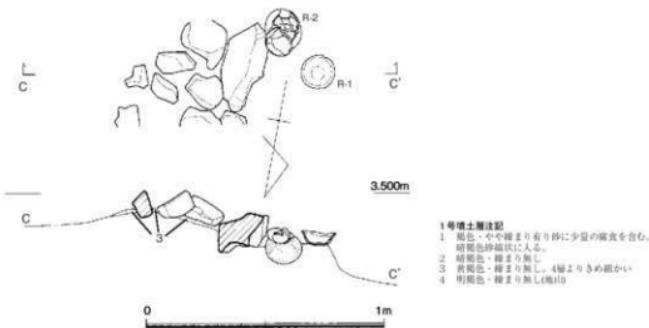
### 2号墳（第7・8・9図 PL5-1・5-2・6-1・6-2・6-3）

調査区北西に位置している。2号墳の中心点座標はX=67502.5,Y=-53221.1である。19b区表土すき取り時および最初の遺構確認時には確認されず、周囲の遺構掘り下げ時に石室の床面が残存していることを確認し、その後石室床面精査と周溝の掘り下げを行った。周溝内側上端は平面略円形を呈し直径7.8mを測る。埴丘の痕跡は残存しておらず、葺石の出土もなかった。

周溝南側底面が標高29m、周溝北側底面標高3.1mである。周溝は西側が中世の遺構や搅乱に切られていて不明な部分があるが、西南側に近づくに従って浅くなっている。周溝は全周するかもしくは西南側で途切れる可能性がある。周溝は南側で大きく外側に広がり平面円形～楕円形を呈する。周溝



第5図 1号填実測図 (1/100)



第6図 1号墳土師器R-1・2出土状況図 (1/20)

の幅は北側で2.3m、西側2.5m、南側4mを測る。また周溝南東側から直径40-50cm大の石が出土している。石室の構築石材の一部であろうか。周溝土層はベルトA-A' とB-B' で確認した。周溝覆土はA-A' の1・2・3層とB-B' の3・4層が該当し暗褐→褐→黄褐色の砂であり、明黄褐色の地山砂層と明確な差は認められない。周溝から2号墳に関する遺物は出土しなかった。

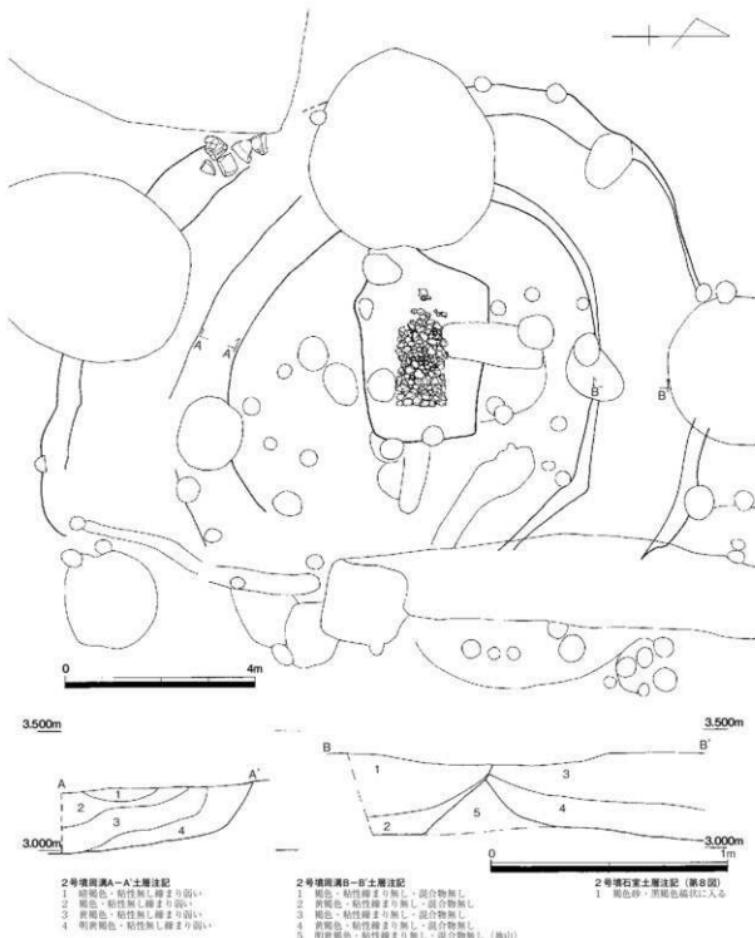
石室場方は東側が広く西側の狭い長方形へ台形を呈する。床面の周囲は床面より深く地山を掘り込んでいるが、石材の抜き跡の痕跡は確認できなかった。石室床面は2×1mの平面長方形を呈するが、西側短辺が東側短辺よりも若干長い。東側短辺には床石に乱れがある。石室の主軸はほぼ東西方向である。調査後床石を外し床石下の土層を観察した。地山と2号墳石室1層とに分層できたが、黒褐色の縞が床石の鉄分が地山砂層に浸透沈着したもの可能性があり、地山を水平に削りだした上に直接床石を敷き詰めたものと推定される。

石室床面から直刀（3）と鎌（4）が、石室床面から堀方内に落ち込んだ状態で鉄鎌（5-12）、刀子（13）が出土した。直刀は石室床面北東側に位置し、石室床面主軸にはほぼ平行に出土した。床石直上にあり原位置を保っている。鎌は石室中央やや北寄りで、直刀と平行に出土した。刃先が南を向き、刃が北側・棟が南側である。床石直上にあれば原位置を保っている。鉄鎌と刀子は石室の腰石を抜かれたときにその穴に落ち込んだものであろう。鉄鎌は一群で出土している。

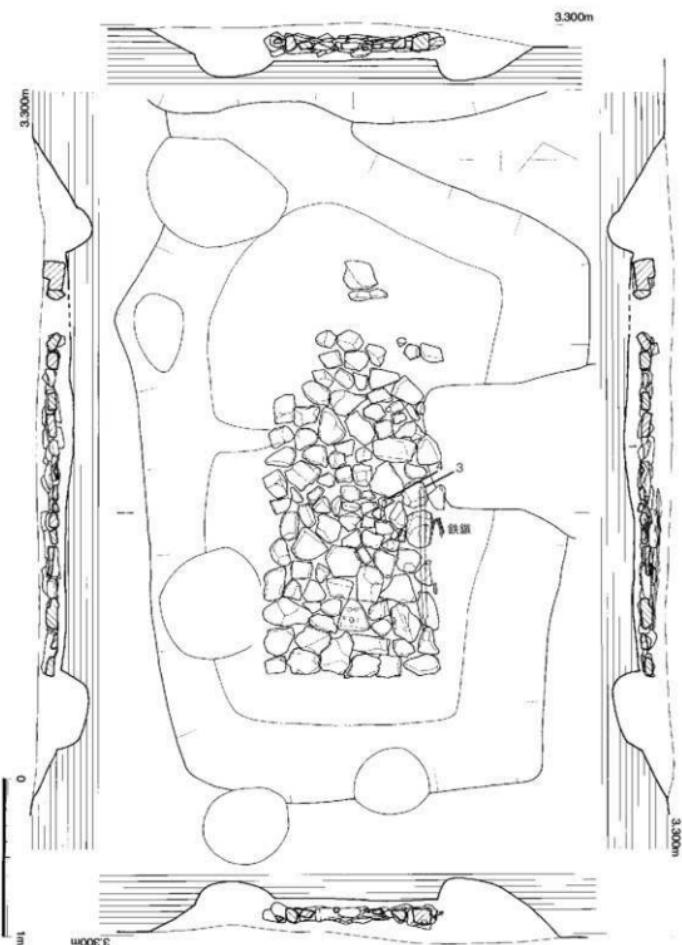
3は片闘の直刀。残存状況良好で切先から茎尻まではほぼ完存している。全長95.8cm、刃部長68.2cm、茎長27.6cm、刃部最大幅3.6cm、棟幅11mmを測る。闘は直角に切り込まれた刃闘のみである。幅0.8cmである。X線写真で確認したところ、茎には目釘穴が2孔、茎尻から4.7cm・12.8cmの位置にある。うち刃部側の目釘穴には、角釘が刀身からやや斜めに刺さって残存している。また床石に接していた側にむけて刀身全体が湾曲している。茎は茎尻に向かって幅を狭める形態をもつ。茎尻は棟側にむけて湾曲しているが本来の形状ではなく、ひび割れが進んだ結果湾曲したものである。木質は茎と刀身の一部に残存している。副葬時は木製の鞘に納めていたのである。

4は片刃鎌。全長14.9cm、刃部最大幅2.3cm、厚2mmを測る。先端部が欠損し、刃部は直線気味だがやや内湾している。端部を1cmほど折り曲げて柄との装着部としている。

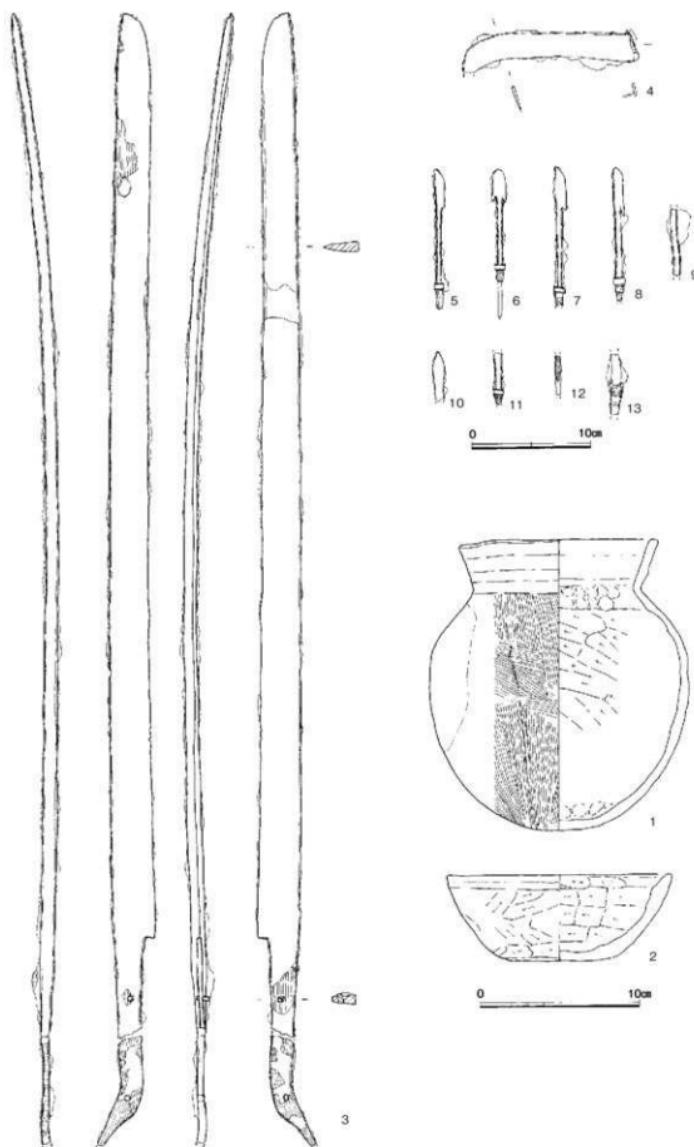
鉄鎌は8本出土している。5は片刃の長頭鎌。取上番号No.1。茎部が欠損。残存長11.8cm、刃部幅0.8cmを測る。棘荒被か？脇抉の逆刺をもつ。茎に木質が残る。6は両刃の長頭鎌。取上番号No.2。ほぼ



第7図 2号填実測図 (1/100) および周満土層図 (1/20)



第8図 2号填石室実測図 (1/30)



第9図 1・2号填出土遺物実測図 (1/3・1/4)

全体が残存している。全長12.6cm、刃部幅0.9cmを測る。棘笠被か？腸抉の逆刺を左右にもつ。鎬はない。茎に木質が残る。7は片刃の長頭鎌。取上番号No.3。茎部が欠損。残存長11.6cm、刃部幅0.9cmを測る。棘笠被か？腸抉の逆刺をもつ。茎に木質が残る。8は片刃の長頭鎌。取上番号No.4。

茎部が欠損。残存長11.1cm、刃部幅0.8cmを測る。棘笠被か？腸抉の逆刺をもつ。茎に木質が残る。9は長頭鎌 頭部残片。残存長5.6cmを測る。両刃の長頭鎌 織身部の残片。取上番号No.9。頭部以下が欠損。残存長4.2cmを測る。闊・逆刺はない。10は長頭鎌 頭部残片。残存長4.2cmを測る。棘笠被か？11は長頭鎌 頭部残片。残存長4.3cmを測る。茎部木質が残る。12は長頭鎌 茎部残片。残存長3.3cmを測る。13は刀子？ 残片。残存長5.2cmを測る。木質が残る。

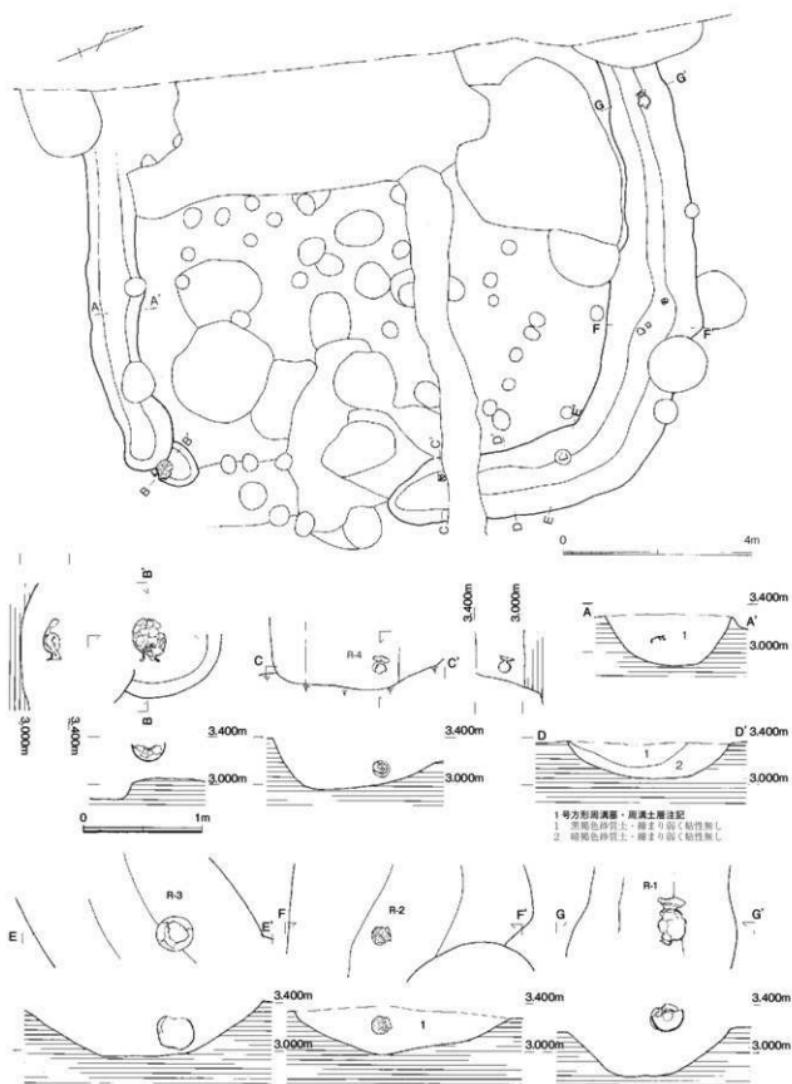
須恵器が出土していないため、長頭鎌が2号墳の時期を特定する材料となる。2号墳出土長頭鎌は尾上元規氏の分類（尾上1993）ではいずれも長頭鎌であり、腸抉柳葉式B類（6）、片刃箭式（5・7・8）、鑿箭式（9）に該当する。片刃箭式は逆刺のある古い型式でありⅡ期の様相を持つのに対し、腸抉柳葉式B類はⅢ期から出現する型式である。2号墳の鐵鎌群はⅡ期～Ⅲ期の移行期であると考え、2号墳出土遺物の時期は6世紀後半代と推定する。

1号墳より北西の方角にあり、1号墳中心と2号墳中心の距離は20m、1号墳葺石と2号墳周溝外側上端間の距離は4mである。また1号墳葺石と2号墳周溝外側上端間の距離は5mであり、2号墳は両者の存在を意識した立地になっている。2号墳構築時には1号墳墳丘および1号方形周溝墓の周溝が残存している状態だったのではないだろうか。

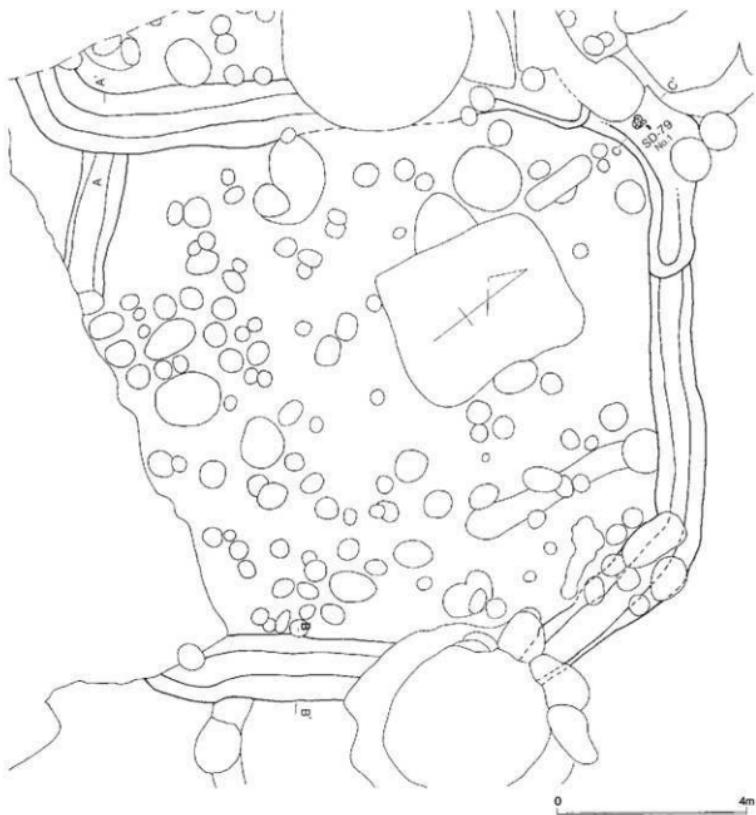
#### 1号方形周溝墓（第10・12図 PL7・8）

調査区中央西寄りで検出した。主体部無し。周溝西側が調査区外に延びる。周溝の幅1.9m。東西10m以上×南北12.9mで平面正方形を呈する。周溝南東隅で周溝が切れている。検出当初は方形周溝墓としての認識がなかったため、SD13・SK14・SD85・SD79として遺構番号を付けている。

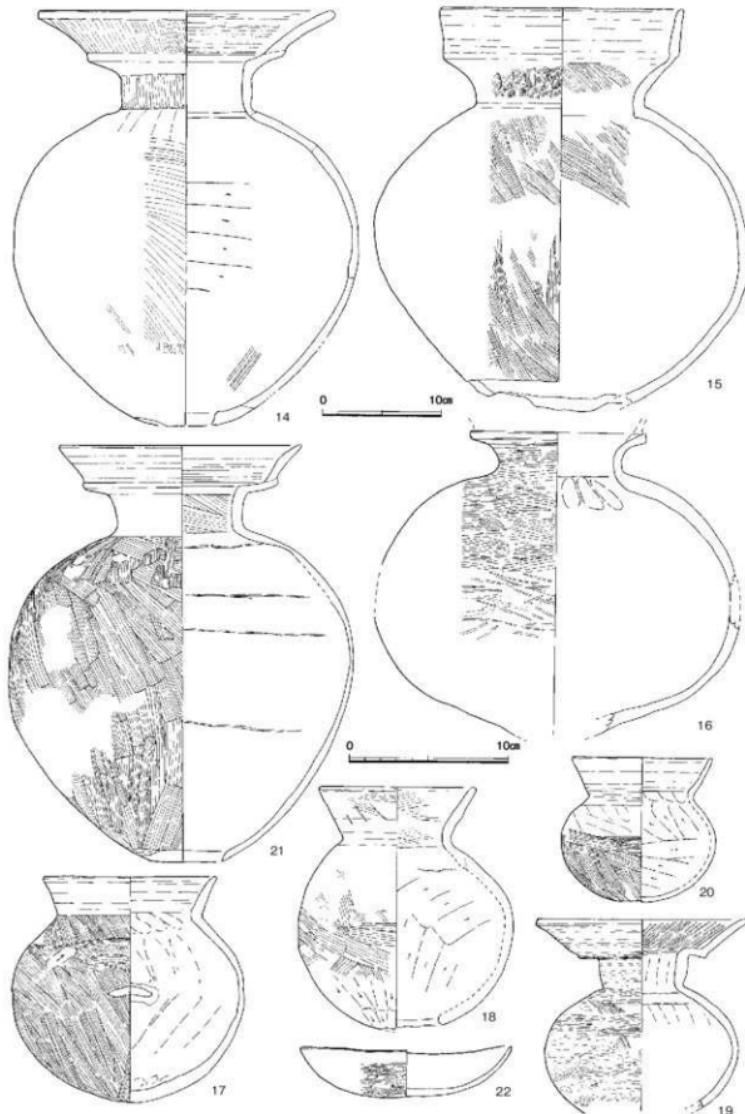
周溝から畿内系二重口縁壺R-1（14）・（16）、山陰系二重口縁壺R-3（15）、精製B群二重口縁壺R-4（19）、惋（22）、小型甕R-2（17）・R-6（18）、小型丸底壺R-5（20）が、南東隅周溝上端から畿内系二重口縁壺が出土している。14は口径25.0cm、胴径29.0cm、器高35.0cmを測る。胎土は精良、細かい土。砂粒少。φ2mmの白褐色粒含む。色調は外：黃橙。内：灰黃褐焼成良好。底部付近に黒斑あり。胴部外面ヨコミガキ。胴部内面ヨコケズリ。口縁部外・頭部外タテハケ。口縁部内面ヨコハケ。底部焼成後穿孔。15は口径20.6cm、胴径31.8cm、器高34.1（残高）cmを測る。胎土は3mm以下の石英・長石粒、金雲母粒を少量含む。色調は外：淡黃。内：暗灰黃。焼成良好。胴部外面・内面ハケ後ナデ。口縁部外面ハケ後ナデ。口縁部内面ヨコナデ。底部欠損。16は口径11.1（復元）cm、胴径22.8cm、器高19.2（残高）cmを測る。胎土は精良。色調は外：橙～褐色。内：にぶい橙色。焼成良好。胴部外面ヘラミガキで粗いものと細かいものの混在。胴部内面ナデ。頭部外面ヨコナデ後ヘラミガキ。頭部内面ヘラミガキ。口縁部・底部欠損。17は口径11.0cm、胴径14.65cm、器高14.3cmを測る。胎土は細かな砂粒をごくわずかに含む。色調は外：橙～浅黃橙色。体部下半～底部は黒～橙色。黒斑部：黃灰色。内：浅黃橙色。焼成良好。胴部外面ハケ。胴部内面ナデ。口縁部外面ヨコナデ。口縁部内面ハケ後ヨコナデ。体部焼成後穿孔。18は口径10.0（復元）cm、胴径13.75cm、器高15.3（残高）cmを測る。胎土は最大3mmの石英・長石粒、金雲母・赤褐色粒を少量含む。色調は外：赤褐～明黃褐（口縁）。内：にぶい褐～明褐。焼成良好。胴部外面上半ハケ後ナデ。胴部外面中央ハケ。胴部外面下半手持ちヘラケズリ。胴部内面ケズリ。口縁部外面タタキ→ハケ→ヨコナデ。口縁部内面ハケ後ヨコナデ。底部焼成後穿孔。19は口径12.4cm、胴径12.25cm、器高12.1（残高）cmを測る。胎土は精良。色調は外：橙色。内：橙～にぶい黄橙色。焼成良好。胴部外面下半ヘラケズリ後ヘラミガキ。胴部外面上半ハケ後ヘラ



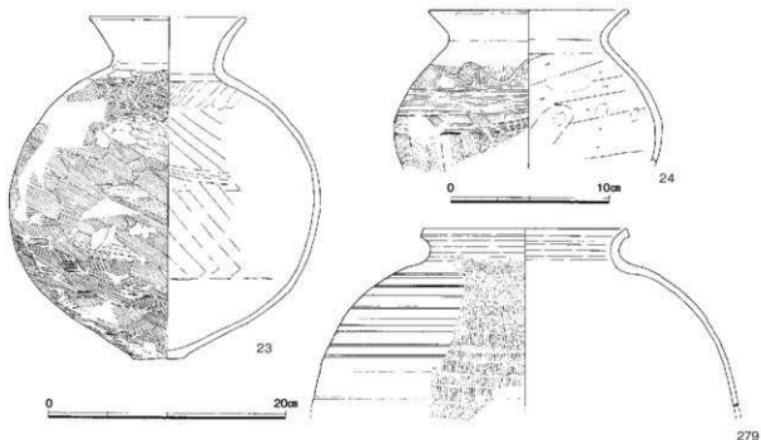
第10図 1号方形周溝実測図 (1/100) および周溝内遺物出土状況図・周溝土層図 (1/40)



第11図 2号方形周溝墓実測図（1/100）および周溝内遺物出土状況図・周溝土層図（1/40）



第12図 1号方形周溝墓出土遺物実測図 (1/3・1/4)



第13図 2号方形周溝墓出土遺物および遺構外出土陶質土器実測図（1/3・1/4）

ミガキ。胴部～頸部内面ナデ。頸部外面ヨコナデ後ヘラミガキ。口縁部外面ハケメ後ヘラミガキ。口縁部内面ヨコナデ後ヘラミガキ。底部欠損。20は口径8.9cm、胴径9.8cm、器高8.1cmを測る。胎土は1mm以下の石英・長石粒をわずかに含む。色調は外：にぶい橙色。黒斑は灰色。内：浅黄橙～橙色。焼成良好。胴部外面ハケ。胴部内面ナデと板ナデ。口縁部ヨコナデ。21は口径20.5cm、胴径28.8（最大）cm、器高35.2cmを測る。取上番号S-86。胎土は細かい。砂粒をほとんど含まない。色調は明黄褐。焼成良好。黒斑あり。胴部外面ハケ。胴部内面ヨコケズリ後ヨコナデ。頸部外面タテハケ後ヨコナデ。頸部内面ヨコハケ。口縁部外面タテハケ後ヨコナデ。口縁部内面ヨコナデ。口縁部大半が欠損。底部焼成後穿孔。22は口径13.4cm、器高3.1cmを測る。取上番号S-85 No.1。胎土は $\phi$ 1mm以下の雲母・長石・石英をごく少量含む。精良な土。色調は橙。外面ヨコミガキ。内面ヨコナデ。

時期比定の主軸となる壺の出土が少ないため判断が難しいが、19・21は久住編年（久住1999）のⅡB期に、14はⅡB～ⅢC期に、15・17はⅢA期に比定される。周溝内出土土器がある時期に一括して供献されたものではなく、何度かにわたって供献されたものである可能性が考えられる。いずれの土器も周溝内から個別に出土していて一括出土でないことや、周溝底面ではなく中層出土であることも傍証となる。

#### 2号方形周溝墓（第11・13図 PL9）

主体部無し。周溝は東西13m×南北13mを測り、平面やや角がゆがんだ正方形を呈する。1号方形周溝墓より若干大きい。周溝が正方形で完結せず一部が調査区外に延びる。周溝覆土は上層中央の黒褐色砂質土と、下層の茶褐色砂の2層である。A-A'での土層観察より南側溝→西側溝という切り合いで関係にあることが分かった。検出当初は方形周溝墓としての認識がなかったためSD73・SD79として遺構番号を付けている。

周溝より直口縁の壺（22）と布留壺（23）が出土した。22は伝統V様式系変容壺、23は北部九州型布留壺である。22は口径13.2cm、胴径26.1cm、器高28.8cmを測る。取上番号S-79 No.1。周溝北西隅付

近で出土した。色調は橙。焼成良好。黒斑あり。胴部外面上半細かいハケ。胴部外面下半やや粗いハケ。胴部内面斜めイタナデ。頸部外面口縁部ヨコナデ。底部わずかに平底形状残す。23は口径12.7cm、胴径17.0cm、器高10.3（残高）cmを測る。胎土は細かい。砂粒をほとんど含まない。色調は明黄褐。焼成良好。黒斑あり。胴部外面ハケ。胴部内面ヨコケズリ後ヨコナデ。頸部外面タテハケ後ヨコナデ。頸部内面ヨコハケ。口縁部外面タテハケ後ヨコナデ。口縁部内面ヨコナデ。口縁部大半が欠損。底部焼成後穿孔。遺物が少ないため時期の特定が難しいが、久住編年ⅡB期と推定する。

#### 陶質土器（第11図 卷頭図版2）

一個体の壺の破片（279）が1号方形周溝墓から1号墳を中心とした広域にわたって出土。どの遺構に伴うものかは不明。破片を接合したところ口縁部から胴部までを復元できた。279は口径17.6（復元）cm、胴径36.0（残存部最大径）cm、器高10.3（残高）cmを測る。胎土は精良。色調は明橙。焼成良好。

#### 石室および石室状遺構

##### 1号石室SX-21（第14図 PL10）

X=67451.2,Y=-53221.8で検出した。試掘の第4トレチで確認されている。試掘時の見解では中世の石積みと考えられていた。重機による表土すき取り時にはこの部分を残し、人力による精査を行い、小型の堅穴式石室で有ることを確認した。本来は上面に蓋石が並べられていたものと考えられるが、検出時点では消失していた。南側壁も欠損している。床面の平面形は南北に長い台形を呈し、台形の上底36cm、下底66cm、長辺172cmを測る。主軸はN-12°-Eで上底が南、下底が北である。腰石は直径30-40cm大の石を用い、上底に1石、下底に2石、西側面に5石、東側面に6石配する。腰石の深さをみると上底側が浅く約3.0mであるのにたいし、下底側は2.9mと深くなっている。石室の堀り方も同様に北側が浅く、南側が深くなっている。堀方の覆土は褐色砂・黒褐色砂質土が縞状に混ざるものであり、地山の明褐色砂層と明瞭な差はない。側壁は持ちおき状に立ち上がる。遺構検出時では上底壁で1石、下底壁に6石、西側壁に3石、東側壁4石残存していた。腰石の上に積み上げる石は上段にいくに従って小型化している。側壁の石は2段目までは腰石とほぼ同等のサイズの石を用いている。

石室の内部は、上層で暗茶褐色の砂質土が、下層には地山の砂が流れ込んだと思われる明褐色砂が堆積していた。石室内部より遺物は出土しなかった。石室外の北西側の標高3.60mの地山からやや浮いた高さで土師器壺の破片（134）が出土した。古代末～中世の壺であり、石室がこの時代までに一部破壊されていた可能性がある。1号石室の内部は棺が入るとしてもかなり小型のものをいたか、あるいは棺を入れることなく直接遺体を安置していた可能性がある。遺物が出土していないため時期不明だが、石室の形状から古墳の主体部と考える。1号石室にともなう周溝・墳丘は検出されなかつた。

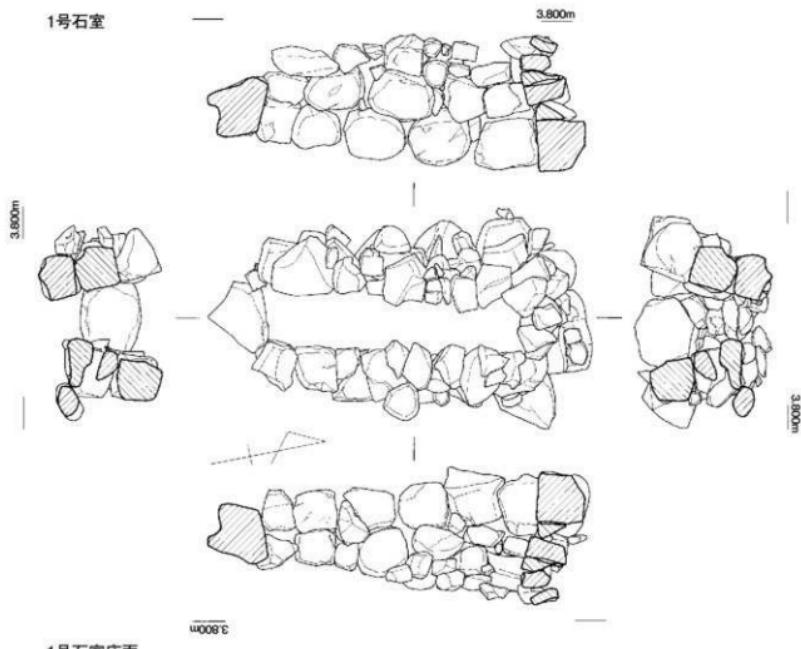
##### 2号石室SX-72（第15図 PL11-1）

X=67473.5,Y=-53233.9で検出した。主軸はN-94°-W。平面長方形を呈し、内法は短辺45cm長辺124cmを測る。短辺に直径30cm大の石を1石配し、長辺に直径10-20cmの石を7-9石配し、四角く開っている。堀方の覆土は褐色砂質土であり、黒褐色砂質土が縞状に混ざるもの。地山の明褐色砂層と明瞭な差はない。出土遺物無し。石室であるかは不明。木棺を開くものか。

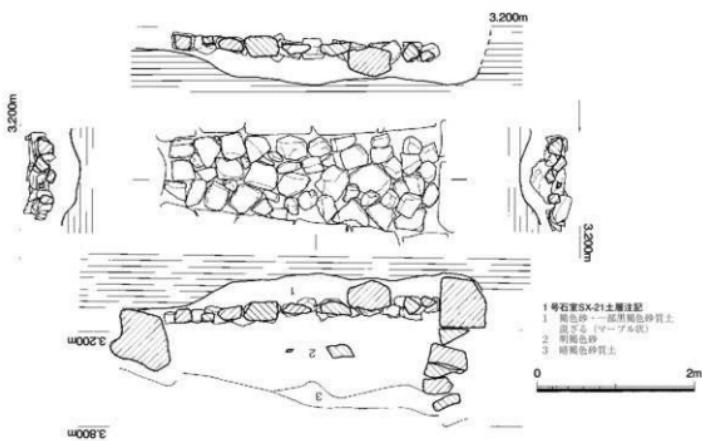
##### 3号石室SX-90（第15図 PL11-2）

X=67451.3,Y=-53214.6で検出した。主軸はN-60°-W。地山の砂に直接掘り込まれている。遺構掘削時に石の一部が出土し、地山を掘り下げて確認した。北西側が方形堅穴状遺構SC-76に切られてい

1号石室

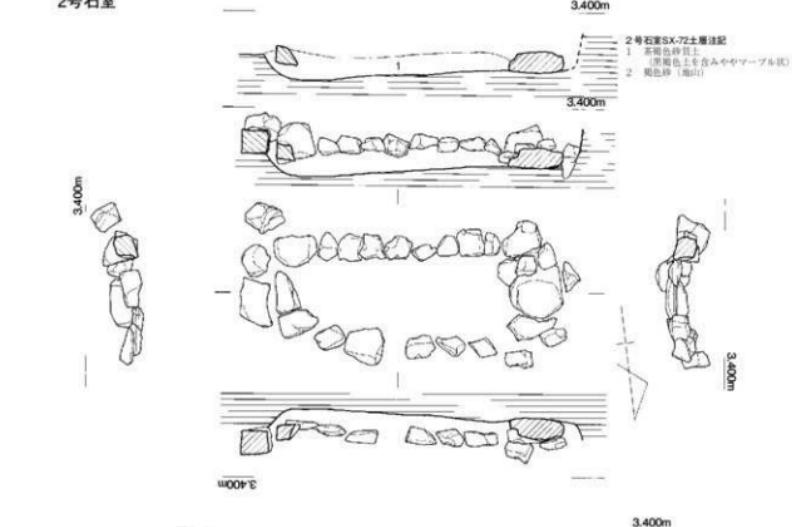


1号石室床面

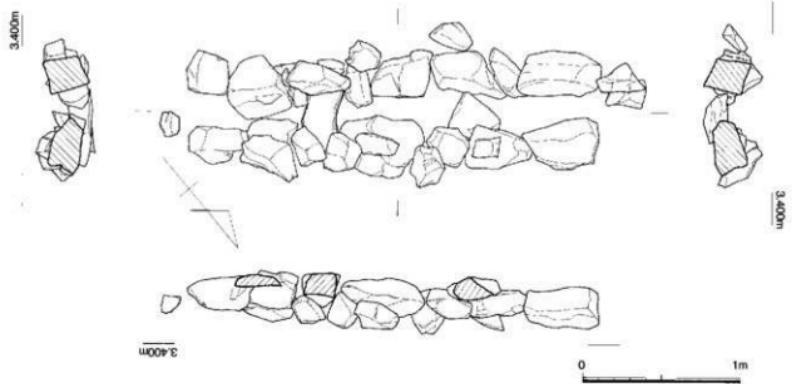


第14図 1号石室SX-21実測図 (1/60)

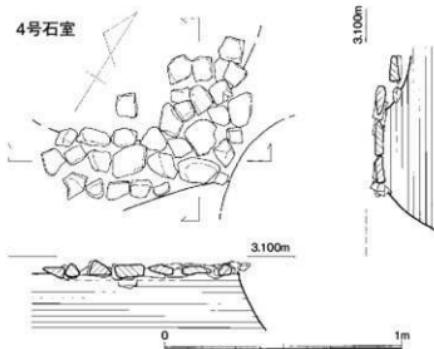
2号石室



3号石室



第15図 2号石室SX-72および3号石室SX-90実測図 (1/30)



第16図 4号石室SX-187実測図（1/20）

る。平面長方形を呈し、内法は短辺12-20cm長辺残存長260cmを測る。中央に2石約70cm間を開けて並べ、その上に石列を二列並べている。石列は直径30-40cm大の石を用いている。内部には地山の明褐色砂が流れ込んでいた。遺物の出土無し。造構の性格不明。溝の可能性も考えられたが、用いられている石が1号石室のものと類似しているため石室状造構として扱った。

#### 4号石室SX-187（第16図 PL12-1）

X=67501.9,Y=-53198で検出した。1号墳の北西方向、1号墳中心からの距離約20mに位置している。井戸SE-109と擾乱に切られ、南北70cm、東西90cm残存している。石は直径10-20cmの石を用いている。遺物の出土無し。古墳石室床面の一部と考えられる。

#### 墓（中世）

##### SX-01（第17・18図 卷頭写真2 PL13-1・13-2）

X=67468.5,Y=-53225で検出した。遺構検出時に重なった状態の陶磁器（26-30）を検出し、先に取り上げた。その後遺構検出を行い、遺構覆土掘り下げの時に鏡が出土した。遺構は北側の一部を残すのみであとは近世井戸と土坑によって切られている。平面長方形を呈し幅85cm長さ95cm以上を測る。主軸はN-17°-W。人骨の出土なし。直径20cm大の石が2つ置かれている。鏡は石の北側で出土した。

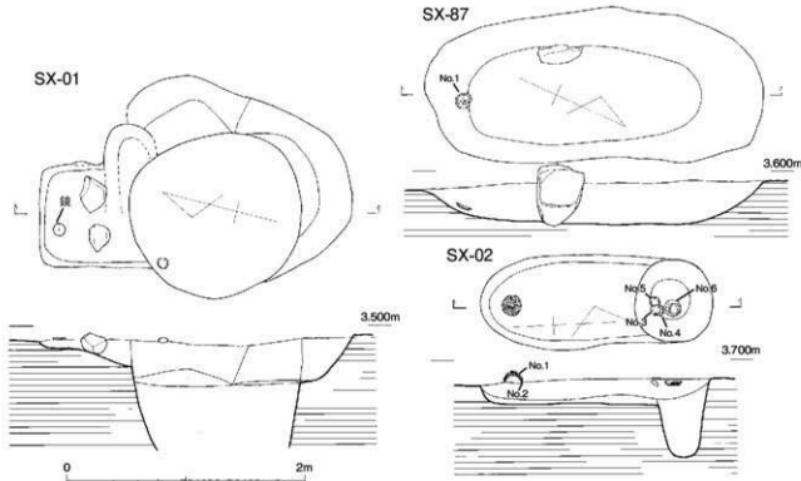
25は双鳥文鏡。鏡背を上に鏡面を下にした状態で出土した。紙で鏡を包んで副葬したようで紙の痕跡が鏡背面に残っている。また鏡の下に櫛を置いて副葬しており、鏡の下の砂中に櫛の一部が残存していた。櫛は幅4.4cm長さ9cm以上と推定される。25は直径10.9cm厚1.5mmを測り、幅5mm厚3mmの蒲鉾式中縁である。中央に直径7mm断面台形の鉢を配し、直径1mmの鉢孔を開ける。鉢を点対称にして左右に羽を広げ外側に顔を向けた鳥二羽を配する。26は龍泉窯系青磁碗III-2c（直口）類。口径12.8cm、高台径4.0cm、器高6.1cm、胎土は細かい。高台部には精良なものを後づけ。色調は胎土：濁白色～灰白色呈（7.5y8/1）、高台部：淡黄色呈（2.5y8/3）、釉：明緑～エメラルドグリーンを呈する。27は白磁。碗IX-2類か？。口径15.2?cm、器高6cm以上、胎土は細かい。色調は胎土：灰白色（2.5y8/1）、釉：灰白色（7.5y7/2）で緑みかかる。28は白磁。皿IX-1c類、口径13.0cm、底径7.8cm、器高3.0cm、胎土は

完形のため不明。色調は釉：暗オリーブ灰（2.5gy7/1）。29は白磁。ⅢIX-1c類、口径13.0cm、底径7.7cm、器高3.1cm、胎土は細かい。色調は胎土：灰白色（n8/1）釉：明オリーブ灰（2.5gy7/1）。30は白磁。ⅢIX-1c類、口径12.4?cm、底径7.6、器高3.1、胎土は細かい。色調は胎土：白色（n8/）、釉：灰色（2.5gy8/1）。31は土師器小皿、口径9.1cm、底径7.4、器高1.0cm、胎土はφ2~3mmの長石を少量含む。金雲母片を少量含む。色調は浅黄橙（7.5yr8/4）。焼成良好。32は土師器小皿、口径9.0cm、底径6.9cm、器高1.2cm、胎土はφ2~3mmの長石・石英を多く含む。やや粗い胎土。色調は浅黄橙（7.5yr8/3）。焼成ふつう。時期は13世紀中頃~14世紀初頭前後である。

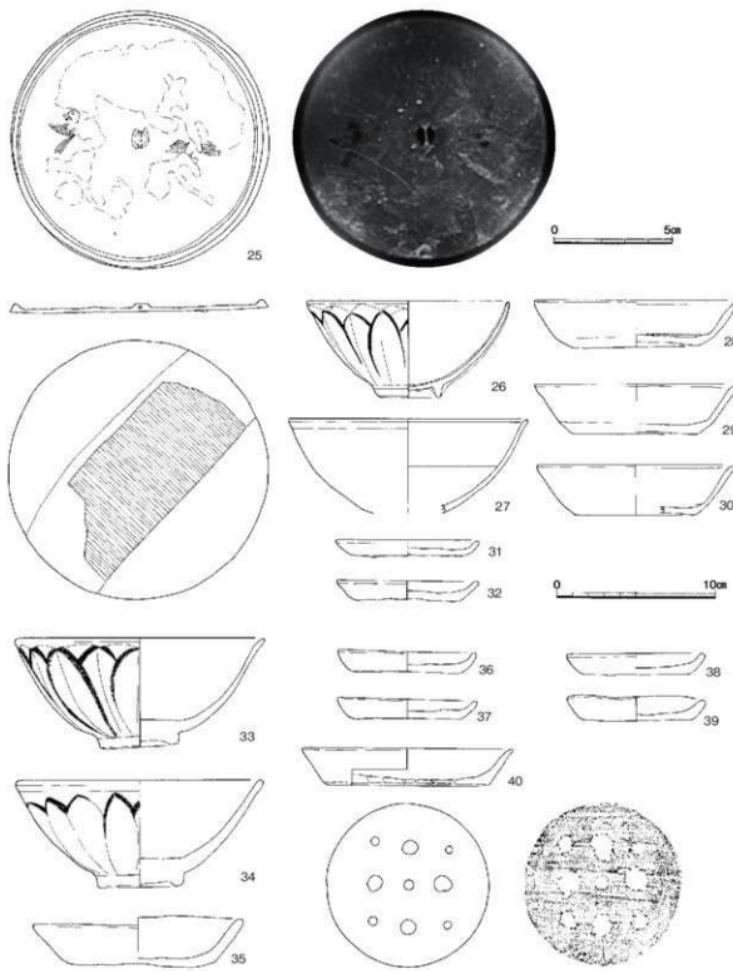
#### SX-02 (第17・18図 PL3)

X=67468.5,Y=-53225で検出した。平面形は長梢円形を呈し長軸195cm短軸80cmを測る。主軸はN-1°-W。南側で青磁碗が倒位で2個体（33・34）重なって出土した。北側から土師器群（35-39）が出土。土層断面の観察の結果ピットの上にSX-02が作られたようである。人骨の出土なし。

33は龍泉窯系青磁碗II-b類。口径15.8cm、底径5.0cm、器高7.0cm、胎土は細かい。色調：胎土は灰白色（2.5y8/1）。釉：黄褐（2.5y5/3）。34は龍泉窯系青磁碗II-a類？。口径15.6cm、底径5.4cm、器高6.8cm、胎土は完形のため不明。色調は釉：黄褐（2.5y5/3）。35は土師器坏。口径13.4cm、底径9.6cm、器高3.1cm、胎土はφ1cmの小礫、φ2~3mmの石英・長石を含む。色調は浅黄橙（7.5yr8/4）。焼成良好。36は土師器小皿。口径8.8cm、底径7.0cm、器高1.3cm、胎土はφ1cmの黑色礫、φ1~2mmの長石・石英を含む。色調はにぶい橙（7.5yr7/4）。焼成ふつう。37は土師器小皿。口径8.9cm、底径6.9cm、器高1.3cm、胎土はφ2~1mmの長石・石英を含む。色調は浅黄橙（7.5yr8/3）。焼成ふつう。38は土師器小皿。口径8.8cm、底径6.9cm、器高1.4cm、胎土はφ1~2mmの長石・石英を含む。色調はにぶい橙（7.5yr7/4）。焼成ふつう。39は土師器小皿。口径8.8cm、底径7.0cm、器高1.5cm、胎土はφ1~2mmの長石・石英を含む。色調は浅黄橙（7.5yr8/4）。焼成ふつう。時期は13世紀前後~13世紀前半である。



第17図 SX-01・SX-02・SX-87実測図 (1/40)



第18図 SX-01・SX-02・SX-87出土遺物実測図 (1/2・1/3)

### SX-87 (第17・18図)

X=67476.5,Y=-53219.5で検出した。平面形は長楕円形を呈し長軸280cm短軸130cmを測る。主軸はN.24° .W。縦50cm横40cm厚さ20cmの石が縦に突き刺さるように出土した。棺を支えるための裏込石か。人骨の出土なし。南側より土師器坏(40)が出土した。

40は口径13.4cm、底径10.3cm、器高2.4cm。胎土は $\phi$ 1~3mmの赤褐粒、 $\phi$ 1~2mmの長石・石英を含む。やや細かい土。色調はにぶい橙(7.5yr7/4)。焼成良好。底面に正方形に3×3の9個の孔が底面に焼成後に開けられている。40の法量から時期は12世紀後半~13世紀前半と推定する。

### 竪穴式住居（古墳時代）

#### SC-88 (第19図 PL14-1)

X=67478,Y=-53223で検出した。SK-84.87と分けたが、これら全体で一つの遺構と判断し、s-84 s-88s-89の遺構を一つに統合した。住居跡としたが床面からの焼土の出土や柱穴がなく、住居であった確証は薄い。形状は長辺4m以上×短辺2.25mのやや歪んだ隅丸長方形を呈し、深さ0.19mを測る。

古式土師器の甕(41)と鉢(42・43)が出土。41は口径15.6cm、18.2cm、器高20.4cm。取上番号No.1。胎土は最大4mmの石英・長石粒、金雲母微粒をわずかに含む。色調は外:赤褐(焼け)~浅黄橙色、暗灰色のスス付着。内:橙色。黒褐色のスス付着焼成良好。二次被然あり。42は口径13.3cm、最大幅13.3cm、器高6.0cm。取上番号No.2。胎土は $\phi$ 1mm以下の雲母片含む。細かい土。色調は橙。43は口径13.2cm、最大幅13.2cm、器高5.8cm。胎土は $\phi$ 1mm以下の雲母・長石を含む。細かい土。色調は淡赤橙。外面底部はすりされたのか地の色がみえる。黒斑あり。時期は重藤編年IV期である。

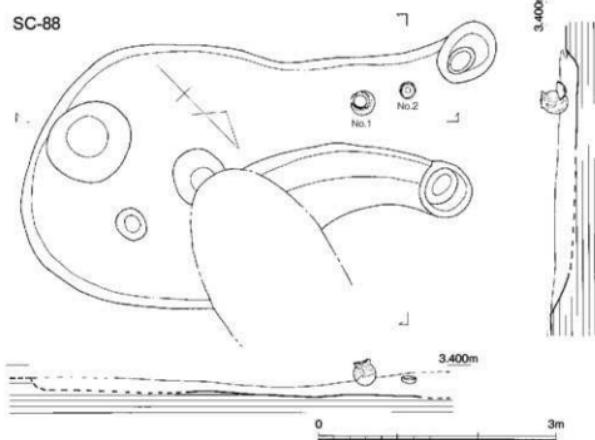
### 竪穴式住居・方形竪穴状遺構（古代末~中世）

#### SC-76 (第20図 PL14-2)

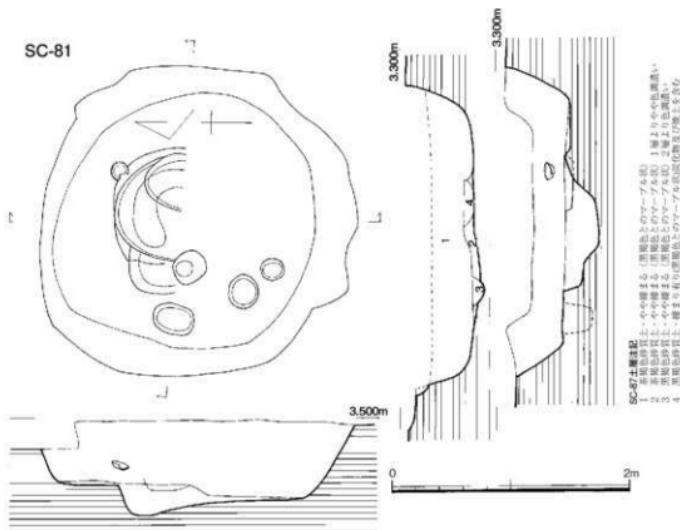
X=67455.4,Y=-53216で検出した。1つの遺構と考えたが、底面の柱痕の並びから2つ以上の方形竪穴状遺構が切り合ったものと考える。焼土を検出した。

土師器高台付椀(44・45・46・47)、高台付皿(48・49・50)、小皿(51)が出土。44は口径15.5cm、楕高4.8cm、底径高台高1.0cm、器高5.8cm。胎土は $\phi$ 1~2mmの長石・石英、 $\phi$ 1mm以下の黒褐粒を少量含む。細かい土。色調は灰白(10yr8/2)。焼成ふつう。口縁部が黒く発色。45は口径13.0?cm、楕高4.2cm、底径高台高1.2cm、器高5.1cm。胎土は $\phi$ 1mm前後の雲母・長石・赤褐粒・黒褐粒を含む。やや粗い土。色調はにぶい褐(7.5yr6/3)。焼成良好。口縁部が黒い焼きムラ。46は口径12.4cm、楕高3.5cm、底径高台高0.9cm、器高4.4cm。胎土は $\phi$ 2~3mmの長石と $\phi$ 1mm以下の長石・石英・雲母・黒褐粒・茶褐粒を含む。やや粗い土。色調はにぶい黄橙(10yr8/3)。焼成良好。47は口径12.6?cm、底径8.1cm、器高3.7cm。胎土は $\phi$ 1mm前後の長石・石英含む。やや細かい土。色調は灰白(10yr8/2)。焼成ふつう。48は口径12.6cm、皿高1.4cm、底径高台高1.1cm、器高2.5cm。胎土は $\phi$ 1mm以下の長石・石英・雲母片を含む。細かい土。色調はにぶい橙(5yr7/4)。焼成良好。49は口径13.0cm、皿高1.7cm、底径高台高0.8cm、器高2.6cm。胎土は混和材をほとんど含まない精良な土。わずかに $\phi$ 1mm以下の赤褐粒・長石を含む。色調は浅黄橙(10yr8/3)。焼成良好。50は口径12.2cm、皿高1.3cm、底径高台高1.1cm、器高2.5cm。胎土は $\phi$ 1~2mmの長石・石英、 $\phi$ 1mm以下の赤褐粒を含む。上2枚に比べると粗い土。色調はにぶい橙(7.5yr7/4)。焼成は固いが、一部黒くなっている部分有り。51は口径10.0?cm、底径6.0cm、器高1.9cm。胎土は $\phi$ 1mm以下の長石・赤褐粒をわずかに含む。精良な土。色調は橙(7.5yr7/6)。焼成良好。時期は11世紀中頃である。

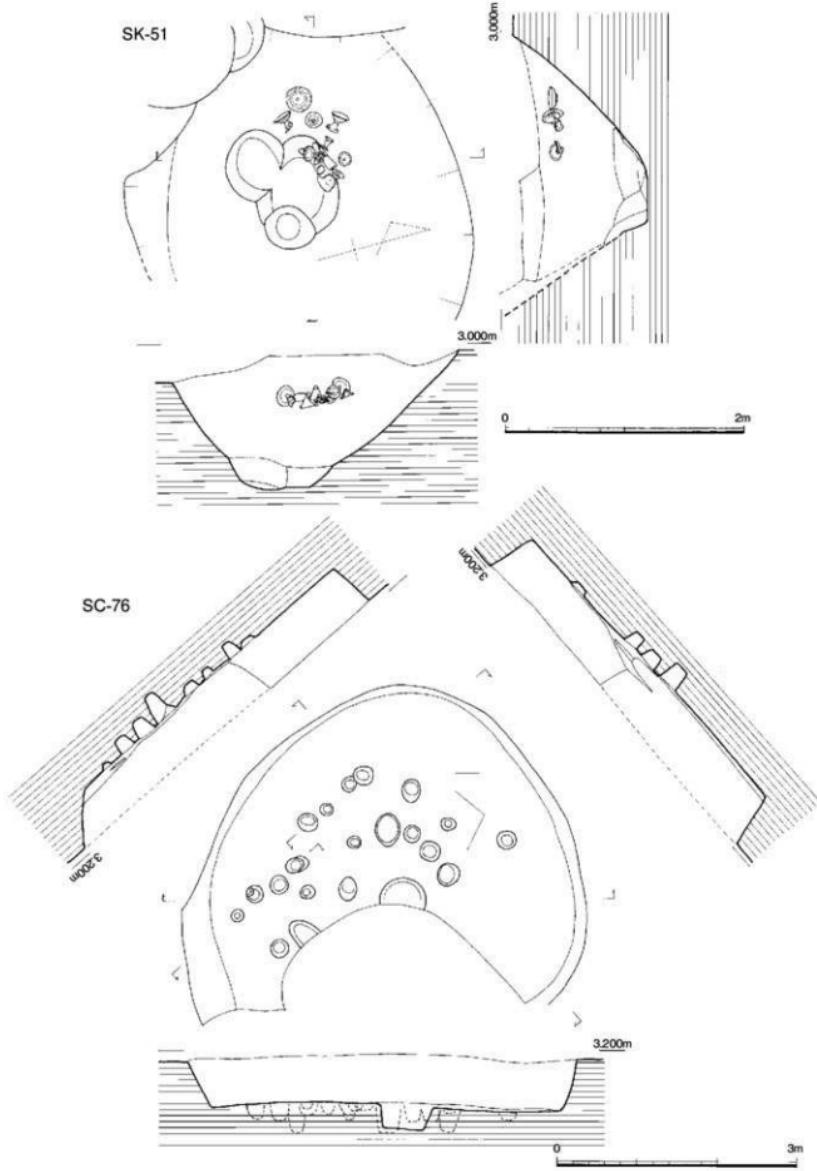
SC-88



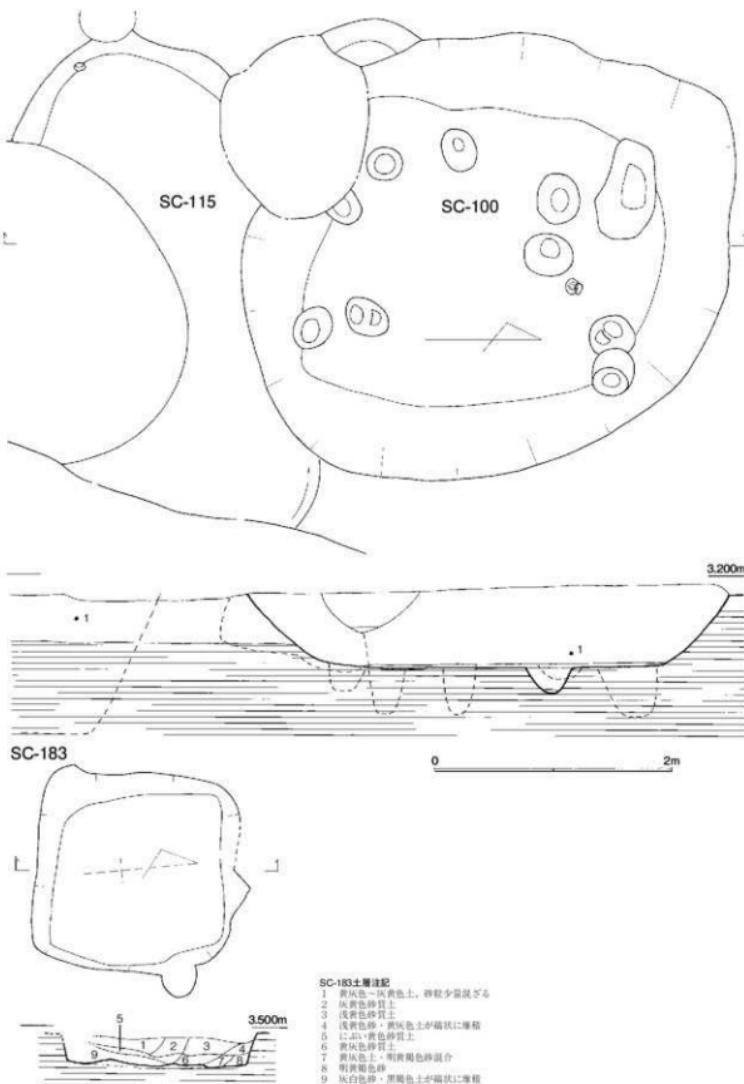
SC-81



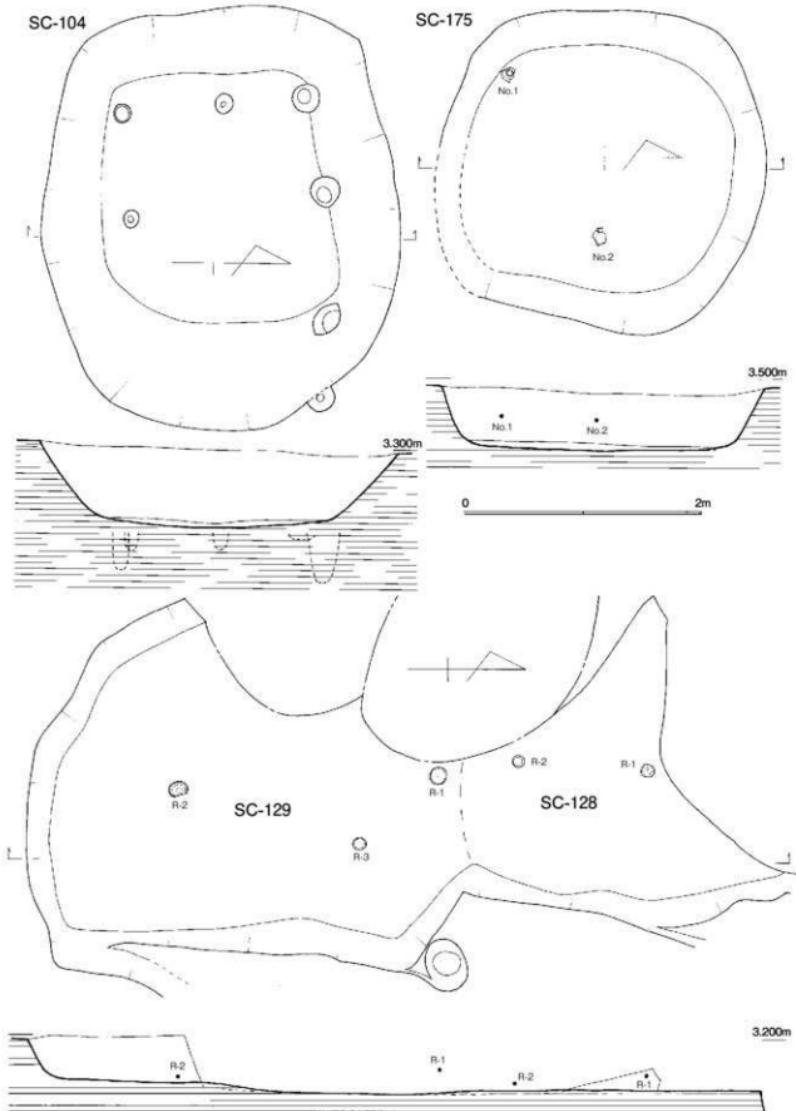
第19図 SC-88・SC-87実測図 (1/60・1/40)



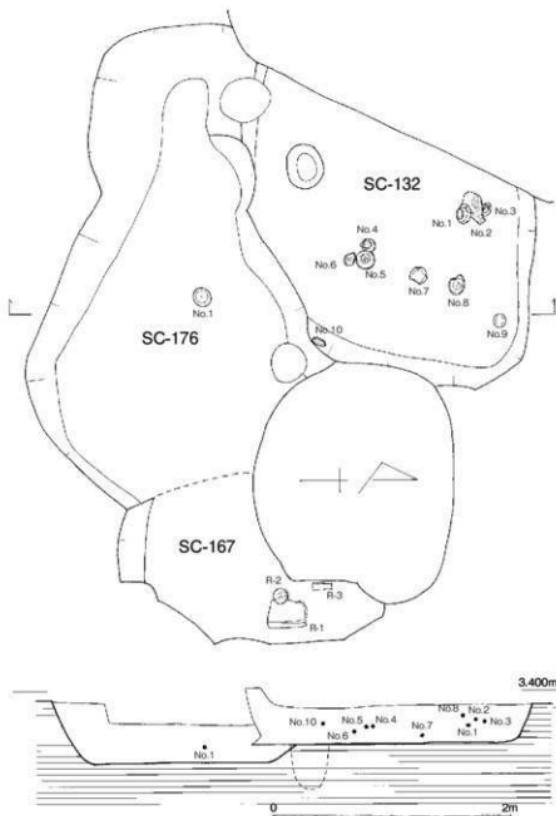
第20図 SK-51・SC-76実測図 (1/40・1/60)



第21図 SC-100・SC-115・SC-183実測図 (1/40)



第22図 SC-104・SC-128・SC-129・SC-175実測図 (1/40)



第23図 SC-132・SC-167・SC-176実測図 (1/40)

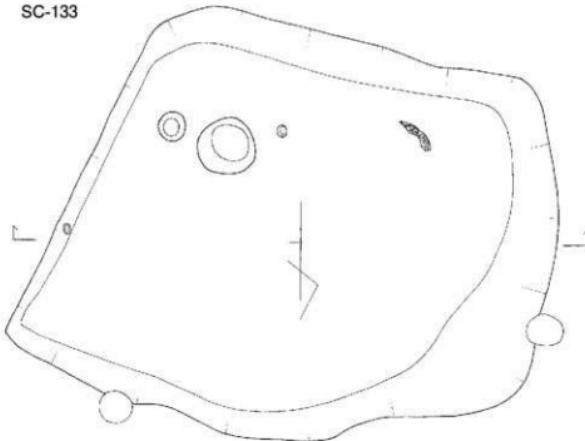
#### SC-81 (第19図 PL14-3)

X=67477.9, Y=-53227で検出した。一辺2.6mの隅丸方形を呈し、深さは0.55mを測る。底面に柱穴が2基あり。底面中央から黒色土器a類（内黒土器）の高台付碗（52）出土。52は口径15.2cm、高台径8.3cm、器高6.0cm。胎土はφ1mm以下の雲母片、φ1mm前後の長石・石英を含む。やや粗い土。色調は内：暗青灰（5pb3/1）外：にぶい黄橙（10yr6/3）焼成不良。

#### SC-100 (第21図 PL15-2・15-3)

X=67486, Y=-53198で検出した。一辺3.7~4.1mのやや歪な隅丸長方形を呈し、深さは0.74mを測る。底面四隅のほか底面に合計11の柱穴がある。遺物は土師器高台付壺（230・231・232）、壺（233）、皿（234）が出土した。床面付近から土師器高台付壺が出土している。時期は12世紀中頃である。

SC-133



第24図 SC-133実測図 (1/40)

**SC-104** (第22図 PL16-1)

X=67491,Y=-53221で検出した。一辺 $3 \times 3.5m$ の略長方形を呈し、深さは0.65mを測る。底面隅に6つの柱穴を有する。遺物は土師器高台付壙 (235・236・237)、壙 (238) が出土した。11世紀前半と推定されるがやや根拠が弱い。

**SC-115** (第21図)

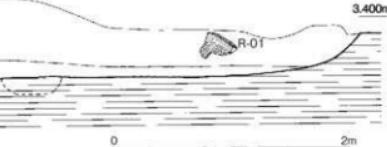
X=67483.3,Y=-53197.5で検出した。一辺 $3.6m$ 以上× $3.7m$ の隅丸長方形を呈し、深さは0.4mを測る。遺物は土師器高台付壙 (239)、壙 (240) が出土した。11世紀前半と推定されるがやや根拠が弱い。

**SC-128** (第22図 PL16-2)

X=67496.5,Y=-53200で検出した。一辺 $2.8m$ 以上の長方形を呈すると考えられる。深さは0.37mを測る。遺物は土師器壙 (241)、壙 (242・243) が出土した。時期は11世紀前半である。

**SC-129** (第22図)

X=67493.5,Y=-53200.3で検出した。一辺 $3.1 \times 3.7m$ の隅丸長方形を呈し、深さは0.42mを測る。土



師器高台付坏R-1 (244)・坏R-2 (245)・坏 (246・247) が出土した。時期は11世紀後半～12世紀前半である。

**SC-132** (第23図 PL16.2)

X=67496,Y=-53206で検出した。一辺1.8m以上×2.5mの隅丸長方形を呈し、深さは0.3mを測る。

土師器壺 (53・54・72)、皿 (55-61)、坏 (62・63)、高台付椀 (64-69)、軒丸瓦 (139) が出土した。53は口径32.4 (復元) cm、底径cm、器高7.0 (残高) cm。胎土は1mm前後の石英・長石粒をわずかに含む。色調は外：にぶい橙 (7.5yr7/4) ～褐灰色 (7.5yr4/1)。一部黒色 (n2/) に焼ける。内：浅黄橙 (7.5yr8/4) ～灰褐色 (7.5yr5/2)。一部黒色 (7.5yr2/1) に焼ける。焼成良好。二次被熱あり。54は口径27.4 (復元) cm、底径cm、器高14.3 (残高) cm。胎土は1mm前後の石英・長石粒、金雲母微粒をわずかに含む。色調は外：褐灰 (7.5yr4/1) ～にぶい褐色 (7.5yr5/3)。全体に黒色 (7.5yr2/1) のスス付着。内：灰褐 (7.5yr6/2) ～灰褐色 (7.5yr4/2) 焼成良好。二次被熱あり。55は口径9.8 (復元) cm、底径7.5cm、器高15cm。胎土は細かな石英・長石・赤褐色粒子、金雲母微粒をわずかに含む。色調は外：にぶい黄橙 (10yr7/3) ～灰黄褐色 (10yr6/2) 一部褐灰色 (10yr5/1)。内：浅黄橙 (10yr8/3) ～灰黄褐色 (10yr6/2) 一部斑点状に黒褐色 (7.5yr2/2) 油煙。焼成良好。56は口径10.1cm、底径7.9cm、器高11.5cm。胎土は1mm前後の石英・長石粒を少量含む。色調は外：にぶい黄橙 (10yr7/3) ～灰白色 (10yr8/2) 体部の一部が褐灰色 (10yr5/1) にススける。内：灰白色 (10yr8/2) 一部が褐灰色 (10yr5/1) にススける。焼成良好。57は口径10.3cm、底径7.8cm、器高14cm。胎土は精良。色調は外：灰白色 (10yr8/1) だが口縁の1/2～底部の大半が灰色 (n4/) に黒化。内：灰白色 (7.5yr8/2) だが大半がススけて褐灰色 (10yr4/1) となる。口縁の一部は黒褐色 (2.5y3/1) に焼ける。焼成良好。58は口径9.7cm、底径6.7cm、器高1.6 (最大) cm。胎土は精良。色調はにぶい黄橙 (10yr7/3) ～褐灰色 (7.5yr4/1)。黒褐色 (5yr2/1) の油煙付着。内：灰褐 (7.5yr4/2) 黑褐色 (5yr2/1) の油煙付着。内外面ともに全体的にススけている。焼成良好。59は口径11.0cm、底径7.55cm、器高1.4cm。胎土は精良。色調は外：浅黄橙色 (10yr8/3)、約1/3が焼けて黒色化 (5y2/1)。内：灰白色 (10yr) だが大半がススけて灰黄橙色 (10yr6/2)。一部焼けて黒色化 (5y2/1)。焼成良好。60は口径10.55cm、底径7.8cm、器高1.15cm。胎土は精良。色調はにぶい橙色 (7.5yr7/4)。焼成良好。61は口径10.15cm、底径7.7cm、器高1.3cm。胎土は精良。色調は浅黄橙色 (7.5yr8/3)。焼成良好。62は口径13.2cm、底径9.2cm、器高3.9 (最大) cm。胎土は3mm以下の石英・長石粒、金雲母微粒を少量含む。色調は橙色 (5yr6/6)。内外面ともに斑状に黒褐色 (5yr2/1) の油煙付着。焼成良好。63は口径13.1cm、底径8.0cm、器高3.8cm。胎土は1mm以下の石英・長石粒をわずかに含む。精良。色調は外：橙 (7.5yr7/6) (口縁付近) ～浅黄橙色 (7.5yr8/4)。内：橙色 (5yr7/6)。焼成良好。64は口径14.9cm、底径7.1cm、器高5.7cm。胎土は1mm以下の石英・長石・赤褐色粒をわずかに含む。精良。色調は外：にぶい橙 (7.5yr6/4) ～褐灰色 (7.5yr5/1)。内：にぶい赤褐 (5yr5/4) ～黒褐色 (7.5yr3/1)。焼成良好。65は口径15.5cm、底径7.9cm、器高6.65 (最大) cm。胎土は細かな石英砂粒・金雲母微粒をわずかに含む。精良。色調は橙 (5yr6/6) ～にぶい橙色 (7.5yr6/4)。外面斑点状に黒色 (7.5yr2/1) の油煙付着。内底及び体部内面の一部が黒褐色 (7.5yr3/1) にススける。焼成良好。66は口径14.6 (復元) cm、底径7.7cm、器高5.5cm。胎土は細かな石英・長石粒をわずかに含む。精良。色調は外：にぶい橙 (7.5yr6/4) ～橙色 (2.5yr7/6)。斑状に黒褐色 (5yr2/1) の油煙付着。内：にぶい橙 (5yr6/4) ～灰褐色 (5yr5/2)。斑状に黒褐色 (5yr2/1) の油煙付着。一部焼け黒褐色 (5yr3/1)。焼成良好。67は口径14.85cm、底径8.2cm、器高6.3cm。胎土は4mm以下の石英・長石粒をやや多く含む。粗い。色調は外：浅黄橙色 (7.5yr8/6)。黑色 (7.5yr2/1) の油煙が斑点状に付着。内：

にぶい橙色（7.5yr6/4）。焼成良好。68は口径15.2（復元）cm、底径7.8cm、器高5.5cm。胎土は2mm以下の石英・長石粒をごくわずかに含む。色調は外：浅黄橙（7.5yr8/3）～浅黄橙色（7.5yr8/6）。内：灰白色（10yr8/2）。口縁の一部が黒褐色（7.5yr3/2）にススける。焼成良好。69は口径14.45cm、底径7.7cm、器高6.2（最大）cm。胎土は精良。色調は外：黒褐（2.5yr3/1）（口縁）～橙色（7.5yr7/6）。内：黒（2.5y2/1）（口縁）～浅黄橙色（10yr8/3）。焼成良好。

72は胴径33.4（復元）cm、器高20.6（残高）cm。胎土は1mm前後の石英・長石粒、角閃石・金雲母微粒を多く含む。色調は外：灰褐（7.5yr4/2）～黒褐色（7.5yr3/1）焼け。内：橙（7.5yr6/4）～褐灰色（7.5yr4/1）焼け。焼成良好。二次被熱あり。時期は11世紀中頃である。

#### SC-133（第24図 PL16-3）

X=67496.8,Y=-53208.6で検出した。一辺3.5mの隅丸方形を呈し、深さは0.35mを測る。

土師器の甕（70・71・73）、軒平瓦R-01（142）が出土した。70は口径32.9（復元）cm、器高24.75（残高）cm、胎土は最大4mm（2mm以下が主体）の石英・長石・赤褐色粒子、角閃石をやや多く含む。色調は外：にぶい橙（7.5yr7/4）～黒褐色（7.5yr3/1）スス。内：にぶい褐（7.5yr5/3）～灰褐色（7.5yr4/2）焼け。焼成良好。二次被熱あり。71は口径22.9（復元）cm、器高10.5（残高）cm、胎土は2mm以下の石英・長石粒を少量含む。色調は外：灰褐（7.5yr5/2）～黒色（2.5y2/1）スス。内：灰白（10yr8/2）～褐灰色（7.5yr4/1）焼け。黒褐色（7.5yr3/1）スス。焼成良好。二次被熱あり。73は口径22.8（復元）cm、器高10.35（残高）cm、胎土は3mm以下の石英・長石粒、細かな赤褐色粒子をやや多く含む。色調は外：黒褐（7.5yr3/2）～黒色（n2/）スス。内：浅黄橙（7.5yr8/3）～黒褐色（7.5yr3/1）黒変。焼成良好だが外面は激しく被熱し下半部は剥離する。

#### SC-167（第23図）

X=67495.3,Y=-53203.2で検出した。一辺2.3m以上、形状は不明、深さは0.35mを測る。土師器の甕R-1（74）が出土した。74は口径33.3（復元）cm、器高25.2（残高）cm、胎土は最大3mm（1mm以下が主体）の石英・長石・角閃石をやや多く含む。色調は外：暗褐（7.5yr3/3）～黒褐色（7.5yr3/1）（スス）。内：にぶい橙（7.5yr6/4）～黒色（7.5yr2/1）（下部・焼け）。頭部付近に黒色（n2/）の炭化物が部分的に付着焼成良好。二次被熱

#### SC-175（第22図 PL17-1）

X=67485.1,Y=-53209で検出した。一辺2.7mの隅丸方形を呈し、深さは0.68mを測る。SC-175 土師器皿（248）が出土した。時期は11世紀中頃と推定されるがやや根柢が弱い。

#### SC-176（第23図 PL16-2）

X=67494.5,Y=-53205.3で検出した。一辺3.3mの不整形を呈し、深さは0.45mを測る。

#### SC-183（第21図 PL17-2）

X=67501.3,Y=-53215.8で検出した。一辺1.8mの隅丸方形を呈し、深さは0.37mを測る。

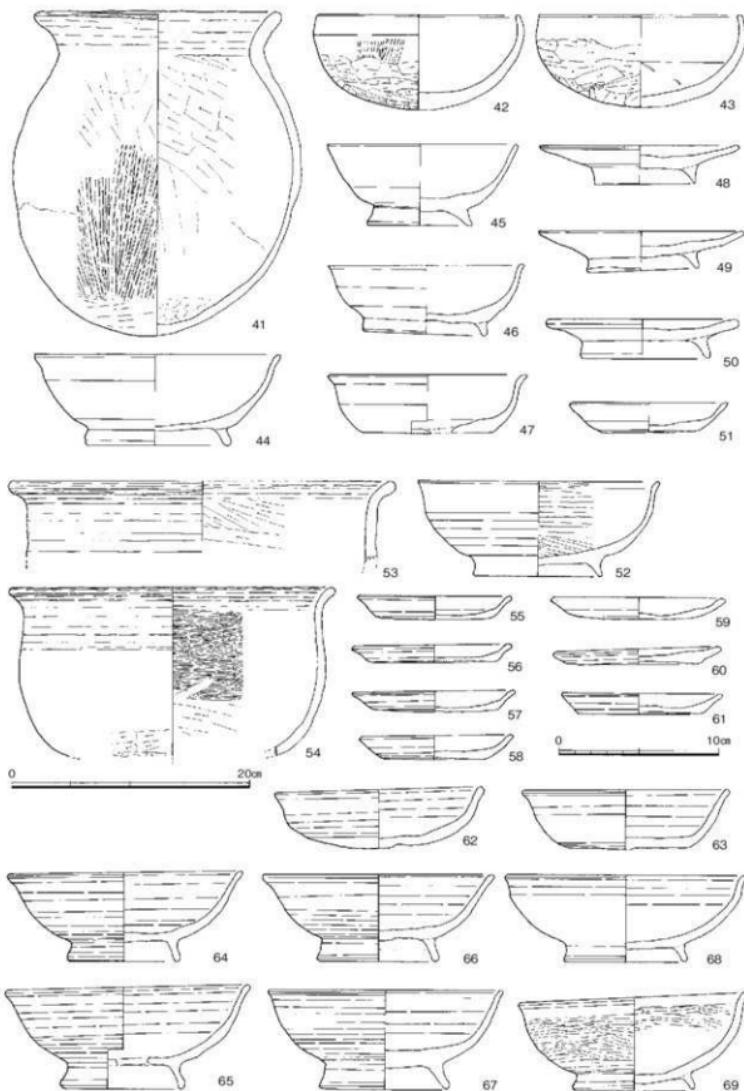
### 土坑

#### 古墳時代

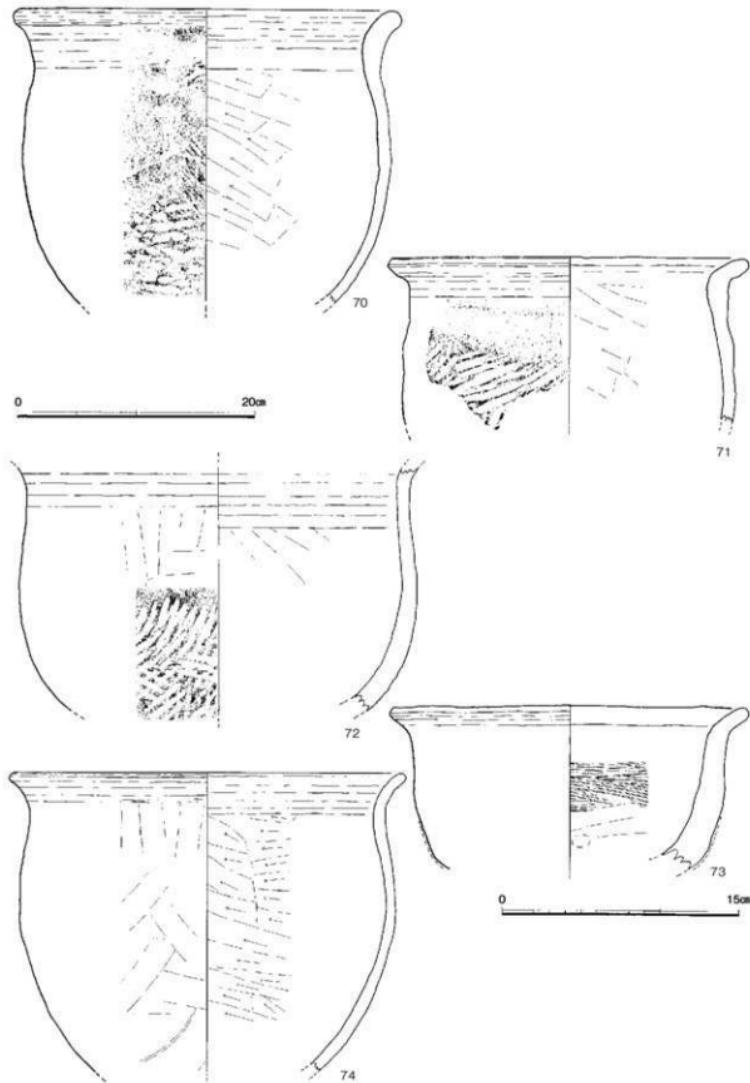
#### SK-51 高坏群（第28図 PL18-1）

X=67463.2,Y=-53205.2で検出した。遺構検出時に地山よりやや暗い部分があり、掘り下げると複数の高坏（75-82）が廃棄された状態で出土した。高坏の下も地山砂層と同じ色調になるまで掘り下げたが他の遺物は出土しなかった。高坏群の深さまでが遺構の埋土であった可能性がある。

75は坏部口径17.3cm、坏部身深5.3cm、底径脚高7.3cm、裾径12.1cm、器高13.7cm。胎土は $\phi$ 2～3mmの



第25図 SC出土遺物実測図その1 (1/3・1/4)



第26図 SC出土遺物実測図その2 (1/3・1/4)

長石・石英。やや粗い。色調はにぶい橙。焼成良好。76は坏部口径16.7cm、坏部身深4.3cm、底径脚径11.6。脚高8.5cm、器高14.5cm。胎土は $\phi$ 2~3mmの長石・石英・赤い石英?・雲母片の混じる粗い土。色調は橙。焼成良好。77は坏部口径17.2cm、坏部身深5.1cm、底径脚径10.9。脚高8.1cm、器高14.4cm。胎土は $\phi$ 2~3mmの長石・石英(赤色も)・雲母片・黒褐粒(鉄分由来?)を含む。粗い土。花崗岩砂混和か。色調はにぶい黄橙。焼成ふつう。78は坏部口径15.5cm、坏部身深4.3cm、底径脚径11.4。脚高8.7cm、器高14.3cm。胎土は $\phi$ 2~3mmの長石・石英。やや粗い。色調はにぶい橙。焼成良好。

79は坏部口径20.2cm、坏部身深5.7cm、底径脚径13.0。脚高7.6cm、器高14.1cm。胎土は雲母片と $\phi$ 1~2mmの長石・石英・赤褐粒を含む。やや粗い土。色調は橙。焼成良好。80は脚径12.0。脚高8.7cm。胎土は $\phi$ 2mm前後の長石・石英・黒褐粒(鉄分)・雲母片を含む粗い土(花崗岩砂か)。

色調は橙。焼成ふつう。81は脚径11.6。脚高7.6cm。胎土は $\phi$ 2mm前後の長石・石英・黒褐粒(鉄分)・雲母片を含む粗い土(花崗岩砂か)。色調は橙。焼成ふつう。82は脚径11.5。脚高7.8cm。胎土は $\phi$ 2mm前後の長石・石英・黒褐粒(鉄分)・雲母片を含む粗い土(花崗岩砂か)。色調はにぶい黄

第2表 箱崎遺跡第40次調査19区方形竪穴状遺構・井戸出土遺物計測表

遺物番号	出土遺構 番号	取上 番号	器種・器形	法単			底部調整
				口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	
230	SC-100		土師器 环(高台付)	15.1	6.6	5	へラ
231	SC-100		土師器 环(高台付)	14.3	7.4	(6)	へラ 完形60%ほど(内面黒色)
232	SC-100		土師器 环(高台付)	15.2	6.4	5.9	へラ(内外面に鶴がおり黒色)
233	SC-100		土師器 环	15.6	11	4	へラ(見込みに僅みあり)
234	SC-100		土師器 环	10.7	8.1	1.6	へラ
235	SC-104		土師器 环(高台付)	15.6	6.7	(5.7)	へラ(高台欠)
236	SC-104		土師器 环(高台付)	15.4	8.3	6.2	へラ(表面にこげ跡)
237	SC-104		土師器 环(高台付)	14.3	(7.2)	(5.8)	へラ(褐色、見込みに僅み)
238	SC-104		土師器 环	11.4	7.1	2.7	へラ(黒色)
239	SC-115		土師器 环(高台付)	16	9	6.1	へラ(見込み部分に穿孔か?)
240	SC-115		土師器 环	10.9	6.4	2.6	へラ・板直(径2~3cmの白色粒含む)
241	SC-128		土師器 环	14.2	9	4.1	へラ(黒直)
242	SC-128		土師器 环	10.6	7	1.6	へラ
243	SC-128		土師器 环	10.4	6.8	1.5	へラ・板直か?(黒直あり)
244	SC-129	R-1	土師器 环(高台付)	15.1	8.3	6	へラ
245	SC-129	R-2	土師器 环(高台付)	14.5	7.6	5.6	へラ
246	SC-129		土師器 环	13.2	9.2	4	へラ・板直
247	SC-129		土師器 环	12.7	8.5	3.6	へラ
248	SC-175		土師器 环	10.2	6.6	1.3	へラ・板直
249	SE-102		土師器 环	10	8.1	1.5	へラ・板直か?
250	SE-102		土師器 环	10.5	8.1	1.8	へラ
251	SE-102		土師器 环	9.1	7.1	1.2	へラ・板直
252	SE-102		土師器 环	9.8	7.4	1.4	へラ・板直
253	SE-102		土師器 环	10.3	9.1	1.6	へラ・板直(見込み部分に板に置いた後をナデ消した様な痕跡)
254	SE-102井口内		土師器 环	15.2	10.8	3.8	へラ(見込みに僅みあり)
255	SE-102井口内		土師器 环	16.1	11.2	4	へラ・板直(見込みに僅みあり)
256	SE-102井口内		土師器 环	16	11.8	4	へラ・板直
257	SE-102井口内		土師器 环	9.7	7.8	1.5	へラ・板直
258	SE-102井口内		土師器 环	9.8	7.6	1.7	へラ・板直
259	SE-102井口内		土師器 环	10	7.6	1.5	へラ・板直
260	SE-102井口内		土師器 环	9.5	7.3	1.5	へラ・板直か?
261	SE-102井口内		土師器 环	9.7	7.4	1.4	へラ・板直
262	SE-102井口内		土師器 环	9.2	7.3	1.1	へラ・板直
263	SE-102井口内		土師器 环	10.3	7.9	1.3	へラ(黒直)
264	SE-102井口内		土師器 环	10.1	7.6	1.3	へラ
265	SE-102井口内		土師器 环	10.1	7.6	1.4	へラ・板直
266	SE-102井口内		土師器 环	10.1	8.1	1.5	へラ
267	SE-102井口内		土師器 环	9.1	7.3	1.2	へラ・板直
268	SE-102井口内		土師器 环	9.4	7.4	1.3	へラ・板直
269	SE-102井口内		土師器 环	9.7	7.1	1.4	へラ・板直
270	SE-103井口内		土師器 环(高台付)	9.8	6.1	2.1	へラ
271	SE-103井口内		土師器 环(高台付)	9.6	5.7	2.4	へラ
272	SE-103井口内		土師器 环	13.8	9.3	4.2	へラ・板直か?
273	SE-103井口内		土師器 环	16	11.4	3.2	へラ・板直(黄土を帯びている)
274	SE-116		土師器 环	10.3	7.8	1.4	へラ・板直
275	SE-116		土師器 环	10.3	7.4	1.7	へラ・板直
276	SE-116		土師器 环	10.2	7.6	1.3	へラ・板直
277	SE-119		土師器 环	7.5	6.4	1.7	へラ・板直(直か?)
278	SE-119		土師器 环	8.8	6.7	1.1	へラ・板直

橙。焼成良好。

高坏は重藤分類の高坏B類I式であり、重藤編年ⅢB期である。

## 古代末～中世

### SK-17 (第27図 PL17-3)

X=67465,Y=-53223.1で検出した。平面楕円形を呈し、長軸1.5m短軸0.7m深0.45mを測る。

土師器壺(83)・皿(84)・高台付坏(85)が出土した。83は口径23.4?cm。胎土はφ3~5mmの長石・石英を多く含む。非常に粗い。色調は外：黒色スス付着。断面：橙(2.5yr6/6)。焼成不良。84は口径10.6cm、底径7.2cm、器高1.9cm。胎土はφ1mm前後の長石・石英・赤褐粒を含む。わりと細かい。色調は灰白(10yr8/2)。焼成ふつう。85は高台径6.1cm、底径高台高1.3cm。胎土はφ1mmの長石・石英を含む。細かい。色調はにぶい橙(7.5yr7/4)。焼成良好。時期は11世紀前半と推定されるがやや根拠が弱い。

### SK-57 (PL18-2)

X=67453.3,Y=-53221.5で検出した。平面楕円形を呈し、長軸1.5m短軸1.3m深0.2mを測る。

### SK-58 (第27図 PL18-3)

X=67462,Y=-53217で検出した。平面楕円形を呈し、長軸2.5m短軸1.9m深0.5mを測る。

土師器坏(86)が出土した。86は口径11.8cm、坏高3.4cm、器高4.3cm。胎土はφ1~2mmの長石・石英・黒褐粒・雲母片を含む。やや細かい土。色調は橙(2.5yr6/6)。外面スス付着。焼成ふつう。

### SK-74 (第27図 PL19-1)

X=67463.8,Y=53234.5で検出した。長軸1.9m短軸1.1m深0.6mを測る。

### P-465 (第27図 PL19-2)

SE-138の覆土を切るように作られている。平面は直径50cmの円形で、深さ90cmを測る。

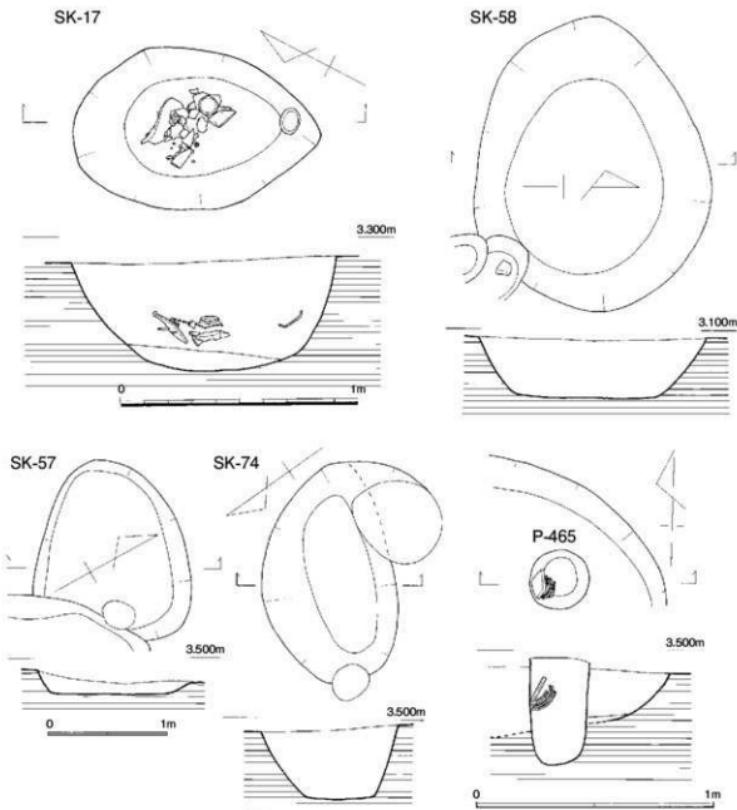
P-465の覆土上層から龍泉系青磁碗I-4a類(87)・同安系青磁皿I-1b類(88)・龍泉系青磁皿I-2b類(89)・龍泉系青磁碗I-4b類(90)が出土した。87は口径16.6(復元)cm、底径6.2cm、器高6.1cm。胎土は精良。色調は胎土は灰色(n6/)。高台内露胎は暗赤褐色(5yr3/2)。釉は灰オリーブ(7.5yr6/2)・緑灰色(7.5gy6/1)(口縁部)・半透明釉。釉下白花粧か。焼成わずかに不良。88は口径10.5cm、底径4.9cm、器高2.1(最大)cm。胎土は精良。色調は胎土は灰白色(2.5y8/1)。露胎部はにぶい黄褐色(10yr5/3)。釉は明緑灰色(7.5gy7/1)・透明釉。焼成良好。89は口径10.35cm、底径4.1cm、器高2.3cm。胎土は精良。色調は胎土は灰白色(7.5y7/1)。露胎部は黄橙色(10yr7/2)。釉は灰オリーブ色(7.5y5/2)・透明釉。焼成良好。90は口径16.2(復元)cm、器高5.8(残高)cm。胎土は精良。色調は胎土は灰白色(2.5y7/1)。釉は灰オリーブ色(5y5/3)・透明釉。焼成良好。時期は12世紀中頃から後半である。

## 井戸

### SE-03 (第30図 PL20-1)

X=67467.2,Y=-53235.9で検出した。堀り方は上面径4mの略円形を呈し、深さは255mを測る。基底部中央に68cm、深さ20cmの井筒の痕跡がみられた。底面の標高1.0mを測る。

土師器皿(91・92)が出土した。91は口径10.2cm、底径8.1cm、器高1.5cm、胎土はφ2~3mmの長石・石英を含む。ふつうの細かさ。色調はにぶい橙(7.5yr7/4)。焼成良好。92は口径10.0cm、高台径6.0cm、底径坏部高1.5cm、器高2.7cm、胎土はφ1mm以下の長石・赤褐粒をわずかに含む。精良。色調



第27図 SK-17・SK-58・SK-74・SK-183・P-465実測図 (1/20・1/40)

は明褐灰 (7yr7/2)。焼成良好。時期は11世紀中頃である。

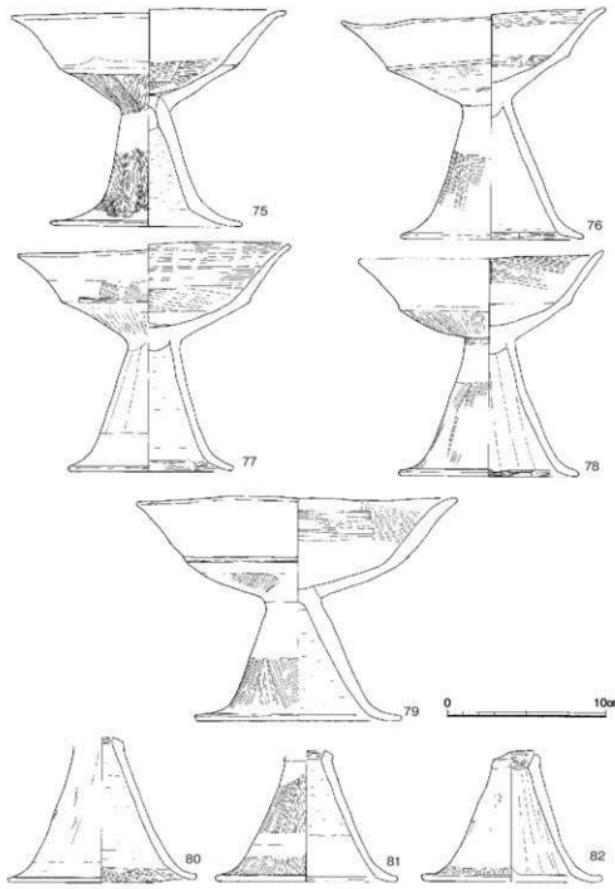
**SE-11** (第30図 PL20-2)

X=67475.1,Y=-53232で検出した。堀り方は上面径5mの略円形を呈し、深さは2.2mを測る。基部中央に50cm、深さ13cmの井筒の痕跡がみられた。底面の標高1.1mを測る。

土師器楕 (93) が出土した。93は高台径10.8cm、底径高台高20cm、胎土は $\phi$ 2~3mmの長石・石英を含む。ふつうの粗さ。色調は淡橙 (5yr8/4)。焼成良好。

**SE-22** (PL20-3)

X=67450,Y=-53210で検出した。堀り方は上面径3.5mの略円形を呈する。

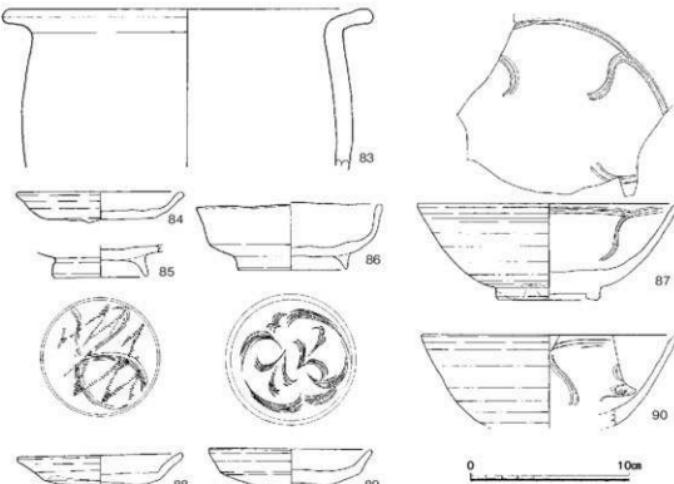


第28図 SK-51出土高杯 (1/3)

**SE-23** (第30図 PL204・204・205)

X=67457.5,Y=-53216.1で検出した。堀り方は上面径4mの略円形を呈し、深さは2.25mを測る。SE-25と切り合うが先後関係不明。基底部中央に60cm、深さ110cmの桶の痕跡がみられた。底面の標高0.98mを測る。

SE-23の上層より白磁碗IV類? (99)・土師器碗 (94-97)・杯 (98)・皿 (100) が出土した。94は高台径7.5cm、底径高台高12cm。胎土は $\phi$ 1mm以下の長石・赤褐粒を含む。やや細かい。色調はにぶい橙 (7.5yr7/3)。焼成良好。95は高台径6.1cm、底径高台高1.1cm。胎土は $\phi$ 1mm以下の長石・赤褐粒を



第29図 SK出土遺物実測図 (1/3)

少量含む。細かい土。色調は淡黄 (2.5y8/3)。96は高台径8.3cm、底径高台高1.5cm。胎土はφ1mm以下の長石を含む。細かい土。色調はにぶい黄橙 (10yr7/4)。焼成ふつう。97は高台径8.2cm、底径高台高1.0cm。胎土はφ1mm以下の長石・赤褐粒を含む。細かいもの。色調は外：スヌ？黒褐 (10yr3/2)。断面：灰白 (10yr8/1)。焼成ふつう。98は口径11.4cm、底径7.7cm、器高2.2cm。胎土はφ1mm以下の長石・赤褐粒を含む。やや細かい土。色調はにぶい橙。焼成ふつう。99は高台径7.0cm、底径高台高0.9cm。胎土は混和材はほとんどないがガサガサした空洞の多い粘り気のない土。色調は胎土：淡黄 (2.5y8/3)。釉：灰白 (2.5y8/1)。焼成。100は口径9.2cm、底径6.5cm、器高1.6cm。胎土はφ1mm以下の黒褐粒を多く含むが細かい土。色調は明褐灰 (7.5yr7/2)。焼成良好。時期は11世紀代である。

#### SE-24 (第31図 PL21-1)

X=67460,Y=-53223.1で検出した。堀り方は上面径3.8mの略円形を呈し、深さは2.27mを測る。基底部中央に66cm、深さ7cmの井筒の痕跡がみられた。底面の標高1.06mを測る。

越州窯青磁碗III-2a類？ (101)・古式土師器高杯 (102) が出土した。101は高台径8.2cm、底径高台高0.9cm。胎土は精良。色調は釉：ムラがあり透明な部分と白色不透明な部分に分かれる。透明部：灰。不透明部：灰白。胎土：釉の透明な部分と白色不透明な部分とで色が異なる。透明釉下：灰白。不透明釉下：橙。焼成焼きムラあり。102は脚高-据高=6.5cm、脚最小径3.2cm、底径脚最大径6.4?cm。胎土はφ2~3mmの長石・石英をわりと多く含む。やや粗い土。色調は橙。焼成良好。

#### SE-25 (第30図 PL20-5)

X=67458,Y=-53217で検出した。堀り方は上面径3.5mの略円形を呈し、深さは2.27mを測る。基底部中央に54cm、深さ8cmの井筒の痕跡がみられた。底面の標高1.02mを測る。

#### SE-26 (第30図 PL21-2)

X=67467.5,Y=-53221で検出した。堀り方は上面径4.3mの略円形を呈し、深さは2.32mを測る。基

底部中央に50cm、深さ15cmの井筒の痕跡がみられた。底面の標高1.07mを測る。

土師器高杯（103）・皿（104-107）が出土した。103は脚最小径3.7cm、底径穴口径約1.1cm。胎土は $\phi$ 1~2mmの長石・石英・赤褐粒を含む。わりと粗い土。色調は浅黄橙。焼成良好。104は口径9.7cm、底径7.4cm、器高1.9cm。胎土は $\phi$ 1mm以下の長石・黒褐粒を含む。細かい土。色調は灰白。焼成良好。105は口径9.1cm、cm、底径7.4cm、器高1.4cm、胎土は $\phi$ 1mm以下の長石・石英・黒褐粒をわずかに含む。細かい土。色調はにぶい橙。焼成良好。106は口径9.3cm、cm、底径7.3cm、器高1.4cm。胎土は $\phi$ 1mm以下の黒褐粒を含む。細かい土。色調はにぶい黄橙。焼成良好。107は口径9.3cm、底径7.4cm、器高1.1cm。胎土は $\phi$ 1mm以下の赤褐・黒褐粒をわずかに含む。細かい土。色調はにぶい橙。焼成良好。時期は11世紀後半である。

#### SE-27 (第31図 PL21-2)

X=67455,Y=-53237.1で検出した。堀り方は上面径4.9mのやや不整な円形を呈し、深さは2.23mを測る。基底部中央に56cm、深さ9cmの井筒の痕跡がみられた。底面の標高1.08mを測る。

土師器杯（109・110）、平瓦（140）、丸瓦（141）が出土した。109は口径12.2cm、底径8.3cm、器高4.2cm。胎土は $\phi$ 1~2mmの長石・赤褐粒を含む。やや細かい土。色調はにぶい橙（7.5yr7/3）。焼成良好。110は口径12.0cm、cm、底径6.3cm、器高3.6cm。胎土は $\phi$ 1mm以下の長石を含む。細かい土。色調は浅黄橙（7.5yr8/3）。焼成良好。時期は11世紀前半である。

#### SE-49 (第31図 PL21-4)

X=67468.3,Y=-53216.8で検出した。堀り方は上面径3.15mの略円形を呈し、深さは2.35mを測る。基底部中央に50cm、深さ22cmの桶の痕跡がみられた。底面の標高1.01mを測る。

#### SE-56 (第31図 PL21-5)

X=674615.7,Y=-53220で検出した。堀り方は上面径2.6mの略円形を呈し、深さは2.1mを測る。基底部中央に45cm、深さ16cmの井筒の痕跡がみられた。底面の標高0.98mを測る。

#### SE-70 (PL21-6)

X=67467,Y=-53210.5で検出した。堀り方は上面径2.5mの略円形を呈する。

土師器皿（111・112）が出土した。111は口径8.8cm、底径6.9cm、器高1.2cm。胎土は砂粒をほとんど含まない。細かい土。色調は橙。焼成良好。底部は回転糸切り+板状圧痕。112は口径8.7cm、底径6.4cm、器高1.4cm。胎土は $\phi$ 1mm前後の長石・石英含む。細かい土。色調は橙。焼成良好。底部は回転糸切り+板状圧痕。時期は12世紀後半である。

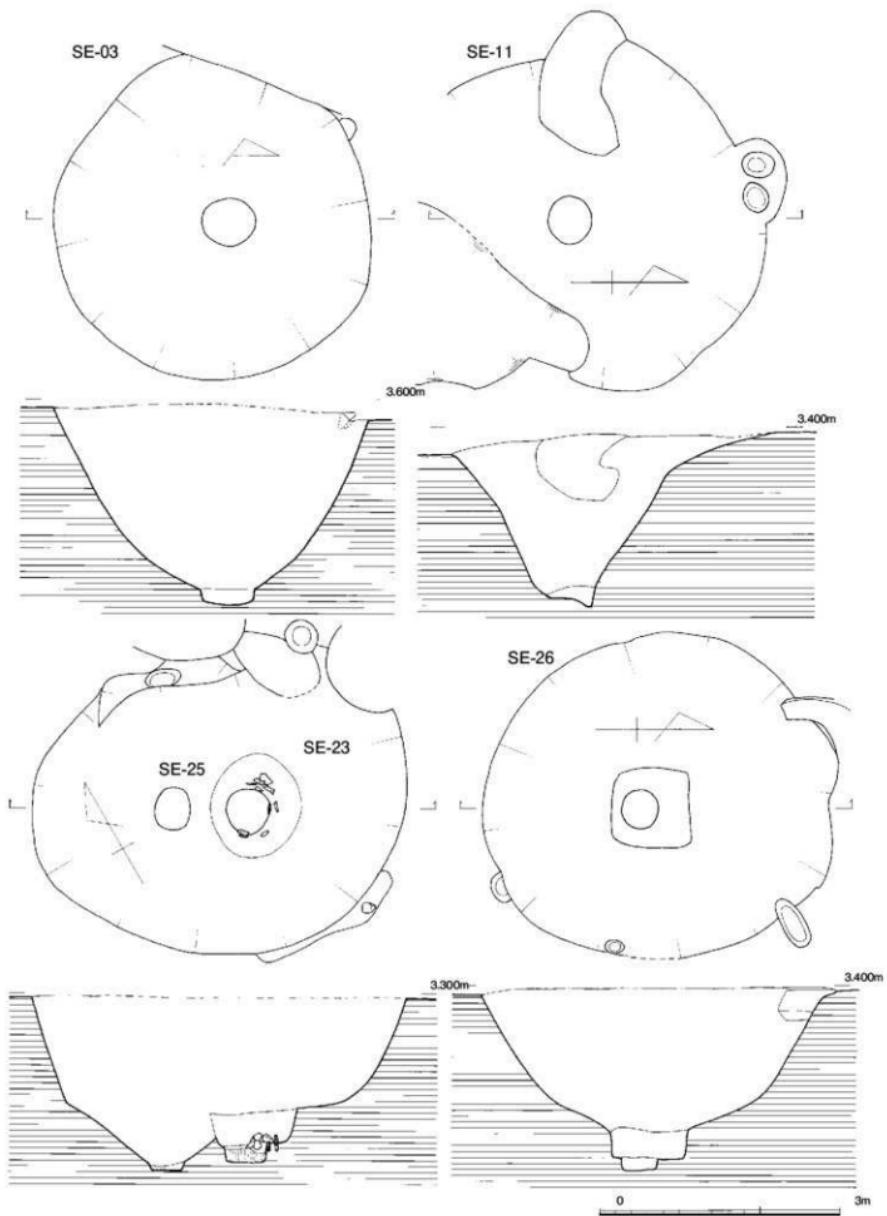
#### SE-77 (第32図 PL22-1)

X=67461.7,Y=-53207.2で検出した。堀り方は上面径1.9mの略円形を呈し、深さは2mを測る。基底部中央に70cm、深さ15cmの井筒の痕跡がみられた。底面の標高1.05mを測る。軒丸瓦（138）が出土した。

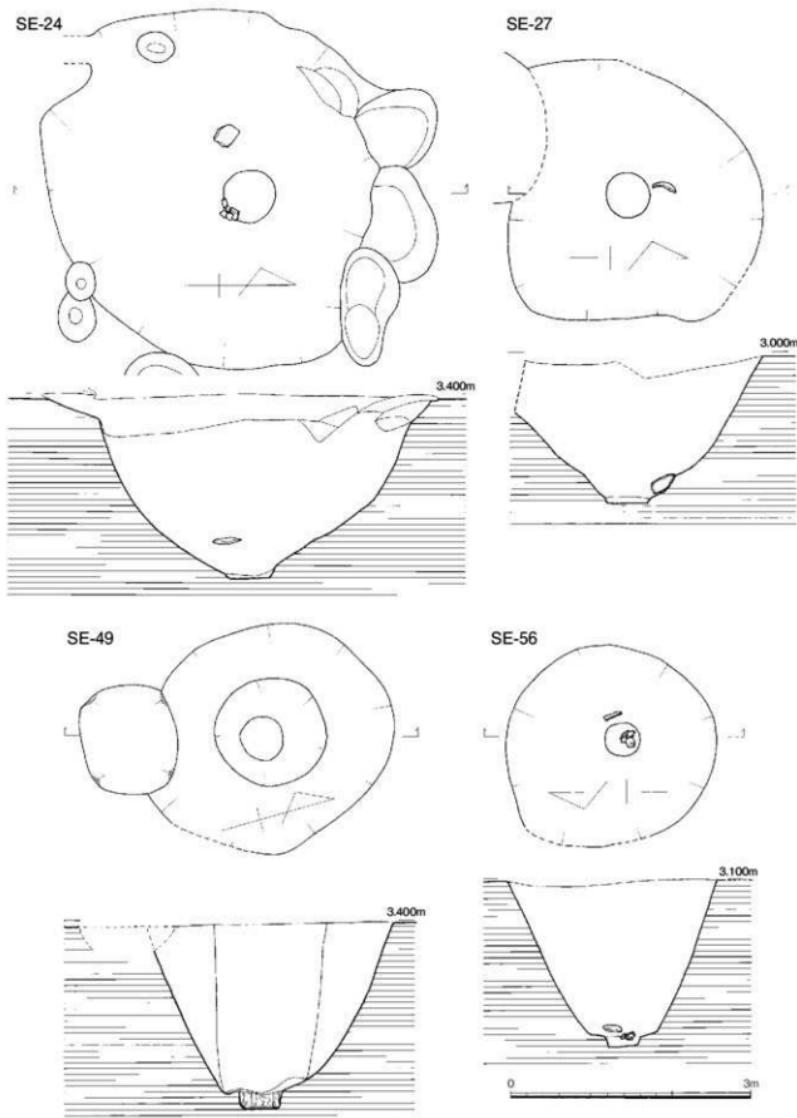
#### SE-78 (第32図 PL22-2)

X=67464.5,Y=-53208.2で検出した。堀り方は上面径3.8mの略円形を呈し、深さは2.03mを測る。基底部中央に50cm、深さ12cmの井筒の痕跡がみられた。底面の標高0.99mを測る。

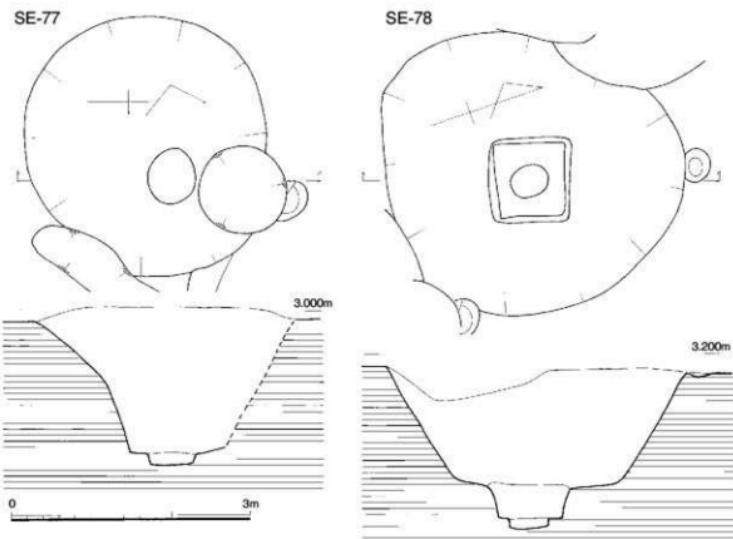
瓦器椀（113）、土師器皿（114・115・116）が出土した。113は口径15.7cm、底径5.3cm、器高6.7cm。胎土は $\phi$ 1~2mmの長石含む。細かい土。色調は灰色（n4/）。焼成ふつう。114は口径9.0cm、器高1.9cm。胎土は $\phi$ 1mm以下の長石・褐色粒をわずかに含む。精良な土。色調は淡橙（5yr8/4）。焼成良好。115は口径9.6cm、器高1.3cm。胎土は $\phi$ 1mm以下の長石・石英・雲母片を含む。細かい土。色調は淡橙（5yr8/4）。焼成ふつう。116は口径9.4cm、底径7.5cm、器高1.5cm、胎土は $\phi$ 1mm前後の長石・石英を少量含む。細かい土。色調は橙（5yr7/6）。焼成良好。時期は11世紀中頃である。



第30図 SE-3・11・23・25・26実測図 (1/60)



第31図 SE-24・27・49・56実測図 (1/60)



第32図 SE-77・78実測図 (1/60)

**SE-101** (第33図 PL22-3)

X=67509,Y=-53221で検出した。堀り方は上面径3.1mの略円形を呈し、深さは2.63mを測る。基底部やや南によりに60cm、深さ21cmの桶の痕跡がみられた。底面の標高0.97mを測る。

**SE-102** (第33図 PL22-4)

X=67502,Y=-53225で検出した。堀り方は上面径3.9mの略円形を呈し、深さは2.57mを測る。基底部中央に50cm、深さ33cmの井筒の痕跡がみられた。底面の標高0.88mを測る。SE-102遺構覆土から土師器皿(249-253)が、井戸枠内から土師器坏(254-257)、皿(258-269)、鉛鑄型(143・146)が出土した。時期は11世紀後半から12世紀前半である。

**SE-103** (第33図 PL22-5)

X=67496,Y=-53223で検出した。堀り方は上面径4.6~3.8mの稍円形を呈し、深さは2.43mを測る。基底部南西よりに60cm、深さ16cmの桶の痕跡がみられた。底面の標高0.9mを測る。井戸枠内から土師器高台付皿(270・271)、坏(272・273)が出土した。時期は11世紀後半である。

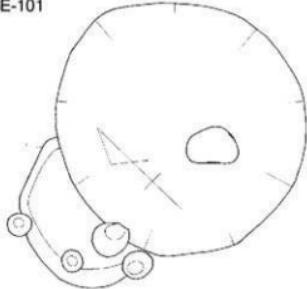
**SE-109** (第33図)

X=67502.7,Y=-53196.5で検出した。堀り方は上面径3.5×2.6mの略長方形を呈し、深さは2.65mを測る。基底部中央南寄りに65cm、深さ46cmの桶の痕跡がみられた。底面の標高0.63mを測る。

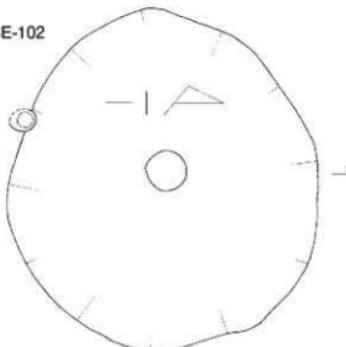
**SE-113** (PL22-6)

X=67501.2,Y=-53199.4で検出した。堀り方は上面径1.7×1mの歪な長方形を呈し、深さは0.71mを測る。底面の標高2.64mを測る。

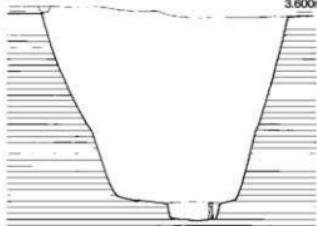
SE-101



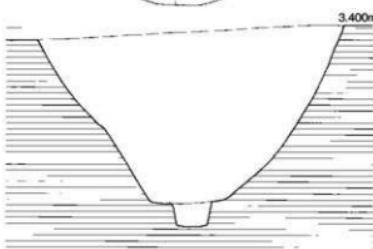
SE-102



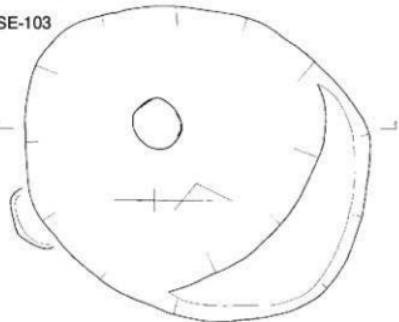
3.600m



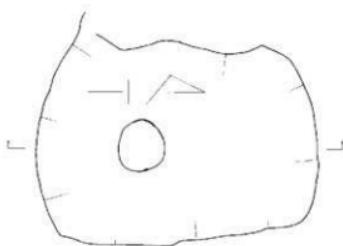
3.400m



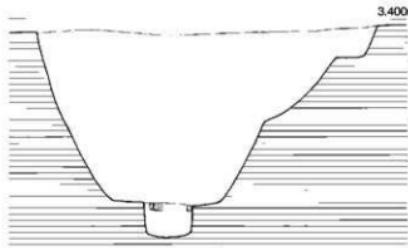
SE-103



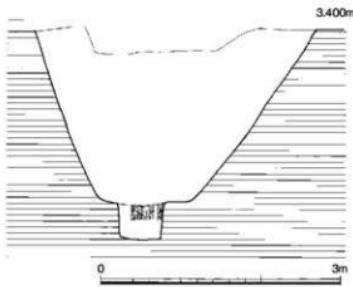
SE-109



3.400m



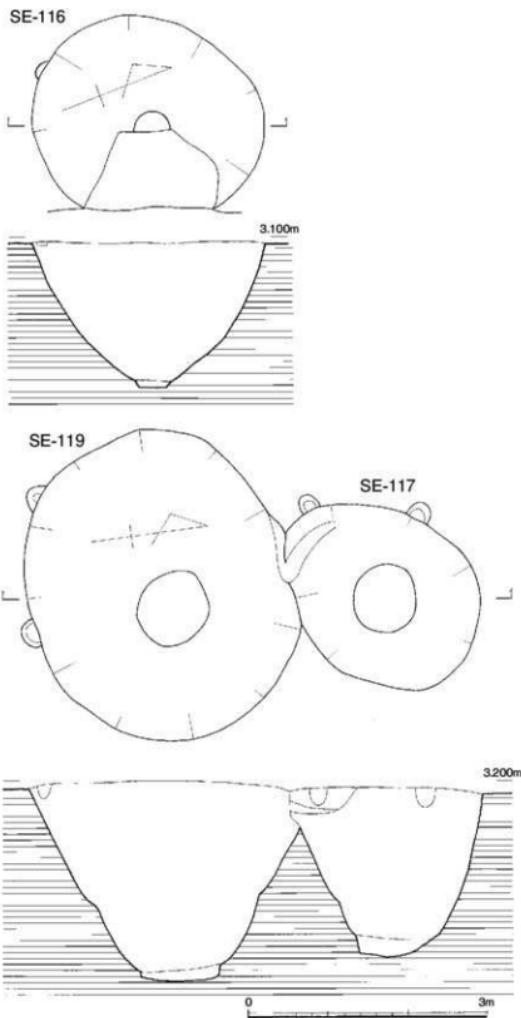
3.400m



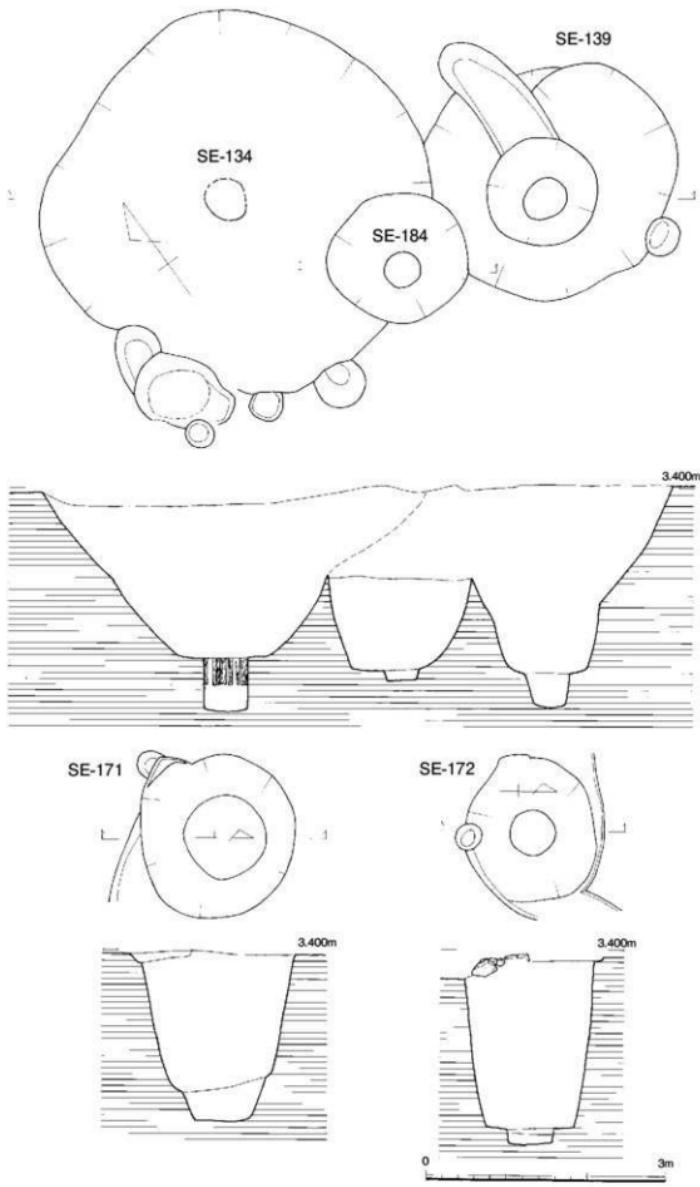
0

3m

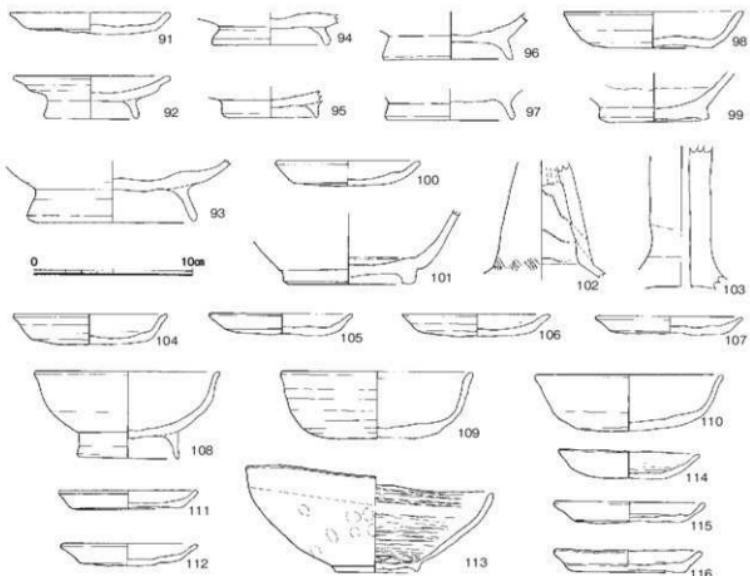
第33図 SE-101・102・103・109実測図 (1/60)



第34図 SE-116・117・119実測図 (1/60)



第35図 SE-134・139・171・172・184実測図 (1/60)



第36図 SE出土遺物実測図 (1/3)

**SE-116** (第34図 PL23-1)

X=67482,Y=-53197.3で検出した。堀り方は上面径2.9mの略円形を呈し、深さは1.89mを測る。基底部中央に45cm、深さ10cmの井筒の痕跡がみられた。底面の標高1.19mを測る。土師器皿(274-276)、鉢型(147)が出土した。10世紀後半~11世紀前半である。

**SE-117** (第34図 PL23-2)

X=67479,Y=-53200で検出した。堀り方は上面径2.5×2.1mの梢円形を呈し、深さは2.17mを測る。基底部中央に95cm、深さ22cmの井筒の痕跡がみられた。底面の標高0.98mを測る。

**SE-119** (第34図 PL23-3)

X=67476.5,Y=-53200.3で検出した。堀り方は上面径3.2×3.95mの梢円形を呈し、深さは2.39mを測る。基底部中央に100cm、深さ22cmの井筒の痕跡がみられた。底面の標高0.66mを測る。土師器皿(277・278)が出土した。時期は12世紀前半である。

**SE-134** (第35図 PL23-4)

X=67491.5,Y=-53210.5で検出した。堀り方は上面径3.5mの略円形を呈し、深さは2.61mを測る。基底部中央に60cm、深さ70cmの井筒の痕跡がみられた。底面の標高0.53mを測る。

**SE-138** (PL23-5)

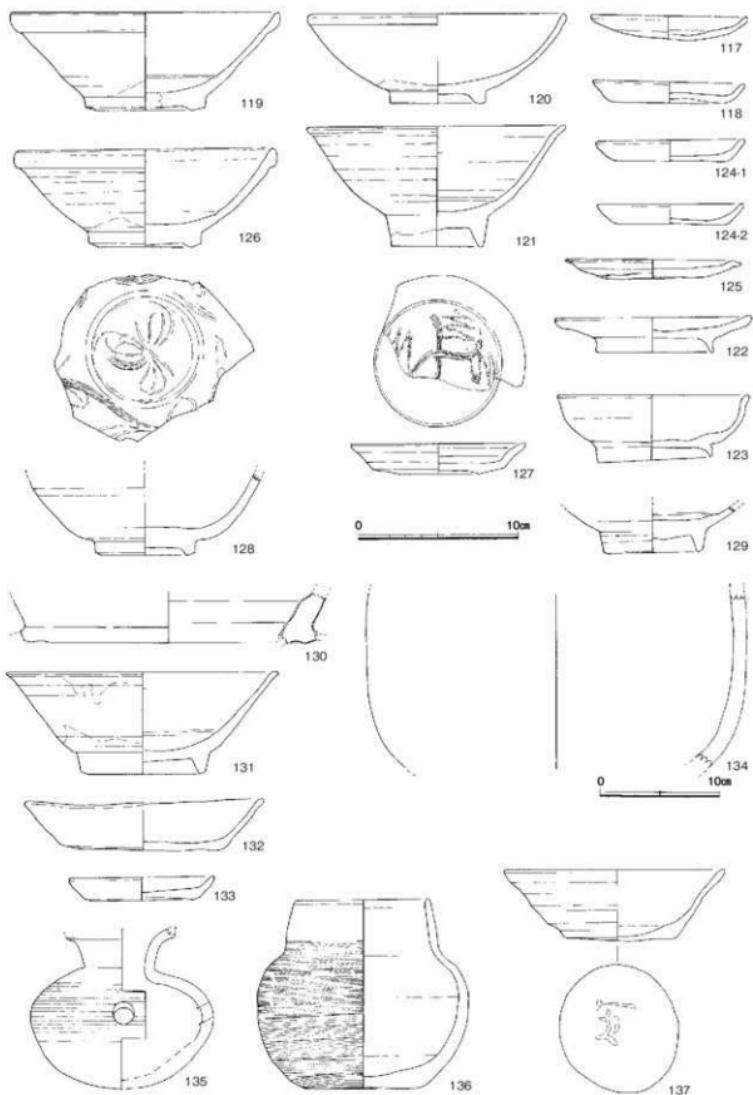
X=67489,Y=-53208.3で検出した。堀り方は上面径3.2mの略円形を呈し、深さは2.82mを測る。基底部中央に60cm、深さ44cmの井筒の痕跡がみられた。底面の標高0.63mを測る。

### SE-184 (第35図 PL23-6)

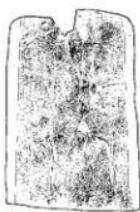
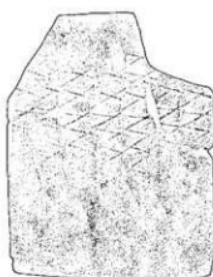
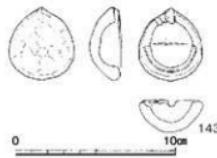
X=6749.0 Y=-5319.5で検出した。堀り方は上面径1.7mの略円形を呈し、深さは2.45mを測る。基底部中央に45cm、深さ16cmの井筒の痕跡がみられた。底面の標高0.96mを測る。

### ピット・搅乱・遺構外出土遺物

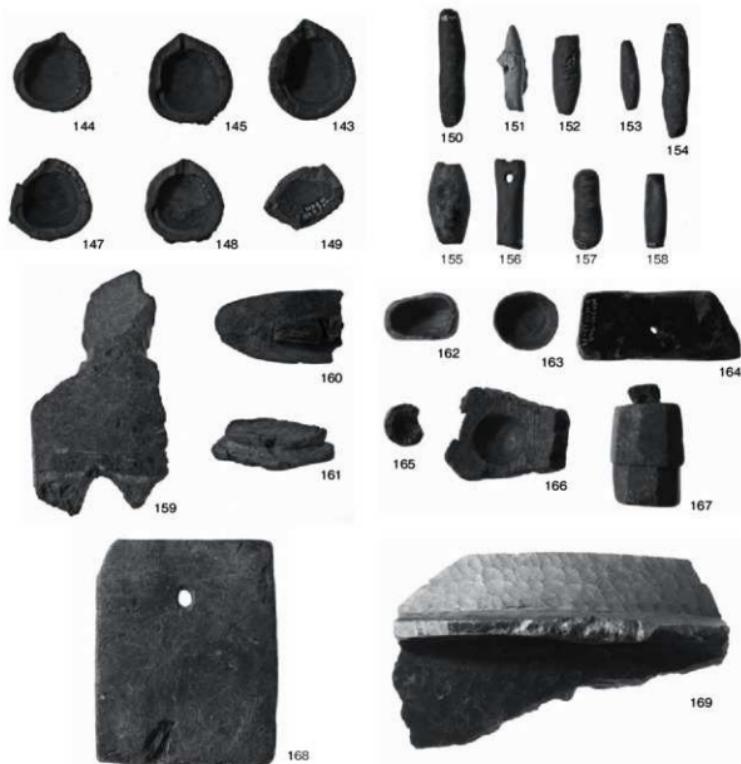
117はP-29出土の土師器皿。口径9.9cm、器高1.5cm。胎土はφ1~2mmの茶褐粒を含む。細かい土。色調は灰白。118はP-60出土の土師器皿。口径9.6cm、器高1.4cm。胎土はφ1mm前後の長石・石英を多く含む。粗い土。色調はにぶい黄橙。119はP-122出土の白磁碗IV-1c類。口径17.0cm、高台径7.6cm。胎土は1mm程度の黒色粒子を含む。やや砂質（ガラス化はしていない）で粗い。色調は胎土：白色。釉：乳白色。焼成良好。堅緻。120はP-128出土の白磁碗II-1類。口径16.4cm、高台径6.0cm。胎土は1mm程度の黒色粒子を含む。やや砂質（ガラス化はしていない）。色調は胎土：白色。釉：乳白色。焼成良好。堅緻。121はP-677出土の白磁碗V-2a類。口径13.35cm、底径5.8cm、器高7.7cm。胎土はやや気泡有り。色調は胎土：浅黃橙色（10yr8/3）。釉：灰白色（10yr8/2）。焼成二次被熱により不良。122はP-72出土の土師器小皿。口径12.4cm、器高2.2cm。色調は浅黃橙。123はP-100出土の土師器椀。口径12.1cm、椭高3.4cm、器高4.3cm。胎土はφ1mm前後の長石・石英・雲母片。やや細かい土。色調はにぶい橙。124-1はP-216出土の土師器小皿。口径9.4cm、器高1.4cm。胎土は長石・石英などφ1mm前後の砂粒を多く含む。やや粗い土。色調は黄灰。焼成ふつう。124-2はP-216出土の土師器小皿。口径9.3cm、器高1.3cm。胎土はφ1mm前後の長石・石英を含む。やや細かい土。色調はにぶい黄橙。焼成ふつう。125はP-288出土の土師器皿。口径11.2cm、器高1.3cm。胎土はφ1~2mm前後の茶～赤褐粒を多く含む。φ1mm以下の長石・石英を含む。126はP-541出土の白磁碗IV-1a類。口径16.3cm、底径7.1cm、器高6.3cm。胎土は細かな黒色粒子を含み、やや気泡有り。色調は胎土：灰白色（5y8/1）。釉：灰白色（7.5y8/1）、透明釉。焼成良好。127はP-641出土の同安系青磁皿I-2b類。取上番号R-2。口径11.0（復元）cm、底径5.0cm、器高1.95cm。胎土はやや気泡有り。色調は胎土：灰白色（2.5y7/1）。底部露胎はにぶい褐色（7.5yr5/3）。釉は明緑灰色（7.5y7/1）、透明釉。焼成良好。128はP-779出土の龍泉窯系青磁碗I-2a類。底径6.3cm、器高5.2（残高）cm。胎土は精良。色調は胎土：浅黃橙色（10yr8/3）。釉：灰オーブ色（7.5y6/2）、透明釉でややにごる。焼成やや不良。129はP-780出土の白磁碗VI類？底径6.2cm、器高残高2.9cm。胎土は1~2mmの黒色粒子を多く含む。色調は胎土：浅黄橙色。釉：灰白色・白く濁り不透明。釉下：白化粧。焼成やや不良。130は搅乱1出土のイスラム陶器（巻頭図版2）。胎土は全体に細かい孔がありガサガサした触感。色調は胎土：灰白（5y8/2）。外面の釉はエメラルドグリーン。内面・上面の釉は明緑灰（10gy7/1）。中近東文化センター研究員岡野智彦氏に対応をしていたとき、同館所蔵のイスラム陶器を実見することが出来た。また岡野氏には箱崎遺跡出土イスラム陶器は口縁部ではなく壺の底部ではないかというご教示を頂いた。131は搅乱10出土の白磁碗VI-1類。口径17.2（復元）cm、底径7.9cm、器高6.45cm。胎土は細かな気泡を含む。色調は胎土：灰白。釉：灰色・透明釉。焼成良好。132は搅乱14出土の土師器坏。口径15.1cm、器高3.2cm。胎土はφ1mm前後の雲母片を含む。細かい土。焼成ふつう。133は搅乱22出土の土師器皿。口径9.2cm、器高1.4cm。胎土はφ1mm以下の長石をわずかに含む。精良な土。焼成良好。134はSX-21付近出土の土師器甕。胎土はφ1~2mmの長石を含む。粗いもの。色調は外：黒色スス付着。断面：明赤褐（2.5yr5/6）。焼成不良。135は遺構外出土の須恵器甕。胴径11.6cm、胴部高7.7cm。胎土はφ1mmの長石。細かい。色調は灰色（n5/）。濃緑色の自然釉がかかる。焼成良好。136は遺構外出土の須恵器短颈壺。口径8.5? cm、13.3cm、底径7.3cm、器高12.0cm。胎土はφ3mm以下の長石。色調は暗青灰



第37図 ピット・搅乱・遺構外出土遺物 (1/3・1/4)



第38図 19区出土瓦・鈴鋳型 (1/3・1/4・1/6)



第39図 19区出土 鈴鋳型・管状土錘・石製品・温石・石鍋写真（縮尺不定）

(5b4/I)。焼成良好。137は北側掘り下け時（遺構外）出土の土師器環。口径13.3～13.8（？）cm、器高4.5cm、胎土はφ2～3mmの長石。やや細かい。色調はにぶい橙（7.5yr7/4）。焼成ふつう。墨書あり。

138はSE-77出土の单弁八葉蓮華文軒丸瓦。内区中央は圓線によって囲まれ1+4の蓮子を配している。139はSC-132出土の複弁蓮華文軒丸瓦。140はSE-27出土の平瓦。外面格子タタキ。内面布目圧痕。141はSE-27出土の丸瓦。外面格子タタキ。内面布目圧痕。142はSC-116出土の偏向唐草文軒平瓦（卷頭図版2）。取上番号R-01。143はSE-102出土の鈴鋳型。長さ4.6cm、幅4.05cm、高2.0cmを測る。胎土精良。色調は灰～暗灰。焼成良好。

その他19区から出土した遺物を第39図写真と第3表およびPL39に示した。また19区出土の銭と21区、24区出土の銭を併せて第4表に示した。280は19区包含層出土の石鎧（PL39）。長49.6mm、幅14.9mm、厚4.9mmを測る。石材は圧力変成岩だが詳細不明。

第3表 第39図19区出土鉛鋳型・管状土鍤・石製品・温石・石鍋観察表

遺物 番号	出土遺構	器種	法量(cm) ( )は復元			胎土・材質	備考
			長	幅	厚		
144	P-400	鉛鋳型	3.61	3.46	1.71	土製・きめ細かい	全体に被熱
145	P-400	鉛鋳型	4.05	3.79	1.71	土製・きめ細かい	全体に被熱・外面焼土付着
146	SE-102	鉛鋳型	4.53	4.03	1.94	土製・きめ細かい	全体に被熱
147	SE-116	鉛鋳型	3.6	3.65	1.7	土製・きめ細かい	全体に被熱・外面焼土付着
148	S-147	鉛鋳型	3.76	3.53	1.64	土製・きめ細かい	全体に被熱・外面焼土付着・一部欠損
149	P-400	鉛鋳型	(2.86)	(3.56)	1.85	土製・きめ細かい	全体に被熱・約1/2残存
150	SK-66	管状土鍤	5.92	1.37	孔径0.35	土製・やや砂粒	完存
151	道構検出面	土鍤?	(4.26)	1.44	孔径0.4	土製・きめ細かい	やや陶質・孔は貫通しない・魚形?
152	SE-49井筒	管状土鍤	(4.03)	1.46	孔径0.34	土製・やや砂粒	一方の端部を欠損する
153	複乱26	管状土鍤	3.5	0.98	孔径0.2	土製・きめ細かい	完存
154	SK-66	管状土鍤	5.77	1.38	孔径0.43	土製・やや砂粒	ほぼ完存
155	SK-66	管状土鍤	4.1	2.01	孔径0.51	土製・きめ細かい	ほぼ完存
156	SE-63	土鍤	(4.56)	1.28	孔径0.53	土製・きめ細かい	端部欠損
157	SE-23井筒	石鍤?	4.08	1.35		石材不明	完存
158	SE-23井筒	管状土鍤	3.74	1.13	孔径0.42	土製・きめ細かい	完存
159	SC-128	石鍋破片再加工	(11.58)	(6.16)	1.76	滑石	石鍋口縁部破片を再加工。未成品
160	D37リットル 包含層	鉛鋳石製品	(5.94)	3.46	1.95	滑石	石鍋再加工か
161	SE-109	鉛鋳石製品?	(5.7)	(2.26)	1.61	滑石	石鍋再加工か
162	複乱4	容器複形	3.54	2.31	1.86	滑石	完存・やや壊れた丸形容形の口縁
163	SC-76	容器複形	3.14	2.84	1.38	滑石	完存・きわめて薄い体部
164	SE-23・25 上層一括	不明有孔 石製品	7.96	3.4	1.96	滑石	中央に径0.6cmの孔有り、煤が付着
165	不明	容器複形	2.17	1.97	(1.4)	滑石	未成品
166	P-110	不明石製品	5.84	4.56	1.56	滑石	径2.4cm深さ約1cmの球状の瘤みを作る。外周煤付着
167	道構検出面	最大径 不明石製品	3.61	高4.91	縫合高0.8	滑石	段を有する八角柱。縫合部径0.4cmの孔
168	SK-107	有孔板状石製品	12.15	95	17	滑石	長方形の板状、径0.94cmの孔が有り 縫合部が観察される。温石?
169	SK-121	石鍋	L1径39 (復元)	(18)	23	滑石	残高10.5cm外周煤付着 約1/8残存

第4表 箱崎遺跡第40次19区・第46次21区・第49次24区出土銭一覧

遺物番号	出土遺構	銘銘	年号	西暦
031835010	19-b区 複乱	皇宋通寶	寶元二年	1039年
031835006	19-b区 P-425	不明		
031835007	19-b区 P-597	不明		
043430027	21区 北側包含層上層	不明		
043430028	21区 北側包含層上層	天聖元寶	天聖元年	1023年
043430029	21区 北側包含層上層	咸平元寶	咸平二年	999年
043430030	21区 複乱2	元豐通寶	元豐元年	1078年
043430031	21区 複乱4(石廣)	紹聖元寶	紹聖元年	1094年
050430001	24区 複乱1	寛永通寶		
050430002	24区 道構検出面	嘉祐元寶	嘉祐二年	1057年

第5表 箱崎遺跡第40次調査19区主要遺構座標値一覧

略号	番号	X座標	Y座標	略号	番号	X座標	Y座標	略号	番号	X座標	Y座標
SX	01	674685	-53225	SK	65	67475.5	-53213.5	SK	135	67489.5	-53202
SX	02	674765	-53222	SK	66	67473	-53214.2	SK	136	67487.5	-53202
SE	03	674675	-53235.9	SK	67	67474	-53215	SE	137	67486.4	-53201
SK	05	674591	-53233.4	SK	68	67476.2	-53214.8	SD	139	67489	-53201
SK	06	674595	-53227	SK	69	67476.5	-53215.3	SK	140	67487	-53201
SK	07	67461	-53227	SE	70	67467	-53210.5	SD	141	67486.2	-53214.6
SK	08	674648	-53228.7	SX	72	67475.5	-53233.9	SK	142	67490	-53213.2
SK	10	674681	-53231.3	SD	73	2号方形周溝墓		SK	143	67490.5	-53203.5
SE	11	674751	-53232	SK	74	67463.8	-53234.5	SK	144	67489.5	-53204.5
SK	12	SE11の一部		SD	75	67451.5	-53211.3	S	145	67499.4	-53204.4
SD	13	SD8511統合		SC	76	67454.4	-53216	S	147	1号方形周溝墓	
SK	14	674765	-53228.5	SE	77	67461.7	-53207.2	S	148	67492	-53201
SK	15	P358		SE	78	67464.5	-53208.2	SK	149	67491.5	-53223.2
SD	16	674745	-53222	SD	79	67462.5	-53230.1	S	150	67486.9	-53219.3
SK	17	67465	-53223.1	SK	80	SK1411統合		SD	151	67485.8	-53218
SK	18	67461	-53224	SC	81	67477.9	-53227	SK	152	67483.5	-53220.3
SK	19	674636	-53224.6	SK	82	67477.5	-53224.7	S	153	67482.4	-53221.7
SK	20	674635	-53214	SK	83	67475.2	-53221.6	S	154	67481.6	-53224.6
SX	21	67451.2	-532218	SK	84	67478.8	-53223.8	SK	155	67482.3	-53226.1
SE	22	67450	-53210	SD	85	67466	-53229.2	SK	156	67482.1	-53222
SE	23	67457.5	-53216.1	SK	86	1号方形周溝墓		SK	158	67489.2	-53226.9
SE	24	67460	-53223.1	SX	87	67476.5	-53219.5	SK	159	67504	-53223.8
SE	25	67458	-53217	SC	88	67478	-53223	SK	160	67502.7	-53220
SE	26	67467.5	-53221	S	89	67468.7	-53234.6	SK	161	67511	-53221.3
SE	27	67455	-53237.1	SX	90	67451.3	-53214.6	SD	162	67507.5	-53222.6
SD	28	67449	-53216.5	SC	100	67486	-53198	SD	163	67504	-53218.3
SD	29	67448.5	-53219	SE	101	67509	-53221	SD	164	67502	-53218.7
SD	30	67452	-53212.5	SE	102	67502	-53225	SD	165	67498	-53216.5
SD	32	674522	-53215	SE	103	67496	-53223	SK	166	67500	-53215
SD	33	67453.5	-53216	SC	104	67491	-53221	SC	167	67495.3	-53203.2
SK	34	67457	-53213	SK	105	67501.3	-53191.6	SK	169	67365.8	-53201
SD	35	67451.2	-53218	SK	106	67502.5	-53193.4	S	170	67496.7	-53214.3
SD	36	67450	-53220.5	SK	107	67501.7	-53194.8	SE	171	67495.9	-53216
SD	37	67452	-53219	SK	108	67499.5	-53194.4	SK	172	67479.8	-53210.9
S	38	67454	-53217	SE	109	67502.7	-53196.5	SD	174	67502.4	-53211.3
SD	39	67455.2	-53219.2	SK	110	67497.8	-53191.8	SC	175	67485.1	-53209
SK	40	67460.3	-53212.7	SK	111	67496.5	-53195.6	SC	176	67494.5	-53205.3
SK	41	67462	-53212	SE	113	67501.2	-53199.4	SD	177	67501.1	-53196
SK	42	67460.3	-53215	SK	114	67489.3	-53196	SD	178	67499.3	-53204
SD	44	67454.5	-53224	SC	115	67483.3	-53197.5	SK	179	67499	-53197
SK	45	67463.4	-53218.2	SE	116	67482	-53197.3	S	180	67496	-53194
SK	47	67464.3	-53215.4	SE	117	67479	-53230	SC	181	SC100と重複	
S	48	67466	-53215	S	118	67478.8	-53197.6	SK	183	67501.3	-53215.8
SE	49	67468.3	-53216.8	SE	119	67476.5	-53200.3	SE	184	67490	-53195
SK	51	67463.2	-53205.2	S	120	67474.3	-53199.5	SD	185	67501	-53197.5
SD	52	67464.3	-53226	SK	121	67473.5	-53200	SK	186	67504	-53221.2
SK	53	67466.2	-53225.5	SK	122	67473.7	-53201	SK	187	67501.9	-53198
SK	54	67461.4	-53221.7	SD	123	67475	-53203.5	1号墳(中心)	67486.2	-53209.5	
SK	55	67462.4	-53221.3	SK	124	67479	-53208	2号墳(中心)	67502.5	-53221.1	
SE	56	67461.5	-53220	S	125	67483.6	-53203.2				
SK	57	67453.3	-53221.5	SD	126	67484.7	-53213.5				
SK	58	67462	-53217	SC	128	67496.5	-53200				
SK	59	67473	-53205.5	SC	129	67493.5	-53200.3				
SK	60	67474	-53206	SK	130	67493.3	-53202.8				
SD	61	67469	-53205.3	SK	131	67496	-53204.1				
SD	62	67473	-53206.5	SC	132	67496	-53206				
SK	63	67474.5	-53209.5	SC	133	67496.8	-53208.6				
SK	64	67477.7	-53211	SE	134	67491.5	-53210.5				

## 21区

### 1. 概要

西鉄バス吉塚営業所の敷地内で旧社員駐車場の部分。昨年度調査した箱崎遺跡第40次調査19区の東側で、箱崎遺跡の南東端にあたる部分。南北28m東西6mの、幅が狭く縦に長い調査区である。調査次数は箱崎遺跡第46次である。廃土搬出ができないため、バックホウで剥いだ表土を、調査区東側の道路建設予定地に廃土を仮置きして調査を行うことになった。

2005年2月21日よりバックホウによる表土剥ぎ開始。2月23日、調査区全面の表土剥ぎ終了。表土剥ぎの結果、調査区東側は擾乱をかなり受けていることが判明。南側は遺構面が深く現地表面下2mでほどで検出された。遺構面の標高は約3.0mである。調査区北側は残りが良好であり、包含層を残した状態で調査着手することとした。また調査区北西端で南北方向に走る石で作られた溝、調査区中央付近に煉瓦造りの建物基礎が残存していた。いずれも近代～現代のものである。バックホウで撤去すると周囲の遺構を破壊するおそれがあったため、石溝構造を人力で撤去し、煉瓦造り建物基礎はそのまま残しながら周囲の遺構を掘削することとした。

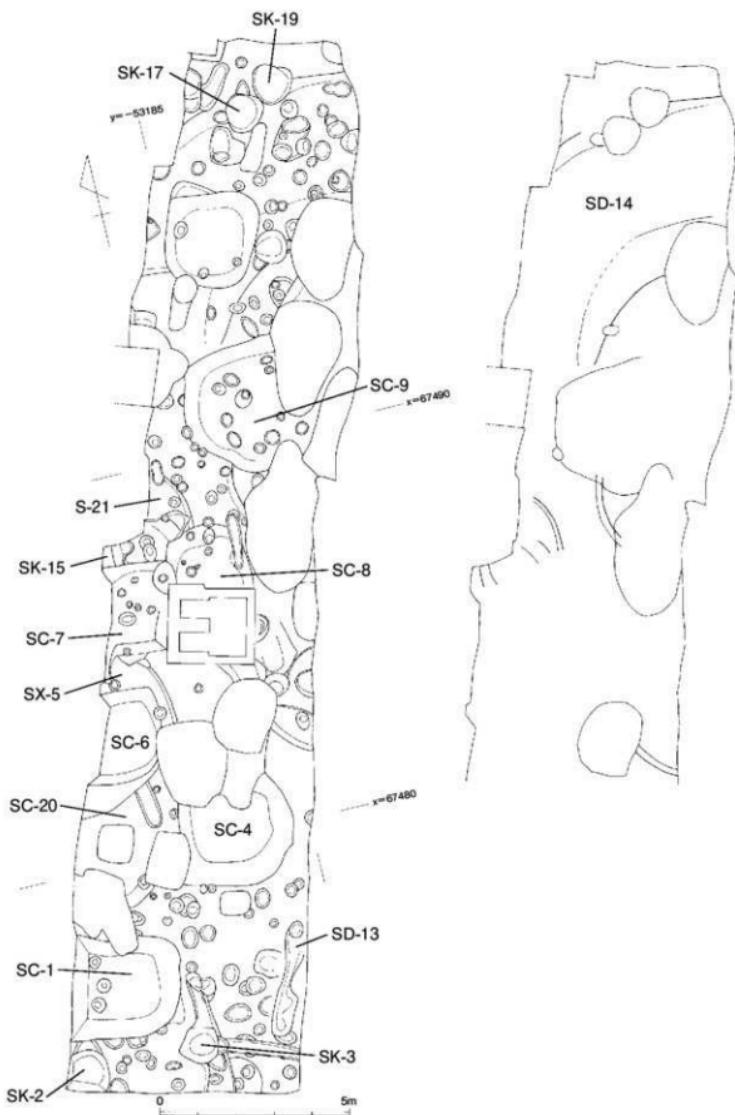
2月23日より機材搬入し南端より調査を開始した。3月1日南半分調査終了。北半分調査に着手。3月15日北半第一面の調査終了。高所作業車を用いて21区全景写真撮影を行う。測量完了後、第二面の精査に入る。3月29日北半第二面調査終了。第二面の全景写真撮影および測量を行った。埋め戻しは土木局との協議の結果、調査区内にある煉瓦造り建物基礎を土木局が撤去した後に行うことになり、3月29日に機材撤収して、調査を完了した。

包含層からは元豊通宝など北宋銭が5点出土。包含層で遺構は検出できなかった。包含層の遺物は12～13世紀が中心、第1面では約2m間隔で一辺2～3mの方形堅穴状遺構を7軒検出。時期はおよそ10～11世紀、うち1基からは綠釉陶器1点が出土した。調査区のほぼ中央付近で届葬した人骨と副葬品と思われる土師器、磁器を検出。棺や掘り方は検出できなかつたが、釘が数点出土しており木棺墓であると考えられる。ただし、19区など箱崎遺跡全域で多く検出される12～13世紀の井戸が、本調査区では1基も検出されなかつた。第2面では古墳時代の土師器が出土した溝1条、土壙もしくは住居1基を検出した。どちらも立ち上がりと床面が明確ではない。遺構ではなく地山のくぼみに古墳時代の土師器を含む土が堆積したものである可能性がある。

標高は19区と比較すると低く、西側の宇美川にむかって緩やかに傾斜していく緩斜面であったと推定される。現在の箱崎遺跡の西南端はこの21区であるが、21区における遺構の分布から判断して、JR鹿児島線の旧線路くらいまでは遺跡の広がりが見られそうである。

### 2. 遺構と遺物

21区における遺物を含む土は黒褐色砂質土の遺物包含層、および遺構の覆土である黒褐色砂質土と暗褐色砂の3種類がある。箱崎遺跡40次調査19区の調査成果をふまえると、覆土のうち、前者が古代末～中世の、後者が古墳時代の遺構覆土である。ただし、後者については遺物出土量が少ないため、遺構か否かの判断がつきづらい。SD-14がこれに該当する。21区の調査は、まず包含層を掘削した後、遺構検出を行い、黒褐色覆土の遺構から掘削し、写真撮影および測量を行った。次いで再度精査し、地山の明褐色砂層より暗い部分を掘削し、写真撮影および測量を行う、という遺構面が2面ある遺跡と同様の手順を踏んだ。2度目の掘削で、検出した暗褐色砂部分のうち、遺物が少量でも出土したものは遺構として取り扱っている。



第40図 箱崎遺跡第46次調査21区遺構配置図 (1/125)

21区では、発掘調査時点では、遺構にはS-1から、ピットにはP-1から順に遺構名を付して遺物の取り上げを行った。本報告ではSのあとに遺構の種類を示す記号を付し、SC-1のように示す。

本報告ではまず古代末～中世の遺構、次いで時期不明の遺構の順に記述を行った。古代末～中世の遺構の中では19区の記述方法にあわせ、最初に墓（SX）の記述を行い、その他は方形堅穴状遺構（SC）、土坑（SK）と遺構を示す記号のアルファベット順に、記述を行った。時期不明の遺構では溝（SD）の記述を、最後に包含層出土など遺構外出土遺物の記述を行った。

## 古代末～中世

### 墓（SX）

#### SX-5（第41図 PL25-1）

調査区中央で検出した。青磁碗・土師器小皿と共に人骨が出土。全体に残存状況は不良で、頭蓋骨・大腿骨・脛骨が確認できた。頭位方向はN-35°-Wで、右体側を下にした側臥屈肢葬である。黒褐色～暗茶褐色砂質土である北側包含層の最下層で検出した。方形堅穴状遺構SC-7南側上層に位置しており、SC-7埋没後に作られたものである。平面プランは確認できなかった。釘が人骨の周囲から出土しており、木棺に埋葬されたものと推定される。木棺の推定法量は横50cm×縦130cmである。遺物もほとんど乱れが無く木棺内に安置したものと思われる。

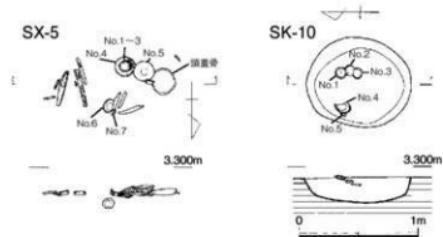
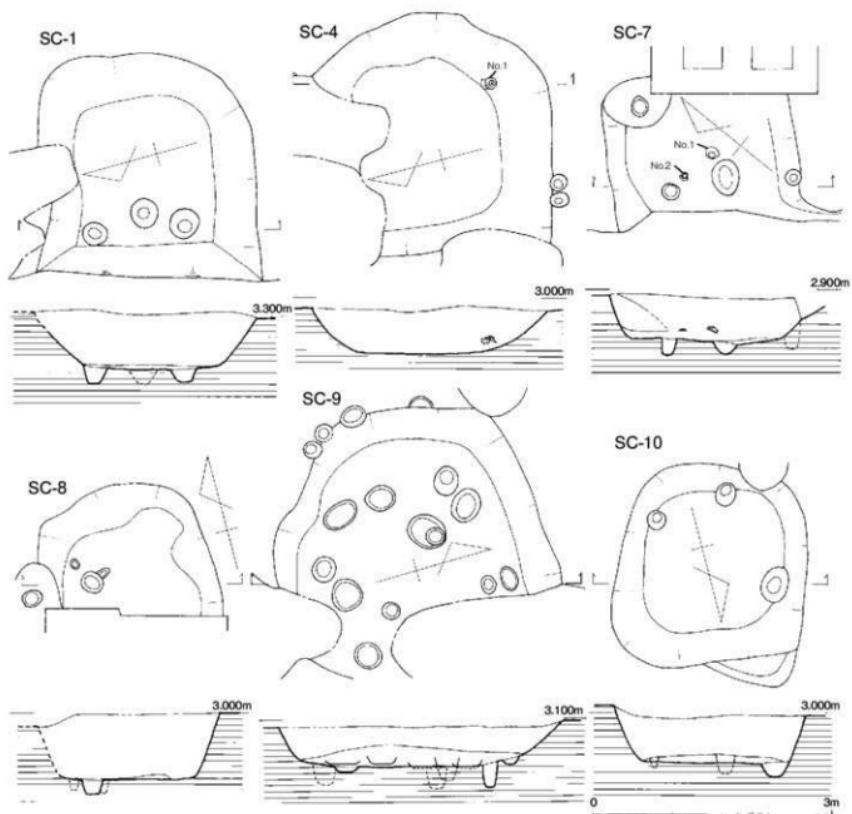
龍泉窯系青磁碗II-a類（170・171）、土師器小皿（173-175）、鉄釘（176-1・176-2）が出土した。副葬品と思われる。170は口径17cm、底径5.7cm、器高6.6cm。取上番号No.4。胎土はやや細かい。色調は暗緑色～黄緑色（釉）、灰色（胎土）。焼成良好。171は口径17cm、底径6cm、器高6.5cm。取上番号No.5。胎土は緻密、色調は暗オリーブ灰（釉）、灰色（胎土）。焼成硬質堅緻。172は口径8.8cm、底径6.8cm、器高1.3cm。取上番号No.1。胎土はやや細かい。色調は褐色～暗褐色、（外底部は茶色～黒茶色）。焼成普通～やや不良。底部は回転糸切り+板状圧痕。173は口径9cm、底径7.2cm、器高1.35cm。取上番号No.1。胎土は細かい、色調は褐色～暗褐色。焼成良好。底部は回転糸切り+板状圧痕。174は口径9.3cm、底径7.5cm、器高1.15～1.3cm。取上番号No.3。胎土はやや細かい（若干粒を含む）、色調は薄褐色～褐色。焼成良好。底部は回転糸切り。175は口径10cm、底径6.3cm、器高1.7cm。取上番号No.6。胎土はやや細かい（側面および底部の一部に0.5～1mmの黒斑）、色調は薄褐色。焼成良好。底部は回転糸切り（？）。176-1は器高残存長：5（推定）cm。色調は表面（付着物）：灰黃褐色。176-2は器高残存長：5.6cm。末端に木質残る、端部ねじ曲がり欠損、色調は付着物：灰黃褐色、表面：赤褐色。時期は13世紀前後～前半である。

### 方形堅穴状遺構（SC）

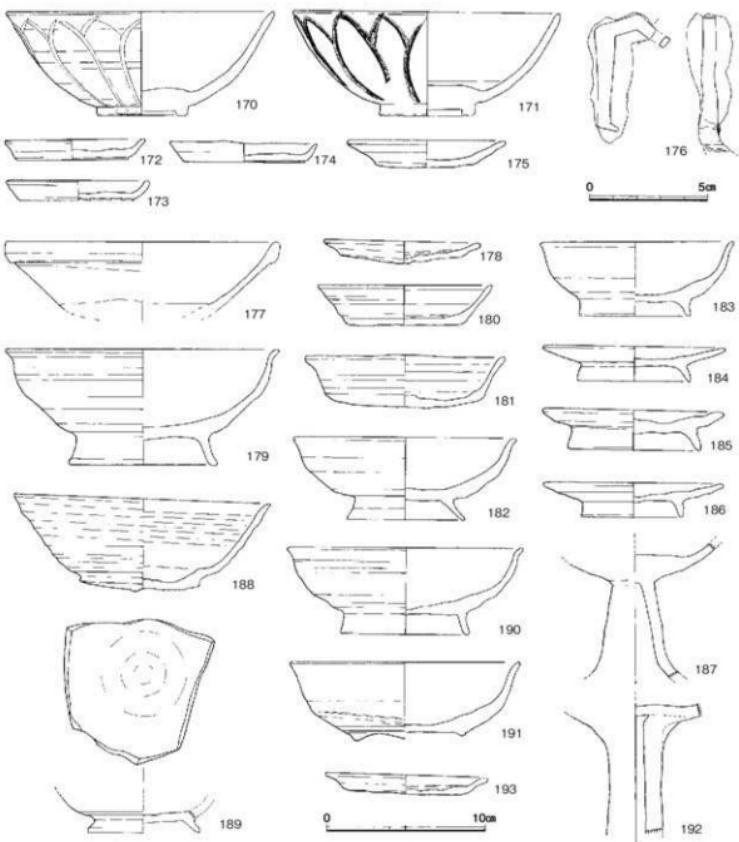
#### SC-1（第41図 PL25-2）

調査区南側で検出した。短辺2.7m、長辺2.8m以上の隅丸長方形を呈し、深さ0.72mを測る。

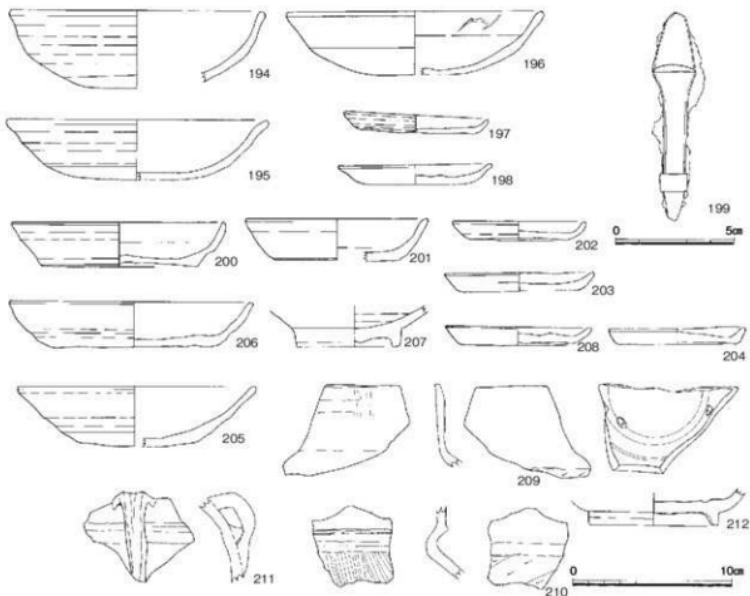
SC-1上層から白磁碗IV類1（177）・土師器小皿（178）が、SC-1から土師器高台付壙（179）・壙（180・181）が出土した。177は胎土緻密（小さな黒色粒多数含む）。色調は青白色を帯びた白色。焼成硬質堅緻。178は口径9.9cm、底径7.7cm、器高1.5cm。胎土は細かい（径3mmの粒を3つほど含む）、色調は黄褐色～灰色。焼成少々悪い。底部は回転糸切り+板状圧痕（回転糸切り後へラで整形か？）。179は口径17.3cm、底径9.4cm、器高7.3cm。胎土は細かい（金雲母含む）、色調は黄褐色～褐色（内面はこげ茶～黒色）。焼成良い。底部は回転糸切り。180は口径11cm、底径7cm、器高2.5cm。胎土は細かい（微細な金雲母含む）、色調は暗褐色～黒色。焼成良い。底部は回転糸切り。181は口径12.7cm、底



第41図 SC-1・4・7・8・9・10,SX-5,SK-10 (1/40・1/60)



第42図 SX・SC出土遺物実測図 (1/2・1/3)



第43図 SK・SD・ピット・遺構外出土遺物実測図 (1/2・1/3)

径10.1cm、器高3.3cm。胎土は細かい（微細な金雲母含む）、色調は黄褐色～やや明るい褐色。焼成少々悪い。底部は回転系切り+板状圧痕。時期は11世紀前半である。

#### SC-4 (第41図 PL25-3)

調査区南側で検出した。一辺が約3mの隅丸方形を呈し、深さ0.85mを測る。底面に柱穴等は見られない。

土師器高台付椀 (182)、緑釉陶器片 (巻頭図版2) が出土した。182は口径14cm、底径7.5cm、器高5.2cm。取上番号No.1。胎土はやや細かい、色調は暗褐色～茶褐色。焼成良好。

#### SC-6 (PL26-1)

調査区中央で検出した。一辺2.4mの隅丸長方形を呈すると考えられる。

土師器高台付椀 (183)、高台付皿 (184-186)、高坏 (187) が出土した。183は口径12.3cm、底径7cm、器高4.65cm。胎土はやや細かい、色調は暗褐色～黒茶色。焼成良好。184は口径11.5cm、底径7.1cm、器高2.1～2.25cm。胎土はやや細かい、色調は褐色～暗褐色。焼成良好。185は口径11.5cm、底径8.3cm、器高2.5cm。胎土はやや細かい、色調は暗褐色。焼成良好。186は口径11.4cm、底径6.3cm、器高2.2cm。胎土はやや細かい、色調は褐色。焼成良好。187は器高残存高：8.4cm。胎土はやや細かい～普通（脚部内部で土がタテにしわ寄せされている）、色調は橙褐色。焼成良好。

#### SC-7 (第41図 PL26-2)

調査区中央で検出した。幅1.5m×1.5m以上の長方形を呈すると考えられる。深さ0.6mを測る。

土師器壺（188）、黒色土器椀（189）が出土した。188は口径16.3cm、底径7.7cm、器高5.5~6.1cm。胎土は少々粗い（1cm大の石を含む）。色調は大部分が暗灰色、見込みの部分と底部のみこげ茶色。焼成良好。底部は回転糸切り？ 189は底径7cm、器高残存高：2.6cm。胎土は細かい、色調は灰色～黒色。焼成良好。時期は12世紀中頃である。

#### SC-8（第41図 PL26-3）

調査区中央で検出した。一辺2.3mの隅丸方形あるいは隅丸長方形を呈する、深さ0.82mを測る。

土師器高台付椀（190）が出土した。190は口径15cm、底径8.2cm、器高5.5cm。胎土は細かい～やや細かい、色調は褐色～橙褐色。焼成良好。

#### SC-9（第41図 PL27-1）

調査区北側で検出した。一辺3.6m、やや不整な隅丸方形を呈する、深さ0.49mを測る。

土師器高台付椀（191）、高壺（192）が出土した。191は口径14.6cm、底径6.8（推定）cm、器高残存高：5cm。胎土はやや細かい～普通、色調は褐色～暗褐色。焼成良好。192は高壺口径cm、底径cm、器高残存高：8.7cm。胎土は細かい～やや細かい、色調は褐色～褐灰色。焼成良好。

#### SC-11（第41図 PL27-2）

調査区北側で検出した。一辺が2.5mの隅丸方形を呈する、深さ0.73mを測る。

土師器小皿（193）が出土する。193は口径10.2cm、底径7.3cm、器高1.2~1.4cm。胎土は細かい、色調は白褐色。焼成良好。底部は回転糸切り。時期は12世紀前半である。

### 土坑（SK）

#### SK-3

調査区南側で検出した。一辺1mのやや不整な方形を呈する土壤。深さ0.5mを測る。

土師器壺（194-196）、土師器小皿（197・198）、鉄鎌（199）が出土した。194は口径16.2cm、底径9.4cm、器高5cm。胎土は細かい、色調は表：黒色、裏：黄褐色（白っぽい）。焼成良好。195は口径17cm、底径11.2cm、器高3.8cm。胎土は細かい（径3mmの白色粒含む）、色調は灰色。焼成少々悪い。底部は回転糸切り+板状圧痕。196は口径16.3cm、底径13.5cm、器高4cm。胎土は細かい、色調は黄褐色。焼成良い。底部は回転糸切り。197は口径9.2cm、底径7.6cm、器高0.9~1.5cm。胎土は細かい（見込み部分中央に径3mm程のオレンジ色の粒含む）、色調はやや白い褐色～うすい灰褐色。焼成良好。底部は回転糸切り。198は口径9.8cm、底径6.2cm、器高1.25cm。胎土はやや細かい、色調は褐色（口縁部に赤味かかっている）。側面外部および、底部の半分は赤紫色）。焼成良好。底部は回転ヘラ切り。199は両刃の鉄鎌。頭部は短く、棘闘。古墳時代の遺物であろうか。器高残存長：8.7、刃部幅：1.8cm。色調は付着物：黄色～極暗赤褐色。時期は12世紀中頃である。

#### SK-10（第41図 PL27-3）

調査区北側で検出した。長径0.88m、短径1.75mの楕円形を呈する土壤。深さ0.2mを測る。

土師器壺（201）、小皿（200・202-204）が出土した。200は口径13.6cm、底径9.7cm、器高2.8cm。取上番号No.4。胎土はやや細かい（径3mm程の白色粒多数含む）、色調は暗褐色～灰色。焼成やや良好。底部は回転糸切り。201は口径11.6cm、底径8cm、器高2.5cm。取上番号No.5。胎土は多少粗い（白色粒含む）、色調はやや明るい褐色～こげ茶。焼成良い。底部は回転糸切り。202は口径8.5cm、底径6.3cm、器高1.2cm。取上番号No.3。胎土は細かい（径2.5cmの白色粒含む）、色調はやや白い褐色。焼成良好。底部は回転糸切り+板状圧痕。203は口径9.5cm、底径7.5cm、器高1.2cm。取上番号No.2。胎土は細かい～やや細かい、色調は褐色（一部黒と茶色に変色）。焼成良好。底部は回転糸切り。204は口径8.6cm、

底径7.5cm、器高1cm。取上番号No.1。胎土は細かい、色調は褐色。焼成良好。底部は回転糸切り。時期は13世紀後半から14世紀前半である。

#### SK-15

調査区中央で検出した。径0.4mの円形を呈する、深さ0.36mを測る。

土師器壺（205）が出土した。205は口径15cm、底径9.5cm、器高4cm。胎土は細かい、色調は黄褐色。焼成やや良好。底部は回転糸切り。時期は12世紀中頃～後半である。

#### SK-17

調査区北側で検出した。径1m、深さ0.87mのやや不整な円形を呈する。

白磁碗Ⅷ2類（207）、土師器壺（206）、小皿（208）が出土した。206は口径15.7cm、底径10.5cm、器高3cm。胎土は少々粗い（径3mmほどの白色粒多数含む）、色調は灰白色～褐色。焼成良好。底部は回転糸切り。207は残存径：6.5cm。胎土は緻密（少し黄色みを帯びている）、色調は灰色。焼成硬質堅緻。釉が削り取ってある。208は口径9.6cm、底径7.6cm、器高1.2cm。胎土は細かい、色調は褐色～こげ茶。焼成やや良好。底部は回転糸切り。時期は12世紀中頃である。

#### 時期不明

##### 溝（SD）

##### SD-14（第40図右 PL24.2）

調査区北側第二面で検出した。地山砂層より若干暗い砂の部分があり、地山砂層と同じ色調になるまで掘り下げたところ幅約4.5m深さ0.45mを測り、弧状に湾曲した溝となった。形状は円墳周溝と類似しているが、遺物の出土が少なく、古式土師器の破片が2点出土したのみであった。ただし、箱崎遺跡第40次調査1号墳・2号墳とも古墳周辺から遺物の出土が少なく、遺物が少ないことからただちに、古墳周溝であることを否定できない。本稿では根拠が弱いため時期不明の溝として扱った。

古式土師器 短頸壺口縁部片（209）、北陸系二重口縁壺口縁部片（210）が出土した。209は、胎土はやや粗い土（径2mm前後の砂粒含む）。色調は赤色。口縁部外面タテハケ後ヨコナデ。口縁部内面ヨコナデ。胴部外面ヨコナデ。胴部内面斜めケズリ。210は、胎土はやや細かい土（径1mmの砂粒含む）。色調は中：赤褐色 外：橙色。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面タテハケ。胴部内面斜めケズリ。

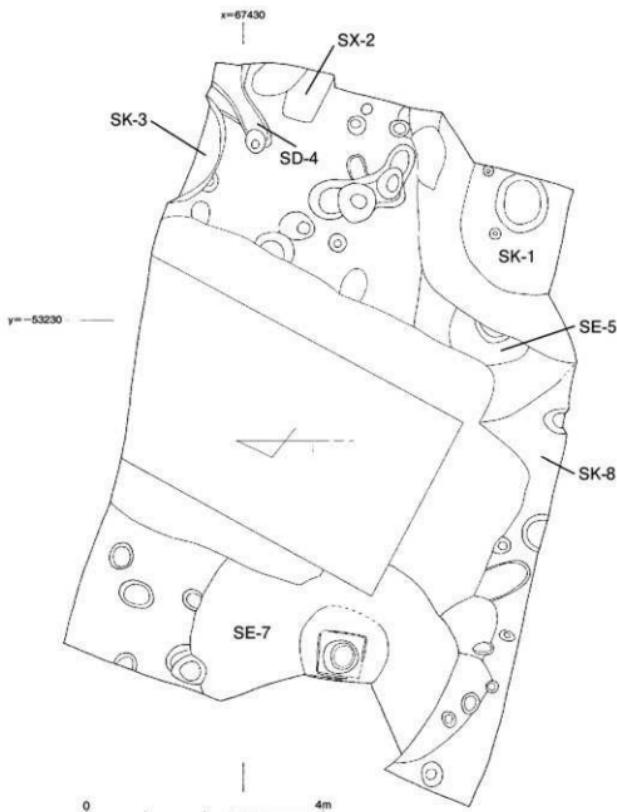
#### その他遺物

211は北側包含層中層出土の把手付須恵器破片。横方向に凸帯を巡らせ、縦に把手を取り付けている。胎土はやや粗い土（径2mmの長石含む）、色調は中：灰色、外：灰色～鈍い黄褐色（部分的に）。焼成良好。212は北側包含層下層出土の綠釉陶器碗口縁部片。器高残存高：2.1cm、胎土はやや細かい？（断面に釉がかかっている（1～3ミリ程度）、色調は緑。焼成良好。

## 22区

### 1. 概要

西鉄バス吉塚営業所の敷地内で旧バス駐車場の部分。昨年度調査した19a区の南側にあたる。個人返却予定地の調査であり、狭小の調査区である。土砂は場内処理のため反転して調査を行うこととなった。調査期間に平行して西側で共同溝の設置工事が行われ、また22区は西鉄吉塚バス営業所のバス出入り口付近の調査でもあり、工事関係車両およびバスの出入りが激しい条件下での調査となつた。前年度末の2005年3月28日～29日にかけてバックホウによる調査区東半分の表土剥ぎを行つた。調査区を東西に分け東半から先に調査開始。調査区の中央に6×3m深さ2mのコンクリートの建物基



第44図 箱崎遺跡第49次調査22区遺構配置図（1/80）

礎が埋まっていることが判明。この基礎は2m以上深く埋設されているため、撤去は難しく、残したまままで調査を行った。この結果22区の調査面積のうち半分から4分の1の面積が削られることになった。4月5日より作業員を入れ、東半調査開始し、遺構掘削・写真撮影・遺構測量を行った。4月14日にバックホウによる土砂反転を行った。15日より作業員を入れ、西半調査開始。遺構掘削・写真撮影・遺構測量を行った。4月20日明け方に福岡県西方沖地震の最大級の余震が福岡地方を襲った。幸い本調査区では被害は全くなかった。4月22日にバックホウで表土の埋め戻しを行い、機材を撤収し、調査を終了した。

遺構面は表土を取り除いた高さの3.470～3.420mに設定。この面から人骨1体、井戸2基、方形竪穴状遺構1基、ピット10数基を検出した。

## 2. 遺構と遺物

22区における遺構の覆土は黒褐色砂質土と暗褐色砂の2種類がある。箱崎跡遺40次調査19区の調査成果をふまえると、前者が古代末～中世の、後者が古墳時代の遺構覆土の可能性がある。ただし、後者については遺物出土量が少ないため、遺構か否かの判断がつきづらい。SK-6・8がこれに該当する。22区の調査は、まず包含層を掘削した後、遺構検出を行い、黒褐色覆土の遺構から掘削し、写真撮影および測量を行った。次いで再度精査し、地山の明褐色砂層より暗い部分を掘削し、写真撮影および測量を行う、という遺構面が2面ある遺跡と同様の手順を踏んだ。2度目の掘削で、検出した暗褐色砂部分のうち、遺物が少量でも出土したものは遺構として取り扱っている。

22区では、発掘調査時点では、遺構にはS-1から、ピットにはP-1から順に遺構名を付して遺物の取り上げを行った。本報告ではSのあとに遺構の種類を示す記号を付し、SC-1のように示す。

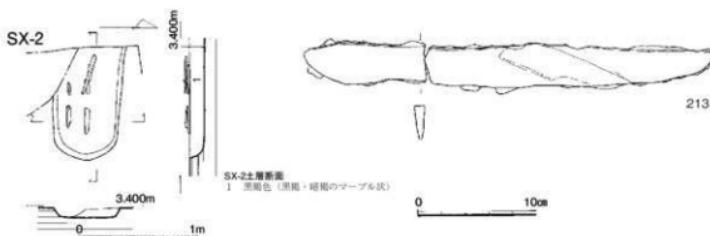
本報告ではまず古代末～中世の遺構、次いで時期不明の遺構の順に記述を行った。古代末～中世の遺構の中では19区の記述方法にあわせ、最初に墓（SX）の記述を行い、その他は方形竪穴状遺構（SC）、井戸（SE）と遺構を示す記号のアルファベット順に、記述を行った。時期不明の遺構では土坑（SK）の記述を行った。

### 古代末～中世

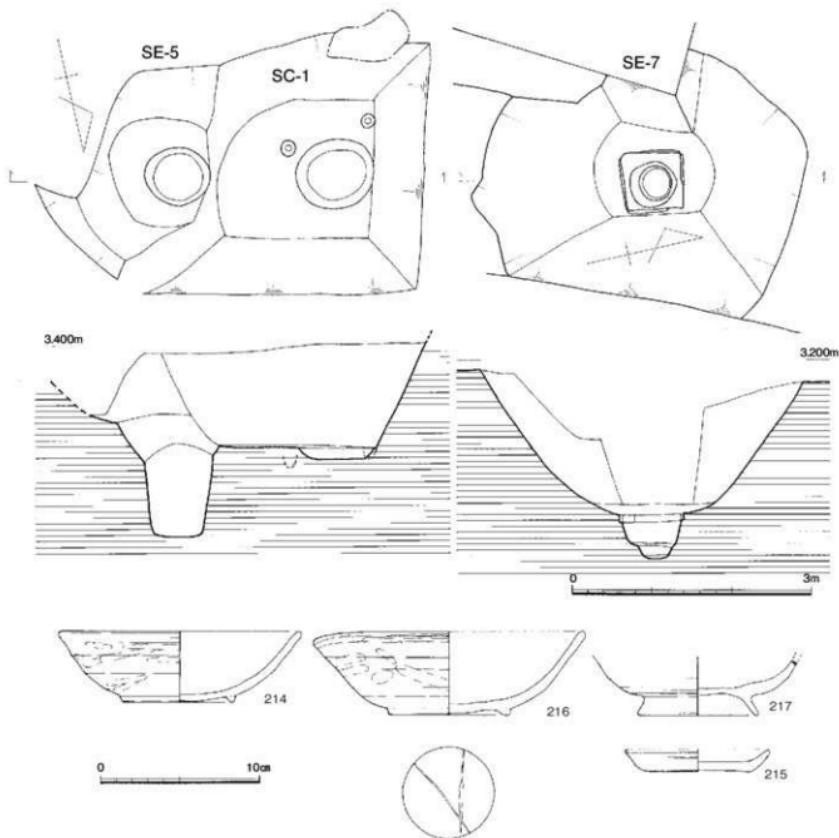
#### 墓（SX）

##### SX-2（第45図 PL29-1）

調査区東半で検出した。調査区で確認できたのは下半身のみであり、上半身は調査区外に伸びてい



第45図 SX-2実測図（1/40）およびSX-2出土鉄刀実測図（1/4）



第46図 SC-1, SE-5・7実測図（1/60）および22区出土遺物実測図（1/3）

て確認できなかったが、頭位はN-103°-E、仰臥伸展葬と推定される。墓壙は平面隅丸長方形を呈し、短辺57cm、長辺80cm以上を測る。鉄釘の出土が見られず、土坑墓の可能性がある。人骨の残存状況は非常に悪く、脆弱。左右の大脛骨および左右の脛骨を確認できた。鉄刀（213）が左大脛骨の上から出土した。骨と錯着しており、鉄刀に人骨の一部が付着している。鉄刀は切先を頭側に、刃を外側に向ける形で出土した。213は残存長34.6cm、刃部最大幅3.4cm、棟幅9mmを測る。茎尻の形状不明。現状での色調は暗紫灰（SP3/1-SPR3/1）である。底部糸切りの土師器片が出土しており、時期は12世紀中頃以降である。

### 方形竪穴状遺構（SC）

#### SC-1（第46図 PL29-2）

調査区東半で検出した。底面に2本の径20cmを測る柱穴および、直径45cmを測る土坑を有する。焼土が底面付近で確認できることと、底面に柱穴を有することから、方形竪穴状遺構としたが、堀りかたが非常に深く、また中央の土坑が井筒とよく似たサイズであることから、井戸である可能性も考えられる。

瓦器碗（214・216）、土師器小皿（215）が出土した。214は口径15.4cm、底径7cm、器高4.5cm。胎土は細かい、色調は灰色～褐灰色。焼成良好。215は口径9.2cm、底径6.8cm、器高1.4cm。胎土は細かい、色調は褐色。焼成良好。底部は回転糸切り。216は口径17.3cm、底径7.6cm、器高5.3cm。取上番号No.1。胎土は細かい、色調は褐色～灰色。焼成良好。底部ヘラ記号あり。時期は12世紀後半～13世紀前半である。

### 井戸（SE）

#### SE-5（第46図 PL29-2）

調査区東半で検出した。径3.0mの円形を呈すると考えられる、深さ2.36mを測る。ほぼ中央に径0.85m、深さ1.07mの井筒の痕跡が残る。

#### SE-7（第46図 PL29-3）

調査区西半で検出した。径4.2mの円形を呈する、深さ2.6mを測る。底面中央に径0.6m、深さ0.42mの井筒の痕跡が残り、さらにこの上に一辺0.8mの方形の枠を組む。

土師器椀（217）が出土した。217は底径7.6cm、器高残存高：3.6cm。胎土は細かい。色調は褐色～灰色。焼成良好。

### 時期不明

### 土坑（SK）

#### SK-6

調査区調査区中央南側で検出した。覆土は暗褐色砂で、二度目の精査時に検出した。

土師器壺（222）、小皿（223）が出土した。222は口径14.1cm、底径11.2cm、器高29cm。取上番号No.2。胎土は細かい（内面にヘラでなでつけたようなどとあり、丁寧な作り）、色調は黄褐色。焼成良好。底部は回転ヘラ切り。223は口径10.5cm、底径8cm、器高1.75cm。取上番号No.3。胎土は細かい、色調は白褐色～黄褐色。焼成良好。底部は回転ヘラ切り。時期は11世紀後半である。

#### SK-8

調査区西側で検出した。覆土は暗褐色砂で、二度目の精査時に検出した。掘り下げたところ深さ25cm幅1.2m以上を測る土坑となった。遺物の出土はほとんどなく、地山砂層の凹みに包含層が堆積したという可能性もある。

## 23区

### 1. 概要

吉塚通線道路部分の調査。西鉄バス吉塚営業所と博多サンヒルズホテルの間に位置し、筥崎区画整理の調査区では最南端にある。

2005年5月6日土木局と現地協議を行う。廃土は場内処理をする必要があるため、調査区を東西二つに分割して反転を行うこととなった。5月9日、バックホウによる西半の表土剥ぎを行った。表土剥ぎの後、作業員を入れ西半調査開始し、遺構掘削・写真撮影・遺構測量を行った。5月27日、西半全景の写真撮影を行う。5月30日西半調査終了。5月31日～6月2日、バックホウによる土砂反転を行う。東半調査開始。6月17日東半全景写真撮影を行う。6月20日東半調査終了。6月21日～6月22日、バックホウによる埋め戻しを行う。6月23日、機材撤収。6月24日ユニット撤去。6月27日、借損機材を返却して調査を終了した。

23区西半は搅乱が半分近くを占め、遺構はピットと溝のみであった。23区東半は遺構の残存状況が良好で、方形竪穴状遺構3基と溝1条、土壙3基、ピット20前後を検出した。遺物は合計でコンテナ12箱分出土した。

### 2. 遺構と遺物

23区の遺構の覆土は黒褐色砂質土と暗褐色砂の2種類があり、前者が古代末～中世の、後者が古墳時代の遺構覆土である。ただし、後者については遺物の量が少ないこともあり、遺構か否かの判断がつきづらい。23区の調査はまず遺構検出した後、黒褐色覆土の遺構から掘削し、写真撮影および測量を行う。次いで再度精査し、地山の明褐色砂層より暗い部分を掘削し、写真撮影および測量を行う、という遺構面が2面ある跡遺と同様の手順を踏んだ。2度目の掘削で、検出した暗褐色砂部分のうち、遺物が少量でも出土したものは遺構として取り扱っている。

23区は東西で土砂を反転して調査したが、担当者の指示ミスで東半と西半との間に50cmほどの空白を生じさせることになった。西半埋め戻し時に、遺構の上端ラインのみ確認したが、この部分の遺構覆土を掘ることはできなかった。

23区では、発掘調査時点では、遺構にはS-1から、ピットにはP-1から順に遺構名を付して遺物の取り上げを行った。本報告ではSのあとに遺構の種類を示す記号を付し、SC-1のように示す。

本報告ではまず古墳時代の遺構、古代末～中世の遺構、次いで時期不明の遺構の順に記述を行った。古墳時代の遺構では土坑（SK）、遺構外出土遺物の記述を行った。古代末～中世の遺構では方形竪穴状遺構（SC）、溝（SD）、井戸（SE）と遺構を示す記号のアルファベット順に、記述を行った。時期不明の遺構では土坑（SK）の記述を行った。

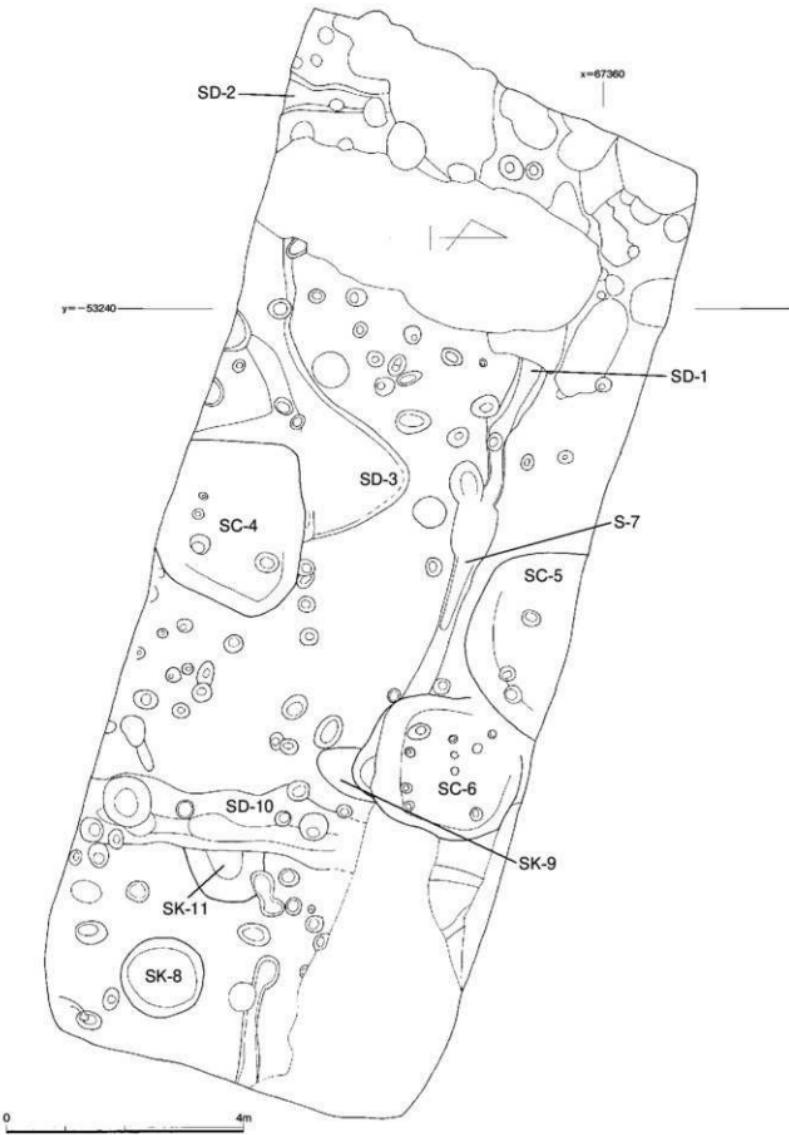
#### 古墳時代

##### 土坑（SK）

###### SK-9（第48図 PL33-2）

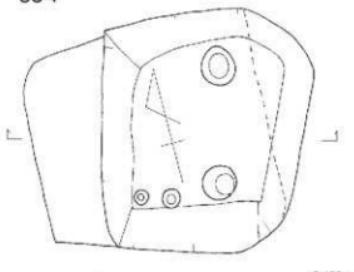
調査区東半で検出した。北側をSC-6に切られている。長径1.4m以上、短径1.0mの長楕円形を呈する土壙。主軸N11° E。深さ0.45mを測る。覆土は暗褐色～黒褐色砂で、しまりはない。南側小口部から古式土師器高杯（218）が出土した。また遺構覆土から瓦器碗（226）が出土した。

218は口径18.7（復元）cm、脚部径：12cm、高さ：6.5cm、坏身深：4cm、器高12.1（復元）cm。取上

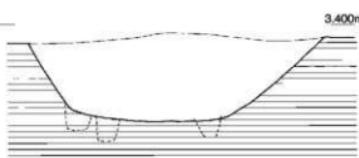
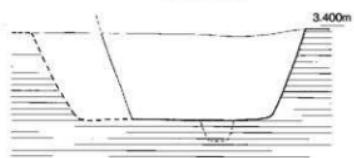
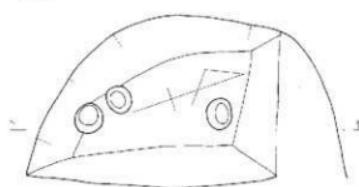


第47図 箱崎遺跡第49次調査23区遺構配置図 (1/80)

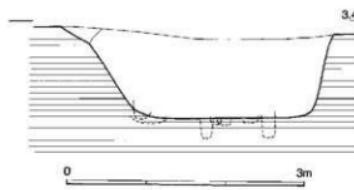
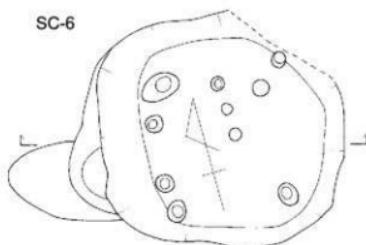
SC-4



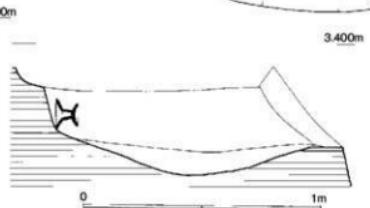
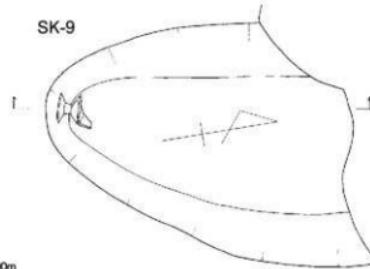
SC-5



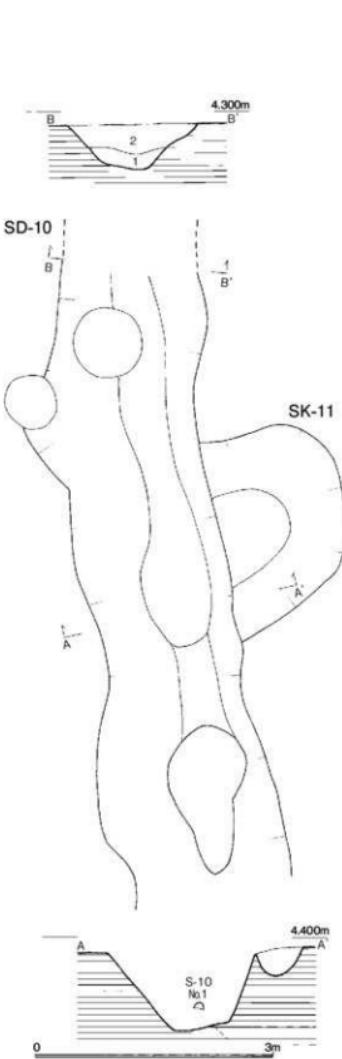
SC-6



SK-9



第48図 SC-4・5・6・SK-9実測図 (1/60・1/20)



第49図 SD-10・SK-11実測図および土層図 (1/60)

番号No.1。色調は赤褐色～黄橙色、底面：黄橙色。226は口径17.4cm、底径7.1cm、器高5.7cm。胎土は緻密、色調は灰色。焼成良好。底部はヘラ切り。内面に磨きあり、全体に小さな窪みあり（石が弾けた後？）、裏底面に線刻あり。坏部外面ヨコナデ、坏部内面イタナデ、脚部外面タテケズリ後ヨコナデ、脚部内面ヨコケズリ、裾部外面ミガキ、裾部内面ハケ。重藤分類の高坏B類I式であり、時期は重藤編年Ⅲ期である。

#### 遺構外出土遺物（第50図 PL39-1）

調査区西半で検出した。SC-4西側上端より60cm東、調査区南壁面際から古式土師器北陸系複合口縁甕（219）が出土した。胴部のみが潰れた状態であったが、周囲の破片を接合したところ、口縁部～胴部まで復元できた。219にともなう遺構は確認されなかった。

219は口径16（復元）cm、胴径24.8（復元）cm、器高残存高：19cm。取上番号R-1。胎土はやや粗い土（径2mm前後の石英？長石粒含む）。口縁と胴部の一部のみ残存。色調は中：橙色～鈍い黄橙色、外：橙色～黒。焼成良好。外面スス付着。山陰系二重口縁甕の口縁部をもつ甕であり、口縁部内外面ヨコナデ、頭部タテハケ後ヨコナデ、胴部ヨコハケ、胴部内面斜めケズリ。時期は久住編年ⅢB期以降か？

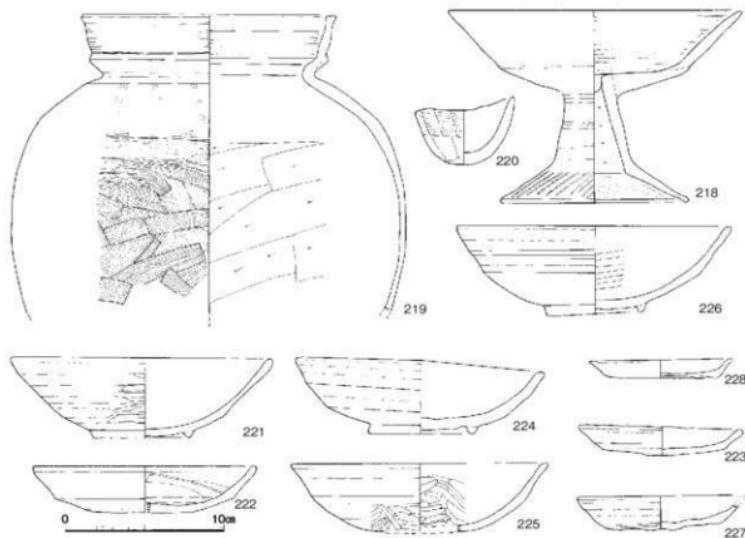
#### 古代末～中世

##### 方形竪穴状遺構（SC）

##### SC-4（第48図 PL32-1）

調査区東半で検出した。一辺2.95m×2.65mの隅丸長方形を呈する、深さ1.21mを測る。主軸N12°-E。土砂反転時のミスにより西側一部未掘。

土師器小皿（228）が出土した。228は口径9.1cm、底径6.9cm、器高1.15cm。取上番



第50図 23区出土遺物実測図 (1/3)

号堀断面No.1。胎土は細かい、色調は黄褐色。焼成良好。底部は回転糸切り。時期は11世紀後半から12世紀である。

#### SC-5 (第48図 PL32-2)

調査区東半で検出した。径4.05mの略円形を呈する、深さ1.07mを測る。土砂反転時のミスにより北側一部未掘。

瓦器碗 (221) が出土した。221は口径16.6cm、底径6.2cm、器高5cm。胎土は緻密（見込み部分に×印あり）、比較的きれいにつくってある、内外面に磨きあり。色調は灰色～白灰色。焼成良好。底部は回転ヘラ切り。

#### SC-6 (第48図 PL32-6)

調査区東半で検出した。一辺3m以上の隅丸方形を呈すると考えられる。深さ1.1mを測る。主軸N-15°-E。

土師器坏 (222)、小皿 (223) が出土した。222は口径14.1cm、底径11.2cm、器高29cm。取上番号No.2。胎土は細かい。色調は黄褐色。焼成良好。底部は回転ヘラ切り。内面にヘラでなでつけたような跡あり、丁寧な作り。223は口径10.5cm、底径8cm、器高1.75cm。取上番号No.3。胎土は細かい、色調は白褐色～黄褐色。焼成良好。底部は回転ヘラ切り。時期は11世紀末～12世紀前半である。

#### 溝 (SD)

#### SD-10 (第49図 PL33-1)

調査区東半で検出した。最大幅1.5、検出長5.85m、深さ0.46mを測る。断面逆台形を呈する。流路

はN-6° -E。覆土は暗褐色砂で、調査区東半二度目の精査時に検出した。

古式土師器手捏土器鉢（220）、土師器坏（227）が出土した。後述するが220はSK-11遺物の可能性がある。220は口径6.3cm、器高4.3cm。取上番号No.1。胎土はやや粗い土、径2mm前後の石英・長石粒含む。色調はにぶい黄橙～黄橙。外面はヨコケズリ、底部外面はケズリ後ナデ、内面ナデ。227は口径10.6cm、底径7.3cm、器高2.2cm。胎土は細かい、色調は黄褐色～白褐色。焼成良好。底部は回転糸切り+板状圧痕。時期は12世紀中頃以降。

### 土坑（SK）

#### SK-8（PL33-3）

調査区東半で検出した。径1.7mの円形を呈し、深さ0.74mを測る。覆土は黒褐色砂質土で炭が多く含まれていた。

瓦器碗（224・225）が出土した。224は口径15.8cm、底径7cm、器高4.5cm。胎土は緻密、色調は灰色。焼成良好。底部はヘラ切り。内面に磨きあり。225は口径16.3cm、底径10.2cm、器高4.5cm。胎土は緻密、色調は白灰色～黒灰色。焼成良好。底部はヘラ切り。ヘラ切り→ヘラ研磨→回転ヘラ削り？内外面に不規則な細い磨きあり。

### 時期不明

#### SK-11（第49図）

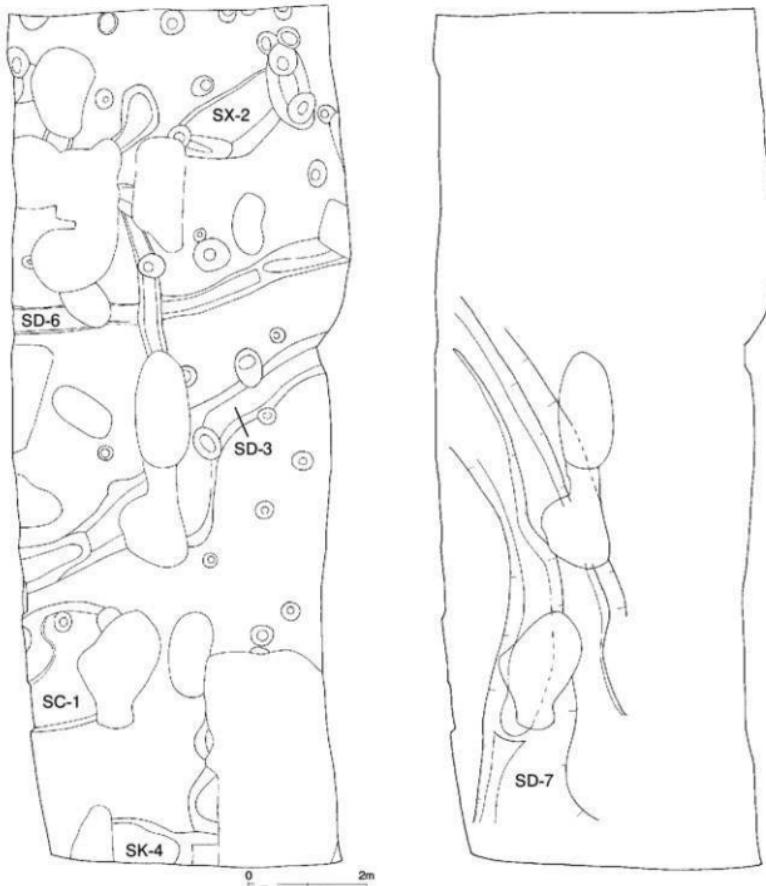
調査区東半で検出した。SD-10に切られている。平面は長軸2.0m短軸1.6mの梢円形が半裁された形状を呈する。深さ64cmを測る。覆土は暗褐色砂で、SD-10覆土よりさらに色調が薄い。調査区東半二度目の精査時に検出した。覆土から遺物は出土しなかった。ただしSD-10No.1の古式土師器手捏土器鉢（220）がすぐ脇から出土しており、本遺構に伴うものである可能性がある。

## 24区

### 1. 概要

妙見通りに面した、菅崎区画整理の個人換地部分。箱崎遺跡第49次調査22区の北側にあたる。

工程の都合上24区・25区の発掘作業を並行して行った。2006年1月6日～1月7日、土木局による地表下1mまでの残土すき取りが行われ、担当者が作業に立ち会った。1月10日より調査開始。調査区西半分の包含層を人力で下げながら遺構面の確認と遺構検出作業を行う。遺構検出の結果、包含層の遺物



第51図 箱崎遺跡第49次調査24区遺構配置図（1/80）

が少なく、遺構面までまだ数十cm下げる必要があることが確認され、省力のため包含層をバックホウによって掘り下げるにとした。1月16日～1月17日バックホウによる調査区東半の表土・包含層掘削を行う。1月18日より、東半の遺構検出と調査区全体の遺構完掘作業を行う。1月26日遺構写真撮影。1月27日～1月30日平面図作成。2月2日、高所作業車からの調査区全景写真撮影を行う。2月7日～2月8日、時期不明遺構SD-7掘り下げ。2月9日、平面図作成。2月10日、高所作業車からの調査区全景写真撮影、およびSD-7全体写真撮影をおこなう。2月13日、遺物・発掘機材引き上げ。2月14日、借損機材返却。2月15日ユニットハウス返却し、調査を終了した。

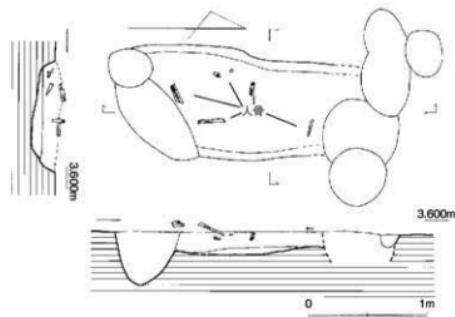
溝5、埋葬遺構1、方形竪穴状遺構1、ピット30を検出した。24区からはコンテナ7箱分の遺物が出土した。なお、24区、25区に関しては国土座標ではなく、周囲の平板測量の結果から第3図に位置を落としている。

## 2. 遺構と遺物

24区の遺構の覆土は黒褐色砂質土と暗褐色砂の2種類があり、19区・23区の成果をふまえると、前者が古代末～中世の、後者が古墳時代の遺構覆土の可能性がある。ただし、後者については遺物の量が少ないこともあり、遺構か否かの判断がつきづらい。24区の調査はまず遺構検出した後、黒褐色覆土の遺構から掘削し、写真撮影および測量を行う。次いで再度精査し、地山の明褐色砂層より暗い部分を掘削し、写真撮影および測量を行う、という遺構面が2面ある遺跡と同様の手順を踏んだ。2度目の掘削で、検出した暗褐色砂部分のうち、遺物が少量でも出土したものには遺構として取り扱っている。

24区では、発掘調査時点では、遺構にはS-1から、ピットにはP-1から順に遺構名を付して遺物の取り上げを行った。本報告ではSのあとに遺構の種類を示す記号を付し、SC-1のように示す。

本報告ではまず古代末～中世の遺構、次いで時期不明の遺構の順に記述を行った。古代末～中世の遺構の中では19区の記述方法にあわせ、最初に基(SX)の記述を行い、その他は方形竪穴状遺構(SC)、溝(SD)、土坑(SK)と遺構を示す記号のアルファベット順に、記述を行った。時期不明の遺構では溝(SD)の記述を行った。



第52図 SX-2実測図 (1/40)

## 古代末～中世

### 墓 (SX)

#### SX-2 (第52図 PL35-1・2)

調査区西半で検出した。人骨片が出土したが、非常に残存状況が悪い。土坑は幅0.95m、長1.7m以上、深さ0.2mを測る。両小口部を擾乱されるが長方形を呈するものと考えられる。南側の骨が大腿骨・脛骨であると考えられ、頭位方向はN-4.5°-Eである。図化可能な遺物の出土はなかった。

### 方形竪穴状遺構 (SC)

#### SC-1 (PL35-3)

調査区東半で検出した。一辺の長さ2.15m、深さ1.03mを測る。全体の形状不明。図化可能な遺物の出土はなかった。

### 溝 (SD)

#### SD-3 (PL35-4)

調査区中央で検出した。幅0.9m、深さ0.5m、検出長5.8m。図化可能な遺物の出土はなかった。

### 土坑 (SK)

#### SK-4 (PL35-5)

調査区東半で検出した。幅0.75m以上、長1.3m以上、深さ0.4mを測る。長方形あるいは長楕円形を呈するものと考えられる。

### 時期不明

### 溝 (SD)

#### SD-7 (第51図右 PL35-6)

調査区東半で検出した。幅1.6m、弧状を呈する。溝が2段状になっている。覆土は暗褐色砂で、調査区東半二度目の精査時に検出した。遺物は全く出土しなかった。箱崎遺跡46次調査21区SD-14に類似している。

## 25区

### 1. 概要

妙見通りに面した、菖崎区画整理の個人換地部分。今年度調査した箱崎遺跡第49次調査22区の南側にある。工程の都合上24区・25区の発掘作業を並行して行った。また、25区には土捨て場が確保できないため、調査区を北半南半に分け土砂を場内反転して調査を行った。1月6日～1月7日、土木局による地表下1mまでの残土すき取りが行われ、担当者が立ち会った。1月10日より調査開始。調査区南半搅乱の人力掘削および、遺構検出を行う。遺構検出の結果、包含層の遺物が少なく、遺構面までまだ数十cm下げる必要があることが確認され、省力のため包含層をバックホウによって掘り下げることとした。1月16日、バックホウによる調査区南半の表土掘削。1月17日、遺構検出作業。1月18日、遺構完掘。調査区南半の全景写真撮影を行う。1月19日、調査区南半の平面図作成作業。1月30日、バックホウによる土砂反転、調査区北半の表土掘削。1月31日、調査区北半の遺構検出作業。2月2日、調査区北半の遺構完掘。2月3日、調査区北半の平面図作成。2月4日、調査区北半の全景写真撮影を行う。2月13日、遺物・発掘機材引き上げ。2月14日、借用機材返却。2月15日、ユニットハウス返却し、調査終了した。

溝1、ピット多数を検出した。ピットの密度は北半に多く、南半はまばらである。調査区南半は大きな搅乱があったために遺構面が大きく削平を受けていた。搅乱からは木製の大型木製電柱が10本前後出土した。近代のものであろう。東側の地山の砂が西側の砂に比べてやや暗い色調だったため、全体に地山面を下げてみたが遺構・遺物は検出されなかった。ピットの一部は掘立柱建物の柱穴であった可能性がある。25区からはコンテナ2箱分の遺物が出土した。なお、24区、25区に関しては国土座標ではなく、周囲の平板測量の結果から第3図に位置を落としている。

### 2. 遺構と遺物

25区では、発掘調査時点では、遺構にはS-1から、ピットにはP-1から順に遺構名を付して遺物の取り上げを行った。本報告ではSのあとに遺構の種類を示す記号を付し、SC-1のように示す。

本報告ではまず古代末～中世の遺構、次いで時期不明の遺構の順に記述を行った。古代末～中世の遺構の中では溝（SD）の記述を行い、遺構外出土遺物の記述を行った。

#### 古代末～中世

##### 溝（SD）

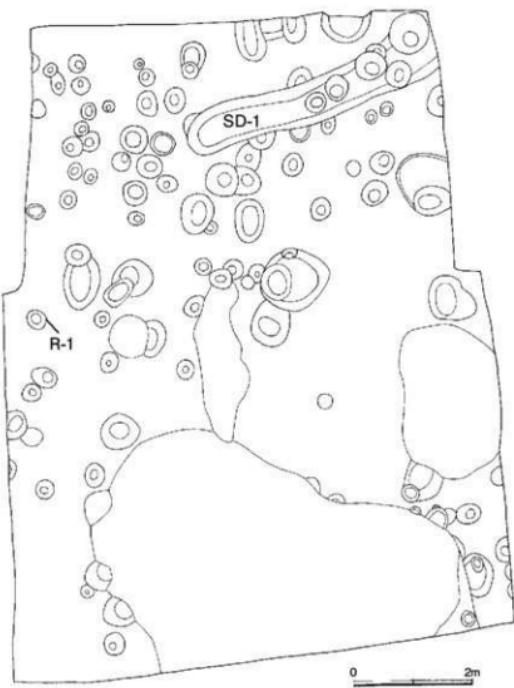
調査区北半で検出した。幅0.7m、深さ0.2m、検出長4.5mを測る。固化可能な遺物は出土しなかった。

##### 柱穴（P）

25区からは比較的多くの柱穴が検出された。復元はできなかつたが、少なくとも2棟以上の掘立柱建物が存在していたようである。

#### 遺構外出土遺物

遺構外より須恵器ミニチュア土器 壺（229）が出土した。229は口径2.9（推定）cm、底径4.9cm、器高5.2cm、胎土は普通～やや粗い、色調は暗灰黄～灰色。焼成普通。



第53図 箱崎遺跡第49次調査25区遺構配置図（1/80）



第54図 25区出土遺物実測図（1/3）

## IV. 結語

今回報告した第40次調査19区、第46次調査21区、第49次調査22区・23区・24区・25区では大別して古墳時代と古代末～中世の2時期の遺構が検出された。最後に本稿で述べた遺構のうち、特徴的な遺構・遺物について若干の考察を行っていただきたい。

### 19区1号墳

1号墳のような、博多湾岸砂丘上に立地し、かつ葺石をもつ円墳として、福岡市東区唐原2丁目地内に所在する唐原（とうのはる）遺跡ST-01とST-02がある（小林1987）。ST-01は墳丘東西径11.6m、南北径11.2m測る。土師器高坏および須恵器蓋杯が周溝内より出土しており、時期は重藤編年IV期（5世紀中頃）と考えられる。ST-02は墳丘東西径13.6m、南北径14.0mを測る。周溝出土遺物は混入が多く時期の特定が難しいが高坏の形状から判断して、時期は重藤編年III期（4世紀末～5世紀前半）の範疇としておきたい。1号墳は前述したように墳丘直径15mを測り、時期は重藤編年IV期である。墳丘規模は1号墳>ST-02>ST-01であるが、差は4mほどであり、ほぼ同規模の円墳と考えて良いだろう。時期は1号墳出土遺物が少ないため前後関係は判断しがたいが、1号墳は唐原遺跡ST-02と近い時期につくられたようである。

墳丘について比較すると、葺石面の傾斜角度が、ST-01は $26\sim29^\circ$  ST-02は $26\sim28^\circ$  であるのに対し、1号墳は $23\sim25^\circ$  と若干緩くなっている。これに対し、腰石を配し、その上に石を敷き詰めるという葺石構築法は共通している。

また、5世紀前半の博多湾岸砂丘上に立地する葺石をもつ前方後円墳として、博多遺跡群第28・31次調査で検出された博多1号墳がある。後円部径38~41m、くびれ部幅13~17mを測り、古墳全長は56m以上と推定されている（吉留1993）。後円部東側で葺石が残存しており、葺石面の傾斜は $22^\circ$  を測り、埴輪を有する。周溝は未確認である。

いずれも5世紀代の古墳であり、葺石をもつ前方後円墳・円墳が、博多湾岸砂丘東部地域で5世紀代に出現する。唐原遺跡は単発で古墳造営が終わっているが、箱崎遺跡・博多遺跡群では前時代からの墳墓が存在し、箱崎では6世紀にも古墳が継続して作られている。このような5世紀代の葺石を持つ古



第55図 1号墳と唐原遺跡ST-01・02 (1/400)

墳は箱崎遺跡のほか、吉塚遺跡、堅粕遺跡などでも今後発見される可能性が考えられる。

まだ類例が少ないが、博多湾岸の砂丘上の古墳についても、福岡平野の古墳時代を考える際に考慮していく必要性があるといえる。

## 古墳・方形周溝墓群の展開

19区では2基の方形周溝墓と2基の古墳、4基の石室状遺構が確認されている。方形周溝墓のうち1号方形周溝墓からは数時期にわたる土器が周溝から出土しているが、両者が作られたのはⅡB期であり、3世紀末～4世紀前半である。その後重藤編年Ⅳ期の5世紀中頃に1号墳が出現し、6世紀後半で2号墳が出現している。これらは互いに重なり合わないように分布しており、少なくとも6世紀代までには1号方形周溝墓の周溝の凹みあるいは墳丘が残存しているような状態であったと考えられる。石室状遺構は1号石室と4号石室は墳丘を持つ古墳の主体部であったと考えられるが、2号、3号石室は、方形周溝墓あるいは古墳に隣接して設けられる埋葬施設であった可能性が考えられる。いずれにしても方形周溝墓、1号墳、2号墳の間にはそれれ1世紀以上の時期差があり、継続して作られる古墳群とは性質を異にしている。古墳時代の箱崎遺跡については西側に遺構が分布するが、西側でもやや北よりは居住域、南よりは墓域と土地利用に差を付けていた可能性がある。

2号方形周溝墓が完結せず、西側周溝が調査区外まで延伸していることや、時期不明ながらも古墳時代遺物をわずかに含む、覆土暗褐色砂の溝（21区SD-14・24区SD-7）が確認されていることなどから、箱崎遺跡南端部の方形周溝墓・古墳の数はまだ増加する可能性が高い。

## 19区出土イスラム陶器

福岡市域では鴻臚館跡、博多遺跡群、多々良込田遺跡からイスラム陶器が出土しており、福岡県内では大宰府跡、筑後国府跡から出土している。いずれも綠釉貼付文壺の一部であり、時期は9～10世紀である（愛知県陶磁資料館1994）。箱崎遺跡出土のイスラム陶器も同様のものと考えられる。他のイスラム陶器出土遺跡が、古代における国家的な施設、あるいは貿易港であるのに対し、箱崎遺跡と多々良込田遺跡という多々良川河口付近の集落遺跡から出土していることは非常に特異に感じる。多々良川河口部も博多遺跡群同様、国際的な貿易港だったという可能性が考えられるが、1片だけの資料であるため断定はできない。今後の資料の蓄積を待ちたい。

## 方形堅穴状遺構

古代末から中世の堅穴式住居は19・21・23区で多く検出され、22・24・25区もふくめた合計で23基あった。時期は11世紀前半～12世紀前半である。このうち1辺が4m前後のもの（19区SC-133など）は堅穴式住居、1辺2m前後で平面方形のものを方形堅穴状遺構と分類する。具体的には19区SC-76・87・100・104・175・183、21区SC-1・4・7・8・9・10、22区SC-1、23区SC-4・5・6、24区SC-1が方形堅穴状遺構である。底面に柱穴をもつもの（19区SC-104）が典型例であるが、柱穴のないもの（19区SC-175）もある。高台付碗や甕が出土する例が多く、また、床面付近から焼土が出土し、炉を有していた可能性がある例もあることから、方形堅穴状遺構は住居跡だったと考えることが最も妥当である。しかし1辺2mで柱穴のないものが住居として機能するか疑問であり、住居というよりは仮設の小

屋、もしくは貯蔵庫などの可能性も考えられる。本書では全て方形堅穴状遺構と呼称したが、将来的には機能の推定できる事例の蓄積を待ち、機能毎に分類する必要がある。現時点では方形堅穴状遺構のうち、床面に柱穴をもち、床面付近に被熱部分があり、高台付碗や壺が出土したものは住居跡であったと考える。

## 中世墓

今回調査した調査区では合計6基の墓が検出された。時期は12世紀後半～14世紀初頭である。人骨の残存状況はいずれも不良で、埋葬方法が完全に判明したものは21区SX-5（木棺墓・側臥屈肢葬・木棺墓・頭位N-35°-W）だけであった。特徴的な副葬品をもつ遺構として19区のSX-1があり、龍泉窯系青磁碗、白磁碗・皿のはか和鏡（双鳥文鏡）と和鏡の下から櫛が出土している。和鏡は箱崎遺跡第21次SX153木棺墓、同SX154土坑墓、同SX456木棺墓、第22次SX0050木棺墓など、箱崎遺跡の中世墓から出土しており、箱崎遺跡の特徴である可能性がある。また19区SX-1の和鏡は櫛を下に置き、鏡を紙で包んだ状態で副葬したことが、保存処理の過程で判明しており、中世墓における和鏡の副葬方法の分かる事例となった。

## 箱崎遺跡南端部の土地利用の変遷

今回調査した箱崎遺跡南端部の主要な遺構は方形周溝墓（3世紀末～4世紀前半）→1号墳（5世紀中頃）→2号墳（6世紀後半代）→断続（7～10世紀）→方形堅穴状遺構（11世紀前半～12世紀前半）→中世墓（12世紀後半～14世紀初頭）と変遷していく。このうち井戸は11世紀～13世紀まで継続する。方形堅穴状遺構の一部が住居であった可能性があるものの、遺構の密度は全体に薄い。この地点は箱崎遺跡の居住域でのあった時期は短く、むしろ墓域として機能していた時期の方が長い。箱崎遺跡南端部は、箱崎遺跡の集落が拡大した時期には集落域に含まれるが、集落が縮小する時期には集落域に含まれなくなるといった、集落の周縁部だったようである。

### 引用文献

- 川添昭二1981「第二章 古代・中世の博多」「中世九州の政治と文化」文献出版  
小林義彦1987『唐原遺跡－墳墓編－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第161集  
尾上元規1993「古墳時代鉄錠の地域性－長圓式鉄錠出現以降の西日本を中心として－」「考古学研究」40-1  
吉留秀敏1993「弥生時代から古墳時代の博多」「法拉噐」第2号  
愛知県陶磁資料館編1994「ペルシア陶器展」「愛知県陶磁資料館  
重藤輝行・西健一郎1995「埋葬施設に見る古墳時代北部北九州の地域性と階層性－東部の前・中期古墳を例として－」「日本考古学」第2号 日本考古学会  
久住猛雄1999「北部九州における庄内式土器併行期の土器様相」「庄内式土器研究」XIV  
廣渡正利1999「笠崎宮史」文献出版

陶磁器・土器器の分類および時期比定には以下の文献を用いた。

- 横田賢次郎・森田勉1978「太宰府出土の輸入中國陶磁器について」「九州歴史資料館研究論集」4  
山本信夫2000「太宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－」太宰府市教育委員会

和鏡の名称・分類については以下の文献を用いた。

- 中野政樹編1969「日本の美術42 和鏡」至文堂

## 箱崎遺跡発掘調査報告書（福岡市教育委員会調査分）

- 第1次 浜石哲也・小畠弘巳・池崎謙二1988「Ⅲ高速鉄道関係箱崎・馬出遺跡群」  
『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ博多－高速鉄道関係調査(4)－』  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第193集
- 第3次 下村智1991「箱崎遺跡2」福岡市埋蔵文化財調査報告書第262集
- 第5次 田中壽夫1992「箱崎3」福岡市埋蔵文化財調査報告書第273集
- 第6・7次 宮井善朗・加藤隆也・中橋孝博1996「箱崎遺跡4」福岡市埋蔵文化財調査報告書第459集
- 第9次 本田浩二郎1998「箱崎遺跡5」福岡市埋蔵文化財調査報告書第550集
- 第10次 田上勇一郎1998「箱崎6」福岡市埋蔵文化財調査報告書第551集
- 第8次 田上勇一郎・久住猛雄・西山めぐみ1999「箱崎7」福岡市埋蔵文化財調査報告書第591集
- 第11・13次 佐藤一郎・榎本義嗣1999「箱崎8」福岡市埋蔵文化財調査報告書第592集
- 第14次 佐藤一郎2000「箱崎9・比戸堀遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第625集
- 第18・19次 長家伸・榎本義嗣・星山洋2001「箱崎10」福岡市埋蔵文化財調査報告書第664集
- 第16次 力武卓治2002「箱崎11」福岡市埋蔵文化財調査報告書第703集
- 第17・23次 長家伸・星山洋2002「箱崎12」福岡市埋蔵文化財調査報告書第704集
- 第21次 榎本義嗣2002「箱崎13」福岡市埋蔵文化財調査報告書第705集
- 第20次 榎本義嗣2003「箱崎14」福岡市埋蔵文化材調査報告書第767集
- 第24次 佐藤一郎2003「箱崎15」福岡市埋蔵文化財調査報告書第768集
- 第15次 大庭康時2004「箱崎16」福岡市埋蔵文化財調査報告書第810集
- 第22次 榎本義嗣2004「箱崎17」福岡市埋蔵文化財調査報告書第811集
- 第27次 中村啓太郎・上角智希2004「箱崎18」福岡市埋蔵文化財調査報告書第812集
- 第29次 松浦一之介2004「箱崎19」福岡市埋蔵文化財調査報告書第813集
- 第29・31次 荒牧宏行2004「箱崎20」福岡市埋蔵文化財報告書第814集
- 第26次 松浦一之介2004「箱崎21」福岡市埋蔵文化財調査報告書第815集
- 第22次 榎本義嗣2005「箱崎22」福岡市埋蔵文化財調査報告書第852集
- 第26次 佐藤一郎2005「箱崎23」福岡市埋蔵文化財調査報告書第853集
- 第39・41・44次 中村啓太郎2005「箱崎24」福岡市埋蔵文化財調査報告書第854集
- 第25・32・42次 杉山富雄・中村啓太郎・赤坂亨2006「箱崎25」福岡市埋蔵文化財調査報告書第896集
- 第30次 松浦一之介2007「箱崎26」福岡市埋蔵文化財調査報告書第914集
- 第30・40・46次 佐藤一郎2007「箱崎27」福岡市埋蔵文化財調査報告書第948集
- 第40・46・49次 赤坂亨2007「箱崎28」福岡市埋蔵文化財調査報告書第949集
- 第12次 榎本義嗣2007「箱崎29」福岡市埋蔵文化財調査報告書第950集
- 第45次 吉武学・中村啓太郎2007「箱崎30」福岡市埋蔵文化財調査報告書第951集
- 第51次 星山洋2007「箱崎31」福岡市埋蔵文化財調査報告書第962集

# 図 版



1. 箱崎遺跡第40次調査  
19区遠景（南から）



2. 箱崎遺跡第40次調査  
19-a区空撮（上が南）



1. 箱崎遺跡第40次調査  
19-b区空撮（上が南）



2. 1号墳（北から）



1. 1号墳葺石西側（南西から）



2. 1号墳葺石北東側（北東から）



1. 1号墳葺石東側（南から）



2. 1号墳R-1,2（西から）



1. 2号墳（東から）



2. 2号墳石室完掘時（東から）



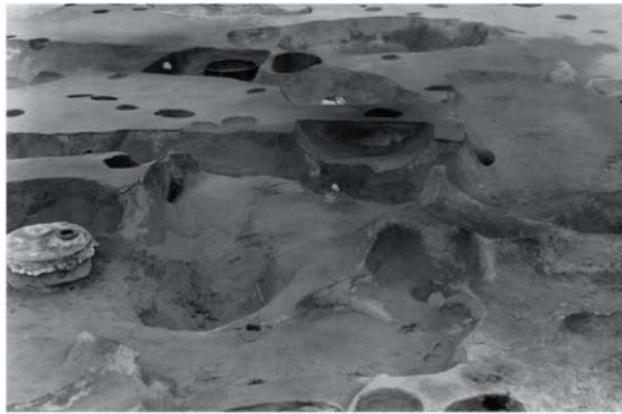
1. 2号墳石室床面（北から）



2. 2号墳石室床面（西から）



3. 2号墳石室床面（東から）



1. 1号方形周溝墓  
北東角部（南から）



2. 1号方形周溝墓  
R-2,3出土状況  
(南東から)



3. 1号方形周溝墓  
R-1出土状況  
(西から)



1. 1号方形周溝墓  
R-5.6出土状況  
(南東から)



2. 1号方形周溝墓  
南側溝 (南東から)



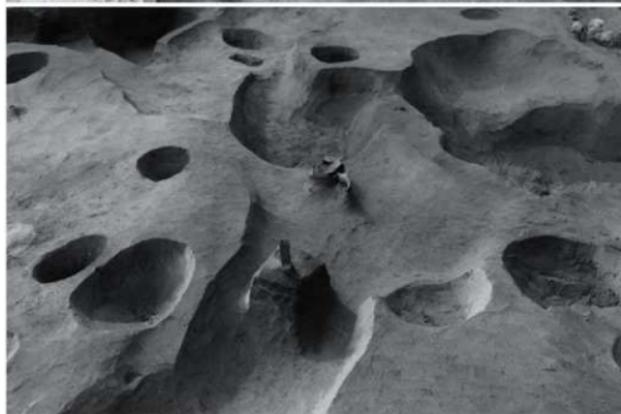
3. 1号方形周溝墓  
南東角部  
土器出土状況  
(北から)



1. 2号方形周溝墓  
東角部 (南西から)



2. 2号方形周溝墓  
南角部 (北から)



3. 2号方形周溝墓  
北側溝 (北東から)



1. 1号石室 床面および腰石（南から）



2. 1号石室検出状況（南から）



3. 1号石室完振状況（南から）



1. 2号石室（西から）



2. 3号石室（南東から）



1. 4号石室（西から）



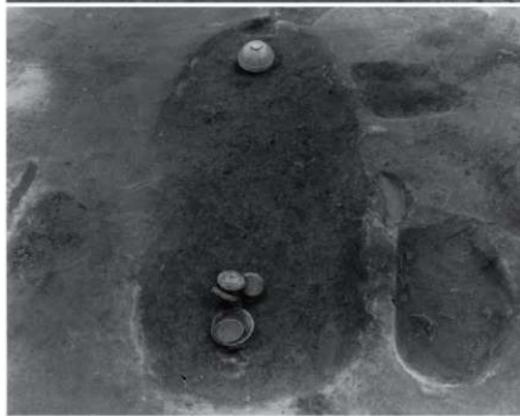
2. SK-51高坏出土状况（南東から）



1. SX-01銹出土状況  
(南から)



2. SX-01完掘状況  
(西から)



3. SX-02 (南から)



1. SC-88 (北から)



2. SC-76 (北から)



3. SC-81 (南から)



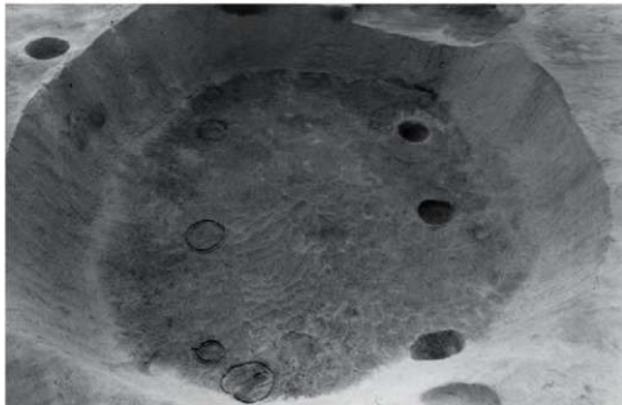
1. SC-81完掘状況  
(南から)



2. SC-100  
(南東から)



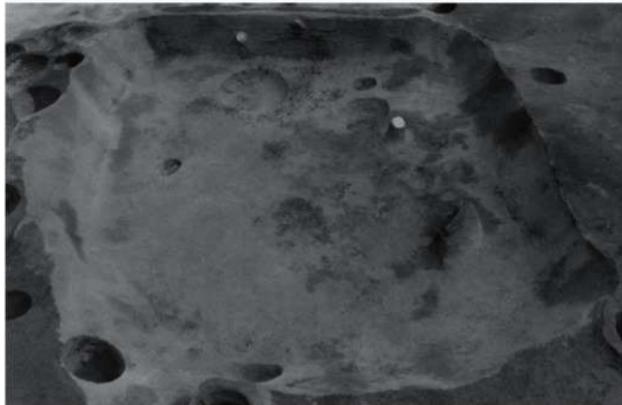
3. SC-100完掘状況  
(東から)



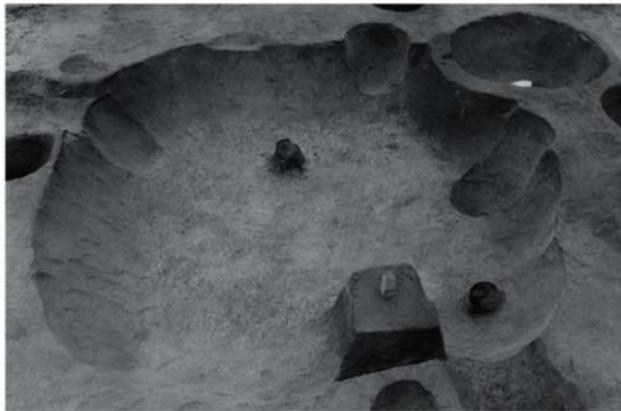
1. SC-104 (東から)



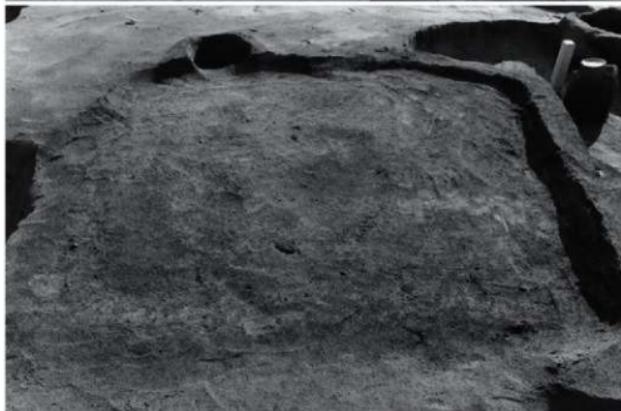
2. SC-132,176  
(北西から)



3. SC-133  
(北西から)



1. SC-175 (西から)



2. SC-183 (西から)



3. SK-17 (北から)



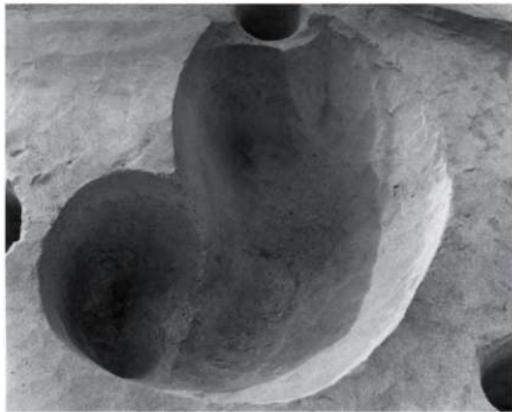
1. SK-51 完振状況  
(南東から)



2. SK-57 (西から)



3. SK-58 (北西から)



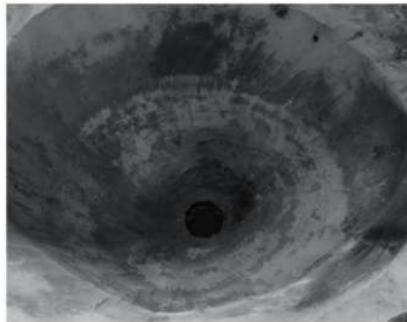
1. SK-74 (南東から)



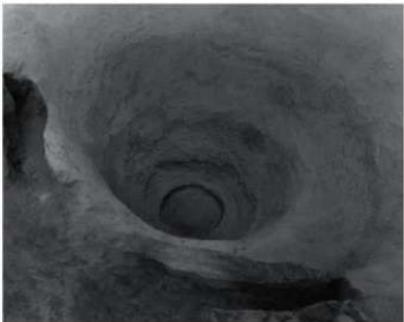
2. P-465 (東から)



3. SE-109,SX-187  
(北から)



1. SE-03 (南から)



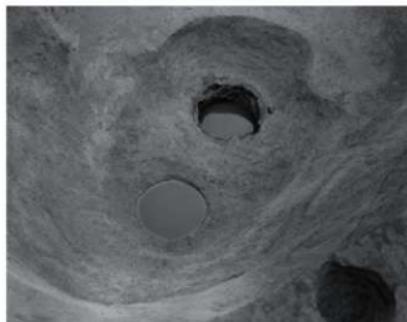
2. SE-11 (東から)



3. SE-22 (北西から)



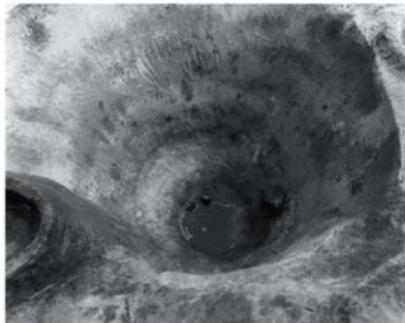
4. SE-23 (南西から)



5. SE-23,25 (西から)



6. SE-23井筒 (西から)



1. SE-24 (北から)



2. SE-26 (北から)



3. SE-27 (南から)



4. SE-49 (北から)



5. SE-56 (西から)



6. SE-70 (北東から)



1. SE-77 (北東から)



2. SE-78 (西から)



3. SE-101 (北から)



4. SE-102 (西から)



5. SE-103 (西から)



6. SE-113 (北西から)



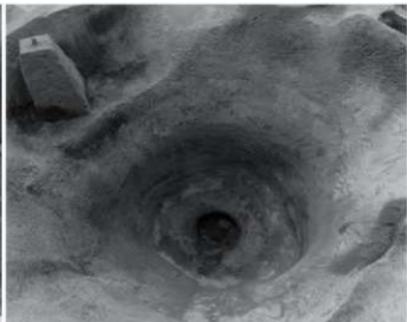
1. SE-116,SC-115 (南東から)



2. SE-117 (北東から)



3. SE-119 (東から)



4. SE-134 (西から)



5. SE-138 (南から)



6. SE-184 (北東から)



1. 21区全景（南から）



2. S-14全景（北から）



1. SX-5人骨  
出土状況  
(南東から)



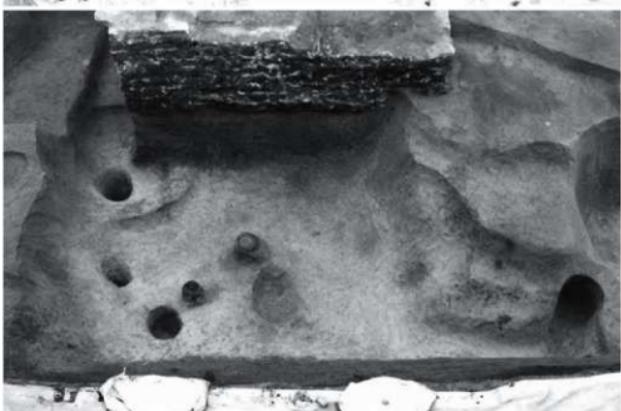
2. SC-1 (西から)



3. SC-4 (東から)



1. SC-6 (西から)



2. SC-7 (西から)



3. SC-8 (南から)



1. SC-9 (北東から)



2. SC-11 (西から)



3. SK-10 (東から)



1. 22区東半第2面全景  
(南から)



2. 22区西半第1面全景  
(北から)



1. SX-2 (西から)



2. SC-1,SE-5  
(西から)



3. SE-7 (東から)



1. 23区西半全景（南東から）



2. 23区西半第2面全景（南東から）



1. 23区東半全景（南東から）



2. 23区東半第2面全景（南東から）



1. SC-4完掘時  
(西から)



2. SC-5完掘時  
(北から)



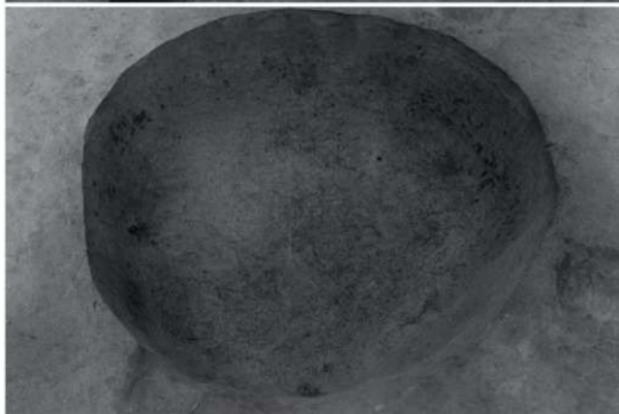
3. SC-6 (北から)



1. SD-10完掘時  
(南から)



2. SK-9遺物  
出土状況 (北から)



3. SK-8完掘時  
(西から)



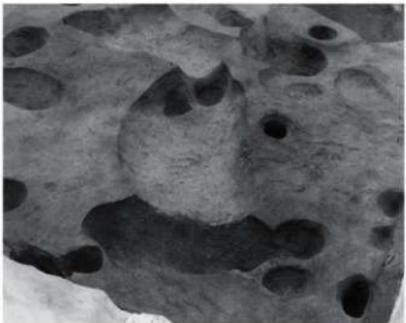
1. 24区第1面空撮（上が南）



2. 24区第2面空撮（上が南）



1. SX-2 (西から)



2. SX-2完掘状況（北東から）



3. SC-1 (北から)



4. SD-3完掘状況（北東から）



5. SK-4 (北から)



6. SD-7 (東から)



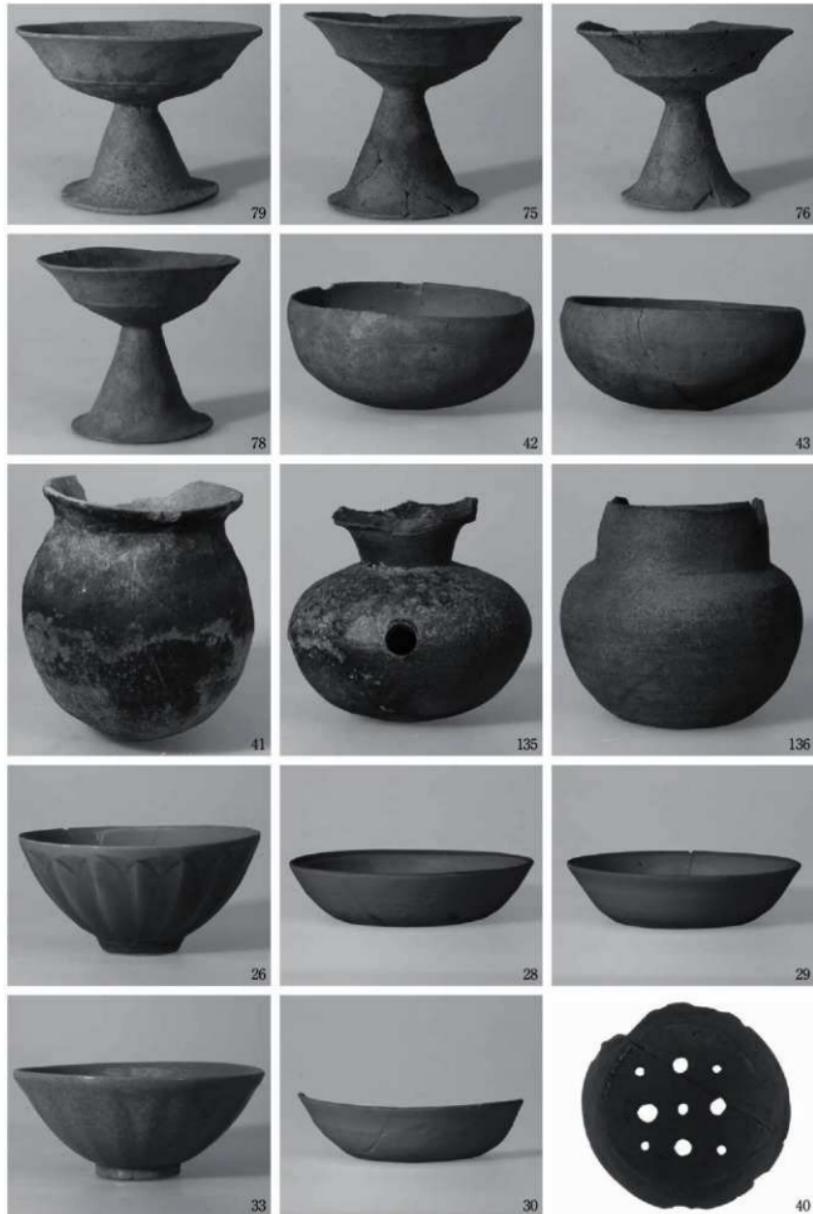
1. 25区南半第2面完掘状況（南東から）



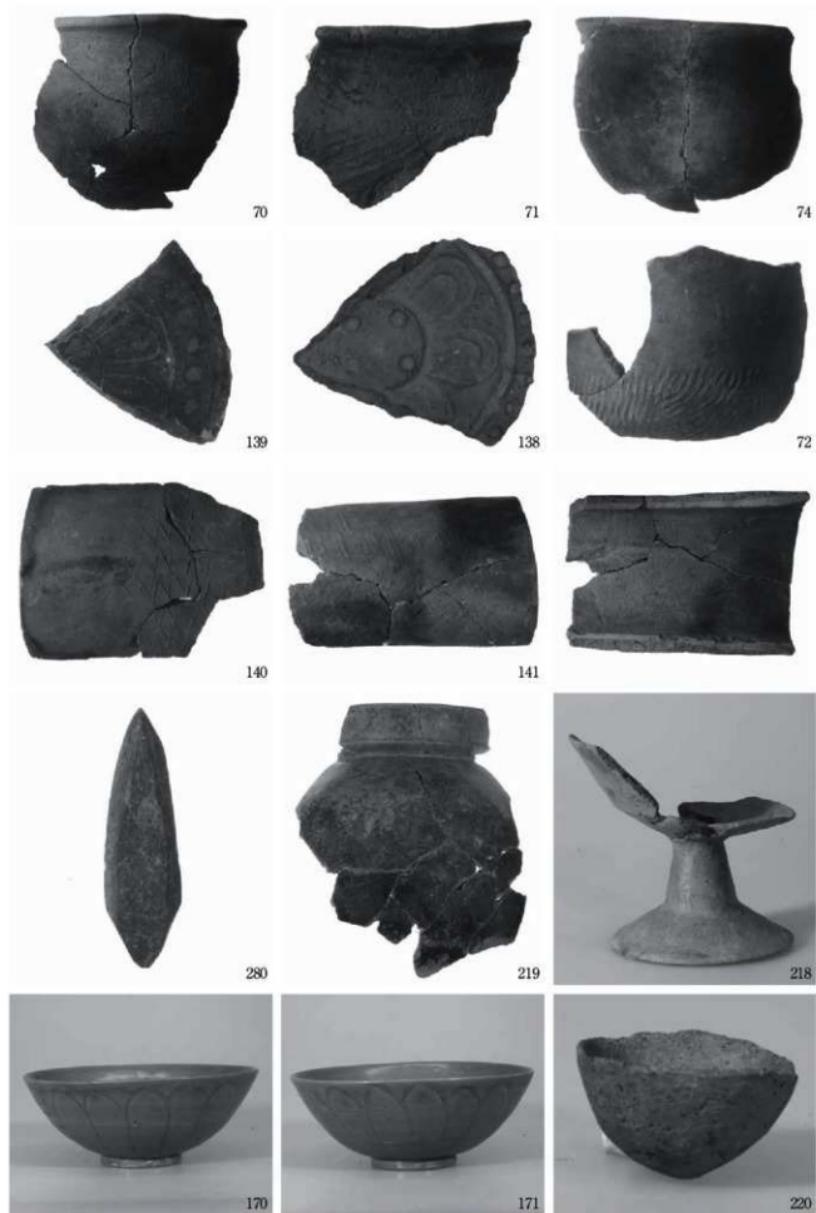
2. 25区北半第2面完掘状況（東から）



1. 19区1・2号墳および1・2号方形周溝墓出土遺物



1. 19区出土遗物



1. 19·21·23区出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	はこざき							
書名	箱崎28 - 苓崎土地区画整理に伴う埋蔵文化財調査報告VI - 箱崎遺跡第40・49次調査報告 -							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	949							
編著者名	赤坂 亨							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1							
発行年月日	西暦2007年3月30日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因	
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
箱崎遺跡 第40次 第46次 第49次	福岡県 福岡市 東区馬出	40130	2639	33° 36° 25°	130° 35°	20030701-20040331 20050221-20050329 20050427-20060215	2167 273.16 495	区画整理
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・主な遺物				特記事項	
箱崎遺跡 第40次 第46次 第49次	集落 古墳	古墳時代 古代末～中世	集落・古墳時代/竪穴式住居1土坑2-土師器+須恵器/古代末～中世/墓6竪穴式住居23溝3 土坑11井戸25-土師器+須恵器+陶器+鐵器+イスラム陶器/時期不明溝2土坑3 古墳・古墳時代/古墳2方形周溝墓2石室状遺構4-土師器+鐵器				1号墳は葺石を持つ円墳	
要約	箱崎遺跡南端部の調査。第40次調査19区では2基の古墳、2基の方形周溝墓が検出され、箱崎遺跡南端部が古墳時代において墓域として用いられたことが明らかになった。特に葺石をもつ5世紀代の円墳、および6世紀代の石室を有する古墳は箱崎遺跡での初めての発見である。また搅乱中からの出土であるが19区からイスラム陶器が出土し、これも箱崎遺跡での初めての発見である。古墳時代以降数世紀の空白期をはさみ、11世紀以降、方形竪穴状遺構や井戸が作られ、集落が形成されていったようである。							

## 箱崎 28

2007年（平成19年）3月30日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1-8-1  
(092)711-4667

印刷 ダイヤモンド印刷株式会社  
福岡市東区松田3-9-32  
(092)621-8711